

縁の衆生」と云ふものがあるならば、彼こそは正しく「無縁の衆生」の代表的なものである。

或人は登山者として今人生の中腹を登つて行く。或人は死骸のやうに、人形のやうに、若くは絞首臺上の首のやうに、人生の絶頂に立つて、登山者の遅さを見下しながら齒をむいて笑つてゐる。立つてゐるところの高さを比較すれば登山者は決して山上の死骸の敵ではない。差別は、唯前者は真正に征服することによつて、中腹に攀ち登り、後者は運び上げられることによつて山上に晒されてゐるところにあるのみである。或人は中腹に在つても生きることがを冀ひ、或人は死骸となつても高き處に居らむことを冀ふ。

人類の到達し得たる最高の立場に易々と身を置いて人生を瞰下してゐる人達の顔に、自分は時として絞首臺上に晒されたる生首の相を見る。彼等の言葉は晒されたる首から來るものゝやうに響が足りない。自分は高い處から落ちて來る彼等の空つばな聲を耳にしながら、若し自分が彼等と等しい高みに攀ち登る日が來たら、自分は決して彼等のやうに生き、彼等のやうに物を云ひはしないだらうと思ふ。彼等の聲は其處に生きてゐる者の聲ではない、其處に死んでゐる者の聲である。

夜、仕事が手につかないので古い手紙を整理する。昔親しかつた人で、心持の離れてしまつた人の多いことを今更に想ひかへした。昔の親みを思ふと今離れてゐる人でも懐かしい。色々の人に世話になつた。世話になつた人に離れてゐる。すまないと思ふ。俺は薄情だと思ふ。知らず識らずの間に俺は多少の人を踏臺にして此處まで來てゐるのだと思ふ。

昔の方が今よりもつと本當に人に親んでゐた。自分の中に立籠る寂しさ冷たさ固さが少かつた。今俺は愛を思ふ。さうして愛し得ざる寂しさに導かれて神に行かうとしてゐる。昔の俺は自分の享樂を思つた。さうしてその實もつと人を愛してゐた。

俺の友情にはセンターに這入つた人と這入らぬ人とがある。長く知合つてゐていつまでも這入らぬ人もゐる。後から來て直に這入つてしまふ人もある。概して云へば俺の心は肌合の濃かな、温かな、柔かな心に向つて開いて來た。俺の生涯にとつて忘れ難き人々の數よ——M、H、F、I、A、N、S、Y、U、K、W、E——父母兄弟の名は云ふまでもない。Tの名も亦云ふまでもない。或人とは喧嘩をして別れた。或人をば俺の方から避けた。或人とは知らぬ間に冷くなつてゐた。或人とは互に思ひながらも遠かつた。或人とは最も近い而も最も越え難い心の溝渠を感じてゐる。

僅か三十年餘の生涯も、魂と魂との遭逢離合を思へば、遠い、ほのかな心持がする。

内面的とは行爲に現れないと云ふことではない。内部より發生すると云ふことである。外面的とは行爲に現れたと云ふことではない。外部から附加されると云ふことである。全的であるには先づ内面的でなければならぬ。内面的とは全的でないといふことではない、頭だけに限ると云ふことではない。外面に發露することを禁止すると云ふことではない。

人を怒らせることによつて、その人を精神的に征服することがある。對手がブツ／＼云ひながらも、自分の云つてやつたことが次第にその魂に沁みてその言動に現れて來るのを見てゐるのはいゝ心持である。對手を咎めようとするのではない。自分の行爲の空しくなかつたことを自ら喜ぶのみである。

五 懊 惱

今日又讀者からの手紙を受取つた。「主よ汝の愛するもの病めり」の一書によりて正に救はれたと云ふのである。

又は俺の本を読んで基督教に對する疑惑から救はれ、新しい方面から基督を見ることが出来るやうになつたと云つて來た。俺の書いたものを讀むと、熱と力と光とが無限に湧くと云つて來た。俺がそれに當らないと云つても彼女はそれを信じない。幾回か議論を往復しても、この點に於いて二人は一致することが出来ない。二人の立場が異つてゐるから、一致することが出来ないのは固より當然である。併し自分の書くものに他人を照す力があるといふのが不思議でならない。

俺は今最も悪い状態にゐる。俺の生活は今最も弛んでだらけてゐる。併しこの時期が過雲のやうに通つてしまつても、自分は救はれてゐると云ふ意識が俺にやつて來ないことは疑ふ餘地がない。俺のだらけてゐる精力が張つて來れば、俺は現在の苦痛によつて生命の緊張することを感ずるであらう。更に一步を進めなければならぬ要求を感ずるであらう。併し力を持ち、光を持ち、救ひを得たといふやうな意識は何時になつて與へられるかわからない。俺に感ぜられるものは、

痛切に感ぜられるものは、唯内面の缺乏のみである。弛んでも張つても、俺は兎に角闇にゐる意識を離れることが出来ない。然るに人は俺によつて「力」を得、「光」を得、「熱」を得たと云ふ。何の意味ぞ、何の意味ぞ。俺にはわからない。

若くは現在俺の中にあるものを所有するのみでも、猶人は新たに得たる歡喜を経験するを得るのか。俺が常に缺乏の意識に苦められてゐるのは、飽くことなき貪慾の深さによるので、俺は實際俺の後から来る者に光と力とを與へることが出来るほど進んでゐるのか。俺はX等の言葉の誠實を疑ふことが出来ない。彼等の言葉の誠實を信ずれば、俺は兎に角彼等には歡喜を與へる力を持つてゐると思はなければならぬ。併しその力は猶俺に自信を與へない、歡喜を與へない、不斷の充實と緊張とを與へない。俺は却つて彼等の方が自分よりも遙かに緊張し、充實し、純粹に感謝し、歡喜してゐることを信じてゐる。俺は自分の力を喜ぶよりも、彼等の前に自分の不純と弛緩とを取づる意識で一杯になつてゐる。假令俺の中に彼等を照す力があるとしても、俺はその故を以て自分を彼等の上に置く氣にはとてもなれない。俺は唯忸怩として自分の前に跪く者の前に跪くばかりである。

若くは俺は救濟の「器」に過ぎないのであるか。俺は救濟の器と云ふ言葉をこんな意味で経験しようとは夢にも思はなかつた。俺には宗教的の意味に於いて力の自覺がない。自ら救はれてゐるといふ自信がない。従つて人を救ひ得ると云ふ自信がない。然るに人は自分から力を受け、自分に導かれて救ひを得たといふ。彼等の自分から受ける力を俺は知らない。彼等の自分から得る救ひを俺は知らない。俺は何時までも何時までも力と救ひとを唯求めてゐる。それだから俺は俺によつて力を得救ひを得た人を羨む。尊敬する。さうして自分はいつまでも悄然として頭を垂れてゐる。救濟の器といふ言葉がこんな皮肉な意味をも持つことが出来ようとは、思ひもよらぬことであつた。

彌勒菩薩は一切の衆生を救つて了ふまで自ら涅槃に入らないと誓つたとかきく。併し俺は誓つたのではなくて取残されるのである。俺を一つの通路として俺の先に行つた鳥を羨ましがつてゐるのである。此の如き憫む可き先覺や指導者が嘗てあつたであらうか、これからあるであらうか、一體あり得るであらうか。

若くは俺はこれまで嘘ばかり云つて來たので、今その罰を受けるのであるか。神はこの嘘吐を道具としてその聖業をなし給ふのであるか。

俺は嘘吐か、嘘吐が俺の本體か。

否、俺の文章は闇にゐるといふ意識によつて緊張してゐるのみである。俺の文章は光を求める心によつて緊張してゐるのみである。俺の世界にはパースペクティヴが開けてゐるのみで、俺は

決して俺の求めてゐるものを現在獲得してゐるとは宣言しなかつた。恐らく俺は嘔吐ぢやあるまい。俺は嘔吐ぢやないやうに思ふ。

然らばこの骨に徹する皮肉は何の意味ぞ。

若くは神この道によつて余を何處かに導かむとするか。

自分は又なんにもわからなくなつた。

六 “Ivan's Nightmare”

(メフィストの言葉)

1

「此處に一人の馬鹿がゐる。

御前は他人の運命に干渉することを慎むと云ふ意味に於いては、極めて神経質な Altruist である。お前は決して他人を損ふに堪へない。併し唯それだけの話である。お前は積極的に他人を愛したこともなければ、他人に善をなしたこともない。お前の「善」は唯凡ての他人に向つて、「君は君として生きてたまへ、僕は關係しないから」と云ふに過ぎない。

さうしてそれはお前が他人から干渉されることを極端に嫌ふ性癖を論理的に徹底させたに過ぎないだらう。お前は他人から少しでも自分に觸られると直にその手をおしのけて、「僕のことには僕に任せ給へ、僕も君のことには干渉しないから」と云ふのである。

その癖お前は寂しいと云つてゐるね。融合の愛を求めると云つてゐるね。併し愛する者が大勢

手を繋いで来て、お前の周囲をぐるりと取巻いたら、お前はどきまぎしやしないかい。お前は本當は一人で寂しくしてゐたいんじゃないのかい。』

2

『お前の生活には何と云つてもまだ内容が足りない。文明史的の意味に於いても、現實的の意味に於いても。』

現實的の生活は空しいだらう。併しお前はまだ碌にその生活を味つてゐないから、一方にはそれに對する未練があるし、一方にはそれを厭ふ心持が濃厚でない。それだから善にしろ惡にしろそれから来る刺戟を生々と受取ることが出来ないのだ。Experimentの態度でもいゝから、もつと戀愛と歡樂と迷ひとを獵つて見ろ。必然的に其處に墜ちて行くのなら一番いゝが、聰明で冷靜に過ぎるお前には中々そんな時期が來さうにもない。構ふものか、Experimentの心持でやつける。さうして誘惑を捜しに出かけて行け。

お前はExperimentを消化してゐない。のみならずそれに接觸してさへゐない。そんなに無學ぢやぞんで御話にならないぢやないか。生意氣を云はずに、もつと落付いて知識を獵つて見ろ。

お前には凡ての經驗に直接にぶつゝかつてゐる餘裕がないから、頭だけで見通し過ぎてゐる。

素質と境遇とが共同してお前を「先が見え過ぎる者」にしてゐる。眞正に征服せずに先ばかり急がしてゐる。お前は貧弱な經驗を統一しようとしすぎる。お前は十分の幅なしにひよろ／＼と背だけが延びてゐる。何と云つてもお前の「宗教的」は怪しい。こちこちに固まつてしまはない前に火にかけて見る。「懷疑」と「利己」と「享樂」との力を呼び醒して「神」に反抗して見る。征服して統一する前に、征服されるものを澤山喚び起して見る。構ふものか、Experimentの積りで、自分の意志で、自分のたくらみを承知しながら、自分の生涯に一つの時期を劃して見る積りで、墮落してみる。

本を読むこと、身懐ひの出るやうな恍惚をさがしに行くこと、さうしながら自分の考へをおしつめて行くこと、考への本當に熟した時に熟果の墜ちるやうに文章をポトリ／＼とおとして行くこと——何といふ楽しい生活の夢だらう。

勿論、お前がさうしてゐる間にも多くの人は苦んでゐるだらう。飢ゑてゐるだらう。併しお前は當分それに眼をつぶつてお前の樂みを——お前の成熟を——求めて行かなくちやならない。さうしてお前がいくらお前の「實驗」に夢中になつたつて、實際今日以上に彼等の運命に冷淡になり得やうがない。お前は他人の未來の不幸を豫想して自分の享樂を控へる意味では今より「方正」でなくなるかも知れないが、現在貧しき者惱める者に對しては、もつと親切で慈悲深くなる

だらう。

お前は罪と過失とによつて、もつと本當に他人を愛することを學んで來なければいけない。』

3

『お前は憐みのために他人の弱點に媚びることをせぬ點に於いては、相應に性格の強さを持つてゐる。お前は友人の誤謬を認め、敵の眞實を承認する點に於いても相應の公正を持つてゐる。お前は泣いて訴へる女に向つて、此點は貴女がいけないと思ふと云ふことが出来る。お前は過失を遂げようとする友人に對して、僕は君に賛成しないと云ふことが出来る。併しそれはその友人を愛する爲にその非を諫めるのか。自分の Konsequenz を愛するために情にほだされた態度をとることを恥づるのか。』

一つにはこれは正しくないと思ふ。二つにはこれはこの人のためにならないと思ふ。三つには今この非に賛成すれば俺の思想と行動とが一貫を缺くと思ふ。世間の手前申譯が立たないとさへ思ふ。お前の心の中にこの三つが悉く働いてゐることは事實だが、孰れが最も先に來るか、孰れが最も重きをなしてゐるか。此處に來ると頗る疑問になる。

Yはお前を主義の人だと云つたね。全くお前は相應に主義の人でもある。併しそれは眞理を愛

するためか、他人を愛するためか、自己を愛するためか。

眼先の見える奴は、自愛のためにも亦主義の人となり得るのだ。』

4

『お前がZに親切にするのは、まさか彼女が金持だからではあるまい。併し彼女が女だからでないかどうかは頗る疑はしい。』

お前は顔を赧くするね。俺はお前がこの告白に堪へないことを知つてゐる。黙つてゐる、黙つてゐる。お前にそれだけの力がつくまでは。

唯お前は彼女の尊敬を自分の Merit として受ける資格がないことを承知してゐればいゝ。

お前がそれほどの不純な心を持つてゐることを承知してゐればいゝ。』

5

『お前は昨夜どんな夢を見た。』

お前は夢の中で、頭をおかつぱにした、五つばかりの、唇が赤ん坊のやうに白く柔かな、土人形のやうな戀人をその前の男から誘惑したらう。さうしてお前はその夢の半ばで飯と火とを持つ

て来てくれた女中に起されたらう。

お前は女中のために戸をあけてやつて、直に床の中に蕨繰り込んで、又その夢を追うた。この夢とこの夢を見る自分の人格とを呪ふ心持は、直にはお前の心に湧いて來なかつた。お前は醜い女たらしの夢から脱却する日の一日も早く來らむことを祈る心持にもならなかつた。お前は半ば見残した楽しい繪でも思ひかへすやうにさつきの夢を思ひかへした。感覺の興味と残酷の喜び(あゝこの蕩兒のみが知る残酷の喜び!)を以てお前は夢の中の畫面を思ひかへした。さうしてそれを貪り味つてから、漸くこれが神を求める者の心持か、これがドン・ホアンを否定するものゝ心持かと思つたのだつた。此處に至つてお前には始めて自ら恥ぢる心持が起つて來たのだつた。お前は「惡」そのものを憎まずに、惡を憎まぬ無恥を恥ぢることを知つてゐるのみだ。お前のハートにはまだ Conversion がちつとも行はれてゐない。お前の「恥」は表面的だ。お前の思想は實に根柢が浅い。

お前は嘗て厭ひしものを喜び、嘗て喜びしものを厭ふハートの轉換を経験してゐない。お前は依然として嘗て喜びしものを喜び、嘗て喜びしものに溺れてゐる。お前は唯、この鬱陶しく、蒸暑く、酷たらしく、悲しく、落付かぬものが自分の究竟の境地でないことを感じてゐるだけだ。お前のやうに蕩兒の興味に生きてゐながら「神を求める者」も凄じい。お前を嘔吐きだと云ふ者

も、お前の思想は生活を遊離してゐるといふ者も、お前を偽善者だと云ふ者も凡て正しいのだ。お前の「誠實」も、お前の思想に於ける「生活の根」も、唯その時々の *Sinnung* を欺かないと云ふ點に於いて意味を持つてゐるだけで、まだ人格的生活には徹してゐない。

お前は暫く物を云ふな。暫く黙つてゐてその蕩兒の仕末をどうにかつけてしまへ。それでなければお前の考へることは、凡て究竟の意味で出鱈目に過ぎない。況してお前のやうな中ぶらりんな馬鹿野郎が書くことが何になるのだ。

(四、春から夏へかけて)

七 病床の傍にて

400

1

今持つてゐるこれんばかりのものがまだ持たぬものの多きに比べれば何になる。救ひを求めてゐる者が未だ救はれないと云ふ意識を前にして、自分の進んで来た路を自慢にする餘裕が何處にあらう。

ないものが欲しい。ないのが苦しい。少し持つてゐるものなんか糞喰へ。

2

お前は跪いたことがあるか。神の前に跪いたことがあるか。お前のあらゆる探究に際して、知られざる者の前に跪いたことがあるか。Frömmigkeitを知らざる者よ。

3

病人が苦み悶えてゐる。併しそれから數尺を隔てた椅子の上には、自分たちが腰をかけて何の苦痛をも感じてゐない。自分は平氣で病人を扇いでやつてゐる。如何に病人の苦痛に同情して手に汗を握つたところで、自分の肉體は病人の苦痛の億分の一をも感ずることが出来ないのである。自分は此五尺の軀の中に閉ぢ込められ、他と絶縁してコンセントレートされてゐる生命の不思議を感ずる。同時に病者と等しく苦痛を感ずることの出来ぬ個體と個體との隔たりに就いて一種の果敢さと寂しさを感じる。

苦んでゐる人を唯見てゐなければならぬ苦しみを何としよう。

4

自然の世界に於ける偶然を通じて、神の意志行はるゝこと能はざるか。

自然の法則を自然の儘に行はれしめて、これを神の啓示とすること能はざるか。

根の緩みたる瓦は落つ——これ自然の法則なり。

落ちたる瓦はその下にあるものを打つ——これ自然の法則なり。

行かむと欲する者は行く——これ心理の法則なり。

或日或時行かむと欲する者が行く時、根のゆるみたる瓦が落ちてその人を打つとき、

401

この自然の法則と心理の法則との契合の偶然。

これを通じて神の啓示作用し得ざるか。

神の意志、神のテレオロギー、作用し得ざるか。

凡ての偶然を一つの意志に統合し得る時、

恰も他人の人格を認めざるを得ざるほど必然に、

神の姿吾等の前に現前するに非ざるか。

5

一々の経験に就いて何者かの意志の啓示を感じず。

推論して「神の意志でなければならぬ」といふ。

Sollen, Müssen が先に立ちて、「神」の姿明かならざるを如何せむ。

「神の意志なり」——

此の如き絶對的認識に達するを得るは孰れの日ぞ。

嗚呼、「かくあり」、「かくあらず」

余は汝の單純なる確信を羨望す。

願くは舊約の世の如く眼のあたりにエホバを見奉らむことを。

6

悪を露はすは偽りて善なるよりよし。

悪を嘆くは悪を露はすよりよし。

悪を憎むは悪を嘆くよりよし。

悪と戦ふは悪を憎むよりよし。

善をなすは悪と戦ふよりよし。

善き人となるは善をなすよりよし。

善き人となれ。

凡てのことこの泉より流れ出でむ。

7

アルコールをとる。

神と人との姿が生々として来る。

今俺は葡萄酒の酒杯をあげて神と女を思つてゐる。

健康のために薬を飲むやうに、

生命の流れを盛にするために酒を飲むのは何故いけないのだ。

酒によつて生命を拵へることは出来ない。

酒によつて生命の障礙を拭ふことは出来る。

今酒杯の中に神と女とが踊らうとする。

8

或る病人の云つた言葉の数々。

眠られない時に病人は云ふ——「Wさん(自分の教へた生徒)のやうな人を澤山袋に入れて、その中に自分も頭をつゝ込んで寝たら眠られさうな気がする。」又云ふ——「お前たちも一緒に眠つておくれ、さうすると私も眠られるから。」××は涙聲で、「ええ、ええ、私たちも一生懸命に眠りますから、貴女も何卒よく眠つて頂戴」と答へる。

或時病人は云ふ——「眷族は大勢だが自分は一人だ。それが不思議で不思議でならないので、

す。」

又看護婦に云ふ……「貴女は誰のために働くのですか。云つて御覽なさい。私のためですつて、それが不思議でならないのですよ。」

愛に於いて祈りを共にする者の慰藉と疑惑と——自分は病人が半ば囁言のやうに云つた此等の言葉を長く忘れることが出来ない。

(四年の暮)

1

一己の私事から出發することを許して戴きたい。

一昨年の夏、早稲田文學社から「實社會に對する我等の態度」と云ふ往復葉書の質問を受取つた時、自分は

「私の今、力を集注しなければならぬところは、どうしても自分自身の事ですから、大體の態度としては、成る可く實社會との深入した葛藤を逃げなければならぬと思つてゐます。併しそれは私の力が足りないからで、凡ての人がさうなくてはならないからではありません。私の力がもつと充ち張つて溢れて來たら、私は十分に腰をすゑて實社會に突掛つて行きたいと思つてゐます。」

と云ふ返事を書いた。然るにC君は翌月の雑誌「反響」にその批評を書いて、

「自分の力がもつと充ち張つてから、實社會へ突掛つて行かうと云ふのは、自分といふものと實社會といふものとを切離して考へ——さう云ふ考へ方も場合によつて必要であるが——てばかりゐるのである。實

社會が自分と云ふものゝ輪廓であり、自分が實社會といふものゝ焦點であるといふ大切な意識を缺いてゐる、自分をよりよくすることによつてのみ、社會をより善くすることが出來、社會をよりよくすることによつてのみ自分をより善くすることが出來ると云ふ大切な信念をつかんでゐないのである。」(當時の「反響」を座右に持合せないから「新日本」に出た反復を引用する。)

と云つた。自分はこの批評が不服だつた。併し自分から云へば此の如く自明なる友人の誤謬を社會の前に指摘することを好まなかつた。故に自分は私信を以てC君に自分の不服を述べ、不明なる點の説明を求めた。併し不幸にして自分はC君から何等の返答をも得ることが出來なかつた。さうして段々C君の書くものゝ中に横目で自分を睨んでゐるやうな物の云ひ振りを認めることが多くなつて來た(尤もこれは自分の僻目であるかも知れない。)故に自分はC君が自分との間に正面から事理を明かにする意志がないものと認めて、それ以來C君の言論を無視することに決心して來た。然るにC君が昨秋、新日本の大正聖代號(?)に於いて、又前に引用したやうな言葉を反復してゐるのを見て、自分は自分の態度に對する此の如き執拗なる誤解の前に黙止してゐられないことを感ずるやうになつた。併し身邊の事情はこの誤解を正してゐる餘裕を自分に與へて呉れなかつた。故に自分は鬱積する感情を抱いて今日まで沈黙して來た。今自分がこの小論を書くのは、固よりC君と論争することを主なる目的とするのではない。併し冒頭先づC君の誤謬を

正すことを以て始めずにはゐられないことを感ずる。

2

一、自分が彼の返事に於いて「自分自身の事」と云つたのは、自己の物質的利益と享樂とを意味するものではないことは断るまでもない。「自分自身の事」とは自己の中に規範（道、理想、信仰）を發見すること、この規範を發見又は實現するに堪へるまでに自己を精鍊すること、を意味する。

又自分が彼の返書に於いて「實社會に突掛つて行く」と云つたその「實社會」とは、個人の多數（Mehrheit der Individuen）を意味するのではなく、一種の合成體（Gesamtheit）を意味してゐることも亦煩く断るまでもない。自分は實社會の名によつて父母兄弟妻子朋友隣人等凡そ他人との關係を意味させはしなかつた。政治によりて統治され、法律によりて支配され、教育によつて訓練せらるゝ一種の團體、具體的に云へば國家、地方自治體、その他職業又は階級等によりて組織せらるゝ Gesamtheiten を意味させたに過ぎなかつた。固より自分は父母や兄弟や朋友隣人などの間に在つても、暫く彼等に——この言葉に含まれてゐる敵對的の意味を除いて——「突掛つて行く」ことを避けて、靜かに、自分自身の胸の中で、彼等に對する自分自身の

感情や思想を反省したり整理したり——これも亦自分自身のことの重要な一内容である——しななければならぬ時期があることを知つてゐる。時々此の如き時期を挟むことによつて、自分と彼等との間が始めて本當に深くなり鞏くなることを知つてゐる。自分は或人の或時期に於いては妻子朋友その他一切の愛するものと離れる意味の遁世も決して無意味でないことを信じてゐる。併し自分に提出された問題はその事ではなかつた。故に自分は唯「實社會」に對する態度だけを答へた。

自分は上述の意味に於ける「自分自身の事」と「實社會の事」とを、自分の現在の努力の焦點を求めるといふ特別な問題に於いて對立させたのである。此の如き對立は、固より事實上社會が自己に影響し、自己の活動が社會に波及するといふ社會學的考察を否定するものではない。又此の如き準備によつて充實し來れる自己の活動が將來實社會と切實なる交渉を開始せずにはゐられないこと、自己實現の最後の段階が萬物の救済に到らざれば完成しないこと——此等の倫理的觀念をも否定するものではない。自分は此の如き將來に關する十分の豫想を以てあの返事を書いた。これが何故に「自分といふものと實社會といふものとを切り離してばかりゐるのである」か。ばかりと云つたのみと云つたりする意味深い言葉を此の如く誇張のために用ゐるのは通俗演說家の詐術として意味があるに過ぎない。苟も責任ある思想家の用うべき言葉では決してないのであ

る。既にC君自身も「さう云ふ考へ方も場合によつて必要である」と云つた。此の場合こそ正にさう云ふ考へ方の必要な場合ではないのか。C君の所謂必要であるとは一體如何なる場合を云ふのか。此處にこそ真正にC君と自分を分つべき問題がある筈である。然るにC君はこの「場合」に對して何等自家の意見を提出することなしに、唯自分と社會とを切り離して考へてばかりゐると自分を誣ひた。自分は此の如き漠然たる批評に對して感謝すべき所以を知らない。

一、自分は現在に於ける自分の努力の焦點を何處に置くべきかを考へた。何事に現在の意識を集注して、何事を將來に期すべきかを考へた。此の如き問題のとり方 (Fragesetzung) に對して「實社會が自分といふもの、輪廓であり、自分が實社會と云ふもの、焦點である」と云ふ「謂ふ所の「大切な意識」が何の解答を與ふるものぞ。此の如き平面的敘述はC君の提唱を待つまでもなく社會學の腐儒が既に云ひ古したところである。意志の焦點を求むるの問題に此の如き平面的敘述を以て答へる者は、飢ゑて飯を食はむとする者に向つて、飯は米で焚いたのだと教へるに等しい。而もC君は米を食ふよりも飯にしようなどと云ふのは、飯は米で焚くと云ふ大切な意識を缺いてゐるのだとさへ誣ひようとするのである。飢ゑて食はむとする者にとつては、生米と飯とは Entweder-oder となる。意志の焦點を求める者にとつては、父と母と、妻と子と、黒子の一寸上と一寸下とも亦 Entweder-oder となる。況んや自己と社會とをや。意志の焦點を求める問

題に於いて自己と社會とを混一せむとする者は、輪廓は焦點でなく、焦點は輪廓でないといふ大切な意識を取逃してゐるものである。問題の中心を捉み損つて、悪い意味の抽象的思辨中に彷徨してゐるものである。

三、C君特愛の信條、「自分をより善くすることによつてのみ、社會をより善くすることが出来る、社會をより善くすることによつてのみ自分をより善くすることが出来る」と云ふ言葉も亦——その中に敬重すべき眞理を含んでゐるにも拘らず——急卒にして曖昧なる概括である。

第一にこの絶句的命題——前後兩聯から成立してゐて、各聯はのみによつて接合されたる二句から成立してゐるから——を常識的に解釋するために、假にC君特愛のみを除いて考へる。「自分をより善くすることによつて社會をより善くすることが出来る。」これには異議がない。「社會をより善くすることによつて自分をより善くすることが出来る。」これにも亦異議がない。確かに社會をよりよくすること、自分をよりよくすること、は交互的である。次に前聯のみを復活して考へる。「自分をよりよくすることによつてのみ社會をよりよくすることが出来る。」これにも亦異議がないやうだ。C君はこの前聯によつて、自己及び周圍の者に就いて、自分の事を棚に上げた社會改良家的淺薄を叱正せむとするのであらう。更に後聯のみを復活して見る。「社會をよりよくすることによつてのみ自分をより善くすることが出来る。」これも又一理はあ

るやうだ。C君はこれによつて周囲の獨善主義者を叱咤されたものであらう。併し此處までのみを復活して來てこの絶句的命題の全體を回顧するとその意味は直ちに無窮のいたちごつごを始める。「自分をよりよくすることによつてのみ社會をよりよくすることが出来る。」故に社會をよりよくせむとする者は先づ自分をよりよくしなければならぬ。併し「社會をよりよくすることによつてのみ自分をよりよくすることが出来る。」故に自分をよりよくせむとする者は先づ社會をよりよくしなければならぬ。而も社會をよりよくするには先づ自己をよりよくし、自己をよりよくするには先づ社會をよりよくせざるべからざるを如何せむ。意志は、努力は、この無窮に循環する輪の何處から手をつけていゝかわからない。最初に社會をよりよくしようとせむか、それは自己をよりよくすることを基礎としてゐないから無意味である。最初に自己をよりよくしようとせむか、それは社會をよりよくすることを基礎としてゐないから無意味である。社會と自己とを同時に同様によりよくしようとせむか。意志は、努力は焦點を求め、現在の意識を一つの點に集注して、或他の事を將來に期することを求める。然るに此處には動機の前後を決すべき何等の根據も與へられてゐない。若くは社會でも自分でも手當り次第のところから出發すべきとせむか。自分は（稿者は）先づ自己をよりよくすることから出發しようとした。さうして「自分をよりよくすることによつてのみ、社會をよりよくすることが出来る、社會をよりよくすることによ

つてのみ自分をよりよくすることが出来る」と云ふ大切な信條をつかんでゐないのである」とされた。さうすれば自分の問題となつて來次第手當り次第に始めることも亦許されてゐないことは明白である。然らば自分は現在の努力の焦點を何處に求むべきであるか、一體にC君は、この信條によつて努力の焦點を求めむとする意志に、如何なる出發點を與へむとするか。恐らくは何の出發點をも與へることが出来まい。この絶句的信條は前聯と後聯との間に於ける重力の關係を明示せざるが故に、さうして各聯の上下二句を誇張を交へたるのみによつて緊密に限定し過ぎたるが故に、最も周匝なるが如くにして、最もフラ／＼したものとなつてしまつた。

假に重心を少しく自己の方に移すとす。社會をよりよくせむとする者は先づ自己をよりよくしなければならぬが、併し自己をよりよくせむとする心の底にも猶社會をよりよくせむとする願ひが（意志の焦點ではないが一つの願望として）含まれてゐなければならぬと云ふ意味だとす。上求菩提の努力の中にも下化衆生の大願を忘れてはならない。獨善主義や主我的な享樂主義は排斥すべきである——自分はC君がその信條に於いて、一つはこの事を云ひたかつたのだと云ふことを疑はない。さうしてそれは確かに敬重すべき眞理である。併し自分は何時この眞理を否定したか。何時この眞理に矛盾することを云つたか。従つてC君はこの眞理を根據として自分の言葉を非難すべき權利を何處から持つて來たか。C君と自分との相違は唯、C君が漠然と並

列させて置く上求菩提下化衆生の二句に就いて、自分は現在の努力の焦點として先づ上求菩提を採り、下化衆生の活動を將來に期したところに在るに過ぎない。或ひは此の如くにして焦點と輪廓とを區別したのは自分の誤謬であるか。若しこれが自分の誤謬であるならば——それならば、意志の焦點を求める時、人は上求菩提か下化衆生か孰れか一つを表にして孰れか一つを裏にすることなしに、兩者を同時に同様に追求することが出来るか。下化衆生の「十分腰を据ゑた」活動を將來に期して先づ上求菩提の險難な途を行かうとする者は主我的享樂者か。それならば、論者は、或人の或時期に於いて上求菩提の願ひと下化衆生の願ひとが意志の焦點として矛盾する悲みを考へたことがないのか。暫く下化衆生の逸る心を抑へて強ひて上求菩提の途に歸り行く者の修業苦を経験したことがないのか。抑へ、退き、待つ者の心と、抑へ、退き、待つことを正しとする決定心とを経験したことがないのか。上求菩提下化衆生は二つの句である。少しくこの二句の内容に滲透して考へたことのある者は、此等の間にも時として嚴肅なる矛盾と相闘とあることを知つてゐる。固より人は何時までも此處に留つてゐる必要はない。或者は既にこの關門を踏破して遠くに行つてゐる。併し苟もこの段階を通過した者は、必ず這般の消息を解して此の如き對立の意義を認めなければならぬ。これを認めることが出来ない者は、未だ上求菩提の一の句の内容にさへ真正に滲透することを得ざる者の言葉いぢりか。若くは徒らに異を樹つることを

快しとする一種の野次馬か。

更に重心を社會に移すとす。上求菩提下化衆生と云ふが如き對句は甚だまだるつこい。衆生を化することを外にして菩提に到るの途はないのである。衆生を救ふ事によつてのみ自己を救ふことが出来るのである。自分はC君があゝの信條の中で一つは（若くは主として）この事を云ひたかつたのだと信じてゐる。これは大なる斷定である。さうしてこの斷定は、事が究竟の救ひに關する限り、恐る可き眞理を含んでゐるに違ひない。自分などはまだまだこの内容に近づくことが出来る程の境地に到達してゐないながらに、猶これを讚嘆するに於いては人後に落ちないことを期してゐるものである。併し究竟の救ひが其處にあるからと云つて、未だ究竟の救ひと云ふやうな段階に到達せざるものが、暫く自己の精鍊と淨化とに専心せむとするのが何故に悪いのであるか。釋尊が道を求めて山に入つたのは誤謬であるか。基督が荒野の試みに逢つたのは無意義であるか。雪山の修道や荒野の試みや、彼等の大なる救世の活動にとつて必須なる準備ではなかつたのか。自分は謙遜なる心を以て自分が未だ「救ひ」の道の麓に彷徨つてゐる者なることを承認する。さうして釋尊の求道に似た意味に於いて——大小の比較をするのではない、意味の類似を主張するのである——自己の救ひを求め、基督の自己鍛鍊に似た意味に於いて——大小の比較をするのではない、意味の類似を主張するのである——自己の鍛鍊に専心しようとするのである。こ

れをさへ「社會をよりよくする事によつてのみ自分をよりよくする事が出来るといふ大切な信念をつかんでゐないのである」と非難する者は衆生濟度の「十分に腰を据ゑた」活動をするにはどれ程の準備と蓄積とが要るかを理解しないものか。「救ひ」の道に於ける自己の現在の位置を正直に反省することを敢てせざる大言壯語の徒か。「衆生」を救ふの道は唯「人」(Der Mensch)を救ふの道のみである。「人」を救ふの道を実證するものは唯「自己」を救ふの道のみである。さうしてあらゆる善業は——あらゆる社會をよりよくする活動は——それが内面的に把握されない限り、「自己」を救ふの道と關りなきこと、猶路傍の木石に等しい。此等の大切な信念を捉んでゐる者は、決して退いて自ら養ふの意義を見誤らない筈である。

併し自分がこの論文を書く主要なる目的は、C君の誤りを匡すことのみではなかつた。社會(前に云つた意味の實社會も、父母兄弟妻子朋友隣人等他人との關係も併せてこれを含ませる)と自己との關係に就いて、自分の現在考へてゐる事を云ひたいのであつた。それをするために、自分は今C君を離れて自分の考へを正面から敘述しなければならぬ。

3

社會は自分を培ふの土壤である。自分を圍繞するの氛圍氣である。社會は自分の環境中最も有

力なる要素である。自分は山に遁れても完全に社會を脱却することが出来ない。海に浮んでも徹底的に社會を超脱することが出来ない。人は社會に對して、或ひは屈服し或ひは妥協し或ひは感謝し或ひは反抗する。孰れにしても人は社會の影響を脱れることが出来ない。

社會は自己實現の地である。人は自己の中に溢れる或物を感じる時、社會に働きかけずにはゐられない。自己以外の物に對して愛を感じる時、社會の中に動き出さずにはゐられない。自己の中に理想の成熟することを感ずる時、これを社會に與へずにはゐられない。自己の周圍に戰慄すべき罪惡を見、自己の中に戦ひに堪へる力あることを感ずる時、これと戦はずにはゐられない。孰れにしても自己の實現は社會に働きかけるにあらざれば完成しない。

人は社會と離れてものを考へることが出来ないか。人は天上の星と地上の花とを考へることが出来る。如何にこれ等のものを考へるか。その考へ方には常に社會の影響があるであらう。併し人が天上の星を考へ、地上の花を考へる時、社會を考へてゐるのではない。

人は凡そ物を離れて自己を考へることが出来ないか。離れて考へることは或ひは出来ないかも知れない。併し他人の事を考へること、他人と自己との關係を考へること、他人との關係に表れたる自己の力を考へること——この三つは混同すべきではない。人は世界を縁として自己を考へることが出来る。さうして世界を縁として自己を考へることは直接に世界そのものを考へ

ることゝは意味を異にする。この意味に於いて世界を考へずに自己を考へることが出来ないことゝは誤謬である。況んや社會をや。世界と社會と自己との間には固より緊密なる連鎖がある。併しそれにも拘らず自己の問題は世界や社會の問題に對して特殊にして獨立せる問題となり得るのである。此時意識の焦點に立つものは唯自己のみである。さうして世界と社會との問題が自らその中に含まれて來るのである。

實行の問題に於いて、社會と自己とを對立させて考へるのは無意味であるか。人は固よりどんなにしても社會を脱れることが出来ない。併し人の努力は社會の全面に擴がらむとする方向と、自己の一點に凝集せむとする方向と、二つの方向をとることが出来る。さうして二つの努力とも或程度までは有効である。故にこの意味に於いて自己と社會とを對立させて考へるのは、決して無意味なことではない。

如何にして自己の準據すべき「道」を發見せむか、如何にして自己の内面に一つの世界を建設せむか、如何にして「道」の實現に堪へるまでに自己を鍛錬せむか——此等の問題に對して決定的の意義を有する者は唯自己だけである、純粹に自己だけである。固より社會と環境とは色々の意味に於いてこの努力と交渉する。自己は先づ社會と世界とから豊富なる材料を吸収しなければならぬ。これを整理しこれを裁斷する方針に就いても、先覺の教に待つところがなければならぬ。

ない。彼を驅りてこの問題に向はしめた動機の中には世界苦の痛切なる印象と衆生濟度の大願とがある。私が發見すべき「道」の少くとも一つの重要な内容は汝の隣人を愛せよといふことではない。とは云へば材料は材料であつて解決ではない。先覺の教は唯參考であつて、その徹底せる識得は獨り自證によるのみである。衆生濟度の大願はその儘で救濟の道を與へるものではない。隣人を愛せよとは愛の對象又は内容が隣人だと云ふ意味であつて、愛せよといふ道そのものは決して隣人から自己に、器から器に水を移すやうにして與へられることが出来ない。凡てこれ等の事を決定するものは唯自己の一心である。この點に於いて、自己は社會と世界とを超越して、天地の間に寥然として唯獨り存在する。この方面に於いても自己に對する社會の權威を承認する者は、靈の獨立と意志の自律と云ふ大切な自覺をとりおとしたものである。

自己をよくせむとする者は努力の焦點を自己の内面に置かなければならない。經驗の蓄積と内化と、人格の精鍊と強化と、此等のことを外にして徹底的に自己を善くするの道は何處にもないのである。社會をよくする事は、身邊の空氣をよくすると略相似た意味に於いて人格の健康を増進する。他人をよくせむとする努力は、肉體の運動と略相似た意味に於いて精神の成長に裨益する。併し自己と社會とは焦點と輪廓との關係あるが故に、自己をよくするには先づ社會をよくしなければならぬなど云ふ者の愚は、他人に藥を飲ませて自分の病ひをなほさうとする者の愚

に等しい。人格の健康の點に於いても、肉體の健康に於けると等しく、自己は自己であつて他人は他人である。

要するに、自己と社會との關係を主として見る時、自分は三種の生活を見る。第一は社會の子としての生活。第二は求道者としての生活。第三は廣義に於ける傳道者としての生活。第一の生活に於いて、社會と自己との關係は、最も同一と呼ばるゝ關係に近い。第二の生活に於いては、自己はその本質に於いて超社會的である。第三の生活に於いては、社會と自己とは相求め相反する。それは男と女との如く、對立として最も緊密なる交渉を保持する。此等三種の生活は固より相錯綜し相交互する。併し生活様式の焦點に着目する時、人はこの三種の生活の差別を見誤ることが出来ない。

4

求道者としての生活にとつて社會の子としての生活は無意義なるか。否、心を虚くして社會の與へるものを受けるとは彼の内界を豊富にする。他人との接觸は彼に思ひもかけぬ内省と思索と鍛鍊との機會を與へる。久しく社會と遠かることによつて、彼の材料は貧寒となり、彼の内界は稀薄となる。

求道者としての生活にとつて傳道者としての生活は無意義なるか。否、苟も持てる者はこれを與へることによつて初めて實證される。金を持てる者は金を與へ、食を持てる者は食を與へることによつて、彼は己れ自らの靈に何者かの與へられることを覺える。少しの眞理を持つ者はその少しの眞理を他人に傳へることによつて自らよりよくなる。此の如くにして傳道の生活は又その求道の生活に反映し來つてこれを強めるのである。

併し社會の子としての生活によつて提供されたる材料を把握し内化して、これを内界の建設に資するの生活は、社會の子としての生活ではなくて求道者としての生活である。自ら持てるものを與へるの努力によつて新たに開けて來た局面に思索と省察とを集中して更に新たなる眞理の獲得に向つて準備するは、傳道者としての生活にあらずして求道者としての生活である。

人の生涯には、社會の與ふる材料の餘りに豊富にして複雑なるが爲に、之に對する自己の統覺が餘りに混亂し、餘りに表面に蔓延してゐることを感ずる時期がある。自己の中にあるものが要するに他人を救ふに足らざることを悟つて、痛切に力の缺乏を感ずる時期がある。此時彼は新しい印象を求めるとも寧ろ新しい原理を求めずにはゐられない。此時彼はその接觸する人と物とを小さく限りて、此等の對象によりて提供される經驗に、惑溺して思ひを潜めずにはゐられない。時として彼は過去の經驗を記憶の中に携へて山林に退き、靜思と内省と苦行との中に目を送らな

ければならぬことさへある。これ比較的純粹なる求道者の生活形式である。

併し此の如くにして彼が修業三昧に耽る間にも、世界はその罪惡と慘苦とを以て流轉を續けて行く。處女は汚されつゝある。貧しき者は飢に泣きつゝある。賤しき者は虐げられつゝある。此の如き事實に面して彼の心には自ら疑惑が湧いて來ない譯に行かない。自分の修業三昧は悲慘なる者を忘れたる私ではないのか。自分は一切を捨て、彼等の救済に走らなければならないのではないのか。併し彼は痛憤に湧きかへりながらも否々と叫び出す。自分の使命は根本的の救ひを齎すことである。自己の中に根本的救済の道を發見すること——これが自分に負はせられたる最大最切の義務である。自分は未だこの救ひの道を體認するに至らない。故に自分には未だ眞正の意味に於いて彼等を救ふ力がない。暫く余の修業三昧を許せ。自分は自分一個のみの救ひを求めてゐるのではない。自分は汝等のために汝等を救ふの途を求めても亦ゐるのである。此の如くにして彼は重い心を抱きながら、一層の強さを以て——衆生の苦をも負ふが故に一層の強さを以て——求道の生活に歸つて行く。さうして彼の財囊の許す限りに於いて、彼の身邊に起る限りに於いて、彼の時間の許す限りに於いて、これやあれや偶然彼の途を横る慘苦に援助の手を藉すことによつて、僅かにその苦しい心を慰める。さうして唇を嚙んで、この慘苦と罪惡との根に斧を加へ得る日の來るのを待ちに待つてゐる。

釋尊は老病死苦を見て心の痛みに堪へなかつた。併し彼はそのために醫者ともならず、政治家ともならず、又國庫を開いて救卹の事に専心することをせせず、衆生と人間とを痛む心を抱いて山に入った。彼は世界苦の根が醫術と社會改良とを以て除却するには餘りに深いことを認めてゐたからである。救済は先づ自證の途によつて獲得されなければならぬことを知つてゐたからである。

併し自分は茲に至つて自ら嘲る者の聲に耳を傾けずにはゐられない。汝が今讀書や研究の生活を送つてゐられるのは、衆生苦に對する汝の感覺が鈍麻してゐるからではないのか。汝は果して世界の慘苦を救はむがために驅け出さうとする心を抑へ抑へしながら、張り詰めた心を以て修業の生活を送つてゐるのか。一體に汝の修業に張詰めた心があるのか。自分はこの詰問に對して、自分にも衆生苦に對する相應の感覺はあると答へることが出来るかも知れない。自分は決して修業の努力を弛緩せる儘に放置して自ら甘んずるものではないと答へることが出来るかも知れない。併し此の如き微弱なる答辯は畢竟何するものぞ。自分の衆生苦に對する感覺は確かに鈍麻してゐるに違ひない。自分の修業慾は確かに弛緩してゐるに違ひない。若しさうでないとするれば、どうして自分のやうな呑氣な生活を送つてゐられるものぞ。自分は理想を負ふ者の謙遜を以てこの詰問の前に首を垂れる。求道の生活を送る者にとつて最も戒むべきは洵に懶惰と利己との混入する

ことである。自分は更に衆生苦に對する感覺を鋭敏にして、修業の慾望を掻き立てなければならぬ。併し、然らば今直ちに傳道の生活に赴くと云はれれば、否々、如何に衆生苦を負ふも、今は雪山に入れる釋尊の心に習つて、忍んで自ら養はなければならぬと自分は答へよう。

固より自ら養ふの途には限りがない。さうして持てるものを與へるのも亦自ら養ふ所以の一つである。人は何處に求道中心の生活と傳道中心の生活との區別を劃すべきか。それが自己の完成する日に非ざるは云ふまでもない。自己完成の日を待たば永劫に輪廻するも遂に傳道の生活に入ることを得ざるは云ふを須むざるところである。然らばその時期は何の時ぞ。内面生活のカーヴが急峻なる角度を描いて廻轉する事を眞實に感知する時。

5

求道の生活と傳道の生活との關係問題と、道そのものは何ぞの問題と——この二つは固より同一の問題ではない。道そのものは何ぞ。道そのものゝ内容と社會との關係如何。

道そのものゝ内容として、自分は（基督の教へに従つて）少くとも二つの事を考へることが出来る——神を愛する事と、隣人を愛することと。

或人は曰ふ、凡ての人皆他人の幸福を圖れば、畢竟その幸福を享受する者は誰ぞと。それは凡

ての人である。幸福を圖つて貰ふ者は、自ら他人の幸福を圖りながらも、亦その隣人によつて自分の幸福を圖つて貰ふことによつて幸福を感じる。さうして他人の幸福を圖る者の最大の幸福は、自分が他人を幸福にすることそのものである。自己の私慾を捨て、他人の幸福に奉仕することそのものである。この間の關係を評して不合理と云ふものゝ愚は、猶億萬年の後に實現せらるべき超人の理想のために現在を犠牲にするは不合理だと云ふものゝ愚に等しい。超人の理想は永遠に實現し盡されることが出来ないかも知れない。併しこの理想は現在の刻々に働いて、現在を犠牲にすることによつて現在を活かしてゐる。他人を幸福にするとは、自己を幸福にしないことで、永遠の理想を抱くとは現在の生活を空虚にすることだと考へるのは、生活經驗に乏しい論理家の空論である。苟も愛したることのある者は、苟も理想を抱いたことのある者は、直ちに此の如き論理的遊戯の空しさを看破するであらう。

隣人に奉仕することは決して論者の云ふが如き空語ではない。併し神の愛と隣人の愛とは常に全然相覆うてゐるか。神を愛する道は隣人を愛する道の外には存在しないか。若くは隣人を愛することを忘却した利那にも猶神を愛するの道はあるか。

人は花に對する時、凝然として花に對する時、花の中に高きもの、美しきもの、換言すれば神の佛を見る。さうして神性の具現に對して云ひ難き愛を感じる。併し人は此の如き觀照の中に没

入する時、社會と他人と他人の愛とを忘れる。彼がそのために（對照として人の醜さを想起し來らざる限り）社會を憎むのでないことは云ふまでもない。彼の心が間もなく世界と人間との愛に擴がり行くべきことも亦云ふまでもない。さうして彼が藝術家ならば、彼は恐くこれを描いて、自分の觀照の幸福を他人にも傳へようとするであらう。併し兎に角に彼の幸福——さうして彼の他人に傳へむとする幸福は——觀照の幸福にある。直接に隣人に働きかけることから來る幸福ではない。若し人が此の如き觀照の生活を繼續するとすれば、彼はその間直接に隣人に働きかける生活から遠からなければならぬ。彼は此の如くにして學術や藝術と云ふが如き *Private* の世界に貢獻する。さうして長く觀照の生活に預る隣人を幸福にする。併しこれも亦隣人に奉仕する生活といふことを得るか。人は自己の中に觀照の幸福を蓄積して隣人をその饗宴に招待するの權利を有するか。

若くは常に持てる者の一切を盡して直接に身邊の者に頒つ事のみ眞正に隣人に奉仕するの生活であるか。餓虎が食を欲すれば身を餓虎に與へ、「人汝の右の頬を批たば亦ほかの頬をも轉じてこれに向け、汝の裏衣をとらむとする者には外服をも亦とらせ、人汝に一里の公役を強ひなば之とともに二里行く」生活のみが眞正に神に協ふの生活であるか。人は他人をよりよくする事——と云ふよりも寧ろ全然自己を捨て、他人の慾望に奉仕すること——によつてのみ眞正に自ら富ます

ことが出来るのか。學者や藝術家はこの信念を捉まざるが故に救はるゝことが少いのか。一切を忘れて他人の難に赴く時、豁然として神はその人の前に現前するのか。

自分は此處に至れば最早何事をも斷定する力がない。自分は唯自己の生活によつて此間の問題に斷案を下した人の前に跪かむことを思ふばかりである。

（五年三月十九日正午）

九 藝術のための藝術と人生のための藝術

428

1
自分がこの覚え書を書くのは主張するためではなくて整理するためである。新しき眞理を發見するためではなくて、古き眞理を一層明瞭に把握するためである。

2
藝術の製作並びに鑑賞は云ふまでもなく人間の一つの活動である。故にそれは一個人の内部生活に於いて、又個人の集團なる社會に於いて、他の諸の活動や目的や理想と交渉するところなきを得ない。此等諸の活動や理想の中に在つて、藝術の製作並びに鑑賞は如何なる位置を占め、如何なる價値を有し、如何なる使命を持つか——藝術は此の如き著眼點から評價されることを拒むことが出来ない。さうして他の凡ての活動と等しく、藝術も亦人生全體の意義と理想とに参加し、究極理想の實現に貢獻する程度に従つてその價値を獲得する。この意味に於いて凡ての藝術が人

生のための藝術でなければならぬことは、繰返して云ふまでもないことである。若し藝術のための藝術と云ふ主張が、此の如き著眼點から藝術を評價する權利を拒むことを意味するならば、それは主張ではなくて片意地と我儘とである。思想ではなくて思想の放棄である。藝術の意義に對する解釋ではなくて、單にがむしやらなる獨斷である。故にこの意義に於ける藝術のための藝術と人生のための藝術との對立は、最初から考察に價しない。それが苟も一つの主張として意義あるものであるためには、藝術のための藝術とは他との比較を拒む獨斷ではなくて、他の諸の價値と比較せる後にも猶藝術の價値の優越又は至上なることを主張するものでなければならぬ。

3
逆に人生のための藝術と云ふ主張が、人生に於ける他の目的の方便として、單に功利的價値のみを藝術に許すことを意味するならば、それは唯商賣人と檢閲官と道學先生との信條であり得るのみである。凡そ方便とはその目的の實現さるゝとき、存在の理由を喪失するものでなければならぬ。然らば藝術とは理想的人生に於いて全然存在の理由を持つてゐないものであるか。我等がこの缺陷多き現實の生活に於いて眞正に「生き」たることの喜びを経験し得る利那は唯藝術以外の領域に於いてのみ許さるゝか。藝術家がその精神の全體を凝集して一つの世界を心裡に創造す

429

るとき、過去の閱歷を回顧してその全體としての意義を把握するとき、心の表皮を掠めて去れる人生と自然との印象を追跡してこれを自己の内面に味會するとき、若くは鑑賞家が雜念を刈除することによつて一つの世界に徹するの喜びを経験するとき、一つの世界に没入して其處に全精神を以て沈潜して生きるとき、又藝術の鑑賞から出發して深き生命感情の心裡に横溢することを感ずるとき——その時我等は唯方便としてのみ意義ある生活をしてゐるのであるか。天成の俗人にあらざる限り何人もさうは思はないであらう。藝術は他の目的に對する方便ではなくてそれ自身に於いて一つの目的である。多くの目的の間に在つて獨自の地歩を占むる一つの目的である。若し藝術のための藝術とは、藝術の此の如き獨自なる價值を主張する意味ならば其處には固より多くの異論あることを許さない。故にこの意味に於いて人生のための藝術と藝術のための藝術とを對立せしむることも、亦甚だ急要な問題ではない。我等は唯明瞭なる自覺を以て、藝術を唯方便としてのみ評價せむとする俗人を防禦すればそれで足りるのである。

4

此の如く、藝術のための藝術とは、藝術と他の價值との比較を拒む意味でもなく、又他の諸の活動と並べてその獨立せる價值を主張するだけの意味でもないとするれば、その眞正の意味は何處

に在るか。この主張の底を流るゝ根本精神は何ものであるか。

自分は、人間の他のあらゆる眞摯なる主張に於けると等しく、此處にも亦よりよき生活に對する憧憬の心を見る。現實の生活は色彩に乏しく變化に乏しく、充實を缺き徹底を缺き、平凡で膚淺で散漫で多苦で煩しい。故にこの生活を超脱してよりよく生きむがために、彼等は藝術の世界に走らむとするのである。藝術の世界に走つて、其處に色彩と變化とに富み、充實し徹底し集注した生活をしようとするのである。此處に彼等のよりよく生きんとする意志の特異なる規定がある。彼等は生の解脱を宗教に求めず、他人に對する奉仕に求めず、現實世界に於ける活動に求めず、偏に生の表現の活動に求める。現實の生に於いて與へられないところを、何等かの途によつて生の表現の中に獲得しようとする。さればこそ「藝術は人生より尊い」のである。「人間は何物でもなくて、製作はあらゆる物」なのである。藝術のための藝術の主張の中には、他の活動と並べて藝術の獨立を主張するやうな理智の要素よりは、更に偏つた——同時に更に人間生活の深處に觸れた呻吟の心がある。それは藝術獨立の主張ではなくて藝術の優越若くは至上の主張である。

5

藝術の爲の藝術の主張が如何によりよき生活に對する憧憬の心に基いてゐるかは、これと、藝術を現實の模倣、人生の再現と稱する主張との關係を一瞥すれば、更に明かとなるであらう。現實の模倣や人生の再現を能事とする藝術は、其處に人生をよりよくする意志が働いてゐない意味に於いて、人生のための藝術ではない。さうして表現を唯一の目的とする意味に於いてそれは確かに一種の藝術のための藝術である。故に一見すれば藝術至上主義と現實模倣主義は藝術のための藝術として相提携するのが當然のやうにも思はれる。然るにこの兩者は末流に至つて時に相合流するのみで、その本流に於いては——外見上時として相提携してゐるやうに見えながらも——寧ろ決然たる對立を成してゐるのは何故であるか。それは藝術至上主義が人生の *Potenziertum* (増盛) を——従つて現實以上の生を求めてゐるに反して、現實模倣主義は前者にとつては厭ふ可き現實生活そのまゝの再現を求めてゐるからである。前者は人生の苦を増盛することによつて人生の無味を脱れ(例之フロベールの「サランボー」)「人生をより善く且つより悪くする」ことによつて人生の平淺を脱れむとするに反して、後者は無味にして平淺なる人生を如實に再現することに依つて所謂「人生の眞」を表現せむとするからである。後者に屬する或者は、我等が日常生活に於いて韻文を以て對話せざるの故を以て、劇中人物の對話を韻文にするの不自然を攻撃する。併し藝術至上主義者は寧ろ日常生活に於いても韻文を以て對話することによつて、「人生を

藝術の模倣」たらしめむとするのである。此の如き二つの主張がその本質上相一致することを得ざるは固より當然である。

現實模倣主義の背景には現實に信頼する樂天主義がなければならぬ。之に反して藝術至上主義の背景は現實に信頼するを得ざる厭世主義である。従つて前者にとつては藝術に於いて人生を増盛する必要がなく、後者にとつては藝術の中に人生を増盛することなしには生きてゐられない。故に前者に比すれば後者は寧ろより多く「人生のための藝術」である。我等は此の如くにして、茲に藝術のための藝術と人生のための藝術との不思議なる合致を發見する。併し少しく熟慮すればそれは何の不思議でもない。藝術至上主義は要するに他の諸の活動を輕視して、藝術を至上の人生とするものだからである。

藝術は現實の鏡ではない——少くとも現實の鏡ばかりではない。それは哲學や宗教と等しく、より善き人生を創造するための一つの機關である。人間が自己の現在を超越して更によりよき現實に進まむとする努力の一つの表現である。故にそれは現實を如實に映出すること——記憶と同様の意味に於いて現在の狀態を寫眞に撮つて置くことのみを以て満足することが出来ない。より善く

生きむとする意志を缺くとき、彼は表現の努力を支持するに足る内面的緊張をさへも保つことが出来ないであらう。

固より藝術が現實超脱の努力に参加するには様々の途がある。これは或ひは "Une nouvelle Héroïse" の著者ルソーの如く、自己の憧憬に姿を興へて、現實の生に於いて發展せしむるに由なかつた内奥の本質を藝術の世界に於いて生かすことであるかも知れない (Vgl. W. Dithely: Das Erlebnis und die Dichtung. S. 217ff.)。或ひは "Leiden des jungen Werthers" の著者ゲーテの如く、夢魔の如く襲ひ來る過去の追憶を脱却して、「大懺悔をした後のやうに自由に楽しい心持になつて、新しい生活を享ける権利」を回復することであるかも知れない。或ひは又 "Salambo" の著者フローベールの如く、人生の苦艱を増盛することによつて平淺と無味とから脱却することであるかも知れない。或ひは又「手」の彫刻者ロダンのやうに、對象の精髓を掴んで其處に萬物の底に流るゝ「心」を發見することであるかも知れない。孰れにしても藝術は現實の人生の奴隸ではなくて、現實以上の人生を我等に示唆するものである。我等を更に生き甲斐のある人生に導くものである。この意味に於いて、「藝術」を「人生」の上に置く思想は當然の理由を持つてゐると云はなければならぬ。藝術至上主義に對して如何なる態度をとるにしても、我等は先づこの事實を承認して置く必要がある。

併し我等が藝術を「人生」以上に置くと云ひ、藝術は「現實」の鏡ではないと云ふとき、その「人生」又は「現實」とは何を意味するか。それは與へられたる人生である、現在の自己に對立する現在の現實である。併し人生には單に與へられたる人生に對して、實現せらる可き人生がある。現實には目前に與へられたる現象に對して、現象の底に潛む本質、現在を導き行く可き理想がある。此の如き本質的理想的現實に對して藝術至上主義は如何なる態度をとるか、藝術のための藝術の主張は、一般により善き生活を求むる憧憬の中に在つて、此處にその特異なる點を持つてゐるのである。

藝術は人間の一つの活動として、それは人生の一部分である。併しそれは又人生の表現として人生そのものに對立する。我等が藝術を人生の上に置くことを許したのは、それがより善き人生の——理想的本質的の人生の表現であるからであつた。併しそれはより善き人生の表現であるが故に、より善き人生そのものよりも猶優越してゐるか。凡そ表現はあらゆる意味に於ける現實以上であるか。我等はより善き人生を藝術のうちに表現することによつて、より善き人生を最も完全に實現したものと云ふことが出来るか。

藝術のための藝術を主張する者と雖も、恐らくはそれはさうだとは云はないであらう。併しより善き人生を現實の世界に實現することは、人生を知らざる青年の夢想であつて、現實の真相を知られる者は人生に此の如き無邪氣なる信頼を懸けることが出來ない。世界は惡に充ちてゐる、人生は苦痛の谷である、故に我等はせめて藝術の世界に於いてより善き生活に生きようとするのである——藝術至上論者は恐らくはかう答へるであらう。藝術はこの世に存在するものゝ中最もよきものである。世界の惡と人生の苦と雖も、藝術の中に表現さるゝことによつて我等に深刻なる歡喜を與へる。藝術を除いて何處に此の如く一切を歡喜に變じ得るものがあるか——彼等の云はんと欲するところは恐らくかうである。故に其處には人生に對する深き懷疑がある。現實に對する底知れぬ絶望がある。藝術至上主義をこの根本情調に於いて理解するとき、自分は彼等の心境に對して一種の深き同情を感じざるを得ない。

8

併し此の如き態度の正否は暫く論外に置くにしても、此の如く現實との應酬を厭離して、表現的活動のみに生活の中心點を置くことは、少くとも可能であるか。藝術のみに生きむとする努力は恰かも夢にのみ生きむとする努力のやうなものである。我等は、夢ならぬ世界に身を置いて夢

にのみ生きることが出來るためには、不斷に夢を防禦する警戒を緩めることが出來ない。現實の襲撃の不時に來らむことを思ふ虞れは我等の夢そのものをさへ不安にする。さうして現實の中に生きて夢といふ果敢ないものを護るの努力は要するに烈風の前に裸火を護らうとするにも似た果敢ない努力である。我等は現實を離れて藝術のみに孤立しようとする人達の生涯にこの類の果敢なさを認めずにはゐられない。

さうして夢にのみ生きむとする努力の支持し難きは單にこれのみではない。現實との交渉を厭ふことによつて夢はそれ自らの食養を失ふ。現實の生活は夢の根である、夢の命である。この根より離るゝとき夢そのものも次第に凋落する。その色彩は褪せ、その内容は貧弱となる。我等は、よき夢を樂まむがためにはよき現實に生きなければならぬ。

藝術は固より夢ではない。それは人間の意欲を根柢とせる凝集せる精神の活動である。併し現實と藝術との關係を云へば、それは現實の生活と夢との關係と酷似してゐる。我等が現實の世界に於いて喜悲し翹望し追求し努力するあらゆる體驗は、藝術の世界に表現せらる可き内容を供給する。現實の中に立つて眞剣に經驗する感情——衣食の煩ひ、愛慾の悲しさ、他人のためにする努力、自己反省の苦しみ等——が次第に缺乏し行くととき、我等の藝術も亦次第に貧弱となる。凡そよき藝術の條件は二重である——よき生活とよき表現と。表現の努力のみを生活の中心とする

とき、我等のその他の生活は空虚となる。鏡を磨くことにのみ専心するとき、鏡に映すべき姿は萎縮して了ふ。我等は固より藝術至上主義の藝術家の或者が、その藝術家的本能に導かれて、巧みにこの陥穽から脱れてゐることを知つてゐる。併し藝術のための藝術を徹底的に遂行するとき、彼等は遂にこのデレンマに陥らざるにはゐられないであらう。

此處に人生のための藝術を主張することの正當なる根據がある。現實の中により善き生活を開拓することは假令如何に困難であらうとも、我等は現實の自己と現實の人生とを根本的に改造することを外にして、徹底的によりよく生きる方法を持つてゐない。藝術も亦よりよき生活の表現として——よりよき生活の一要素としてその最後の存在理由を獲得する。故にそれは人生の諸の活動から孤立することを求めずに、人生の諸の活動と共同してよりよき人生の實現に参加しなければならぬ。かくすることによつて藝術そのものも始めて真正に豊富なる内容を獲得する。人生全體の理想を求めて精進するあらゆる眞摯なる努力と、この努力に伴ふあらゆる複雑なる感情とは始めて藝術の内容となる。さうして藝術のための藝術さへ、そのよりよき生活に對する憧憬の根本精神によつて、此の如き人生のための藝術の一分子となることが出来るのである。

最後に藝術至上主義は現實に對する絶望の外に——寧ろその特殊なる場合として、民衆と社會とに對する絶望を伴つてゐる。人間の諸活動の中に於ける藝術の孤立の外に、人間社會に於ける藝術家の孤立を伴つてゐる。民衆は優秀なる藝術を理解する力がない、藝術は選ばれたる少数者のために存在するものである。故に我等は藝術の製作に際して民衆と社會とを顧慮してゐてはいいない——自分は此の如き主張の中にも猶相當の理由あることを認める。我等が藝術の製作に際して顧慮することを要するものは固より社會でも民衆でもなくて、直接に内面から押し迫つて來る表現の要求である。さうして社會の大多數が優秀なる藝術を理解し得ないのも亦事實であらう。併し我等は此の如くにして製作されたる藝術と、此の如く無鑑識なる社會との距離をこの儘に放置してよいであらうか。民衆を導いてこの優秀なる藝術を理解せしめるやうにす可きか、若くはトルストイのやうに寧ろ民衆の中に健全なる本能の存在を認めて、我等の藝術の偏局と頽廢とを放棄す可きか。孰れにしても兩者の間にある非常なる罅隙を放置して、己れのみ優秀なる、若くは優秀と稱する藝術の享樂に耽るは利己主義ではないであらうか。我等はこの事をも亦考へなければならぬ。自分は今自らこの事に就いて何事をも云ふ資格のないものであることを感じてゐる。故に自分は唯茲に眞摯にして偉大なる一つの靈魂の苦悶を引用してこの覺え書の筆を擱くことにしようと思ふ。それはトルストイの日記の一節である——

「夜通し私は睡らなかつた。絶え間もなく心臓が痛む……父よ、救ひたまへ！ 昨日私は八十になるアキムを、外へ出るにも外套一枚上衣一枚持たないヤレミーチエフの家内を、それから、夫に凍死されて裸麥の刈手もなく、嬰兒を餓死せしめようとしてゐるマリーリヤを見た。……然るに吾々はベイトーエンの解剖をしてゐるのである。私は、神が私をこの生活から釋放してくれることを祈つた。今も再び祈る。さうして苦痛のために叫ぶ。私は混亂した、憂悶した、自分ではどうすることも出来ない。私は自分を、自分の生活を憎む。」

(五、111)

十 不一致の要求

1

トルストイの「藝術とは何ぞや」を讀んで、此人の思索の態度と特質とに就いて多少會得するところがあるやうに思ふ。

トルストイは藝術の定義を下して次のやうに云つた——

「一度感じたる感情を自己の中に喚起して、これを自己の中に喚起したる後、運動や線や色彩や音響や、言語によつて表出される形象などによつて、他人も亦同様の感情を感じるやうにこの感情を再現すること——此處に藝術の活動が成立する。藝術とは、一人の人が、意識的に、或外面的の記號によつて、自己の感じたる感情を他人に傳達することに於て——又他人がこの感情に感染してこれを追感することに於て成立する一つの人間の活動である。」

この定義は極めて周密にして要領を得たる定義である。假令一二の些末なる點に於いて猶訂正すべきところあるにもせよ（自分は藝術論をするつもりでないから、此處にはその問題に觸れな

い、大體に於いて如何なる専門家も異存あることを得ないほど公正にして穩健なる定義である。併しトルストイはこの定義を立するために如何なる破邪を行はなければならなかつたか。彼は獨佛英伊等の美學者四十餘人の美の定義を列挙して悉くこれを排斥しなければならなかつた。悉く此等の學者の説を排斥して、而る後に自分の説を立てなければならなかつた。しかし彼の説は此等の學者の説とそれほどまでに遠隔してゐるか。彼は此等の學者の説の眞精神を捕捉することを得るまでにこれを研究したか。彼は彼等の學説の眞精神を捕捉せむと欲する意志さへも十分に持つてゐたか。彼は此等の學者の説を破壊し——否破壊ではない唯一束にして抛擲しただけである——抛擲しなければあの穩健な藝術の定義に到達することが出来なかつたか。餘人は兎に角として、佛蘭西のギイヨオとの類似の如きは寧ろ自ら強ひて見ないやうに努めた嫌ひさへないか。自分分は此等の點にトルストイの主張と思索との態度の極めて特異なるものあることを認めざるを得ない。トルストイは自ら極めて正しいことを云ふ人である。又極めて鋭敏に他人の不正を發見し得る人である。併し彼の後の方の特質は、時として他人を不正なる者にせむとする意志によつて歪めらるゝことはいないか。他人の中に正しきものを發見せむとする努力が、往々にして自己を他人と異れるものにせむとする欲求によつて裏切られることはないか。愛と正義との要求がその熾烈なる我執によつて覆ひ去らるゝところはないか。

トルストイは、現代の宗教的意識の要求は人と人との内面的一致であると云つた。さうして彼はその藝術論に於いて、この理想に反する故を以て多くの優れたる藝術品を排斥した。併し彼自身藝術論は如何。彼がその中に、熱烈に民衆との一致を求めてゐることは云ふまでもない。とは云へ彼は又宗教的意識の要求に従つて、學者との一致をも求めたと云ふことが出来るか。學者の中にも正しきものを求めて、遂にこれを求め得なかつたところから彼の憤怒は始つてゐるか。彼は學者との間に出来るだけの一致を求めて、到底一致し得ざるところから之と手を別つたか。寧ろ彼の心に求めてゐたものは最初から學者との不一致ではなかつたか。この不一致の要求の故に、彼は彼等の學説の眞精神に透徹する能力を失ひ、彼の味方をも猶その敵と誤認するに至つたのではなかつたか。

トルストイの藝術論の中には、我等の考へなければならぬ多くの問題がある。さうして其處には本當に我等の學ばなければならぬ思想も亦固より少くない。併しトルストイの藝術觀から正當に學ぶ可きものを學ぶためには、先づ不一致の要求と云ふ外衣を剥ぎ去つてその眞髓を見なければならぬ。さうしてトルストイの他の著作を讀むに當つても、亦恐らくは同様の用意が必要である。

我等は時として、餘りに深く一つの事を感じるために、却つて評價のバランスを誤ることがある。多くの偉人が往々凡庸人にさへ極めて明白な誤謬に陥ることがあるのは、此處にその一つの理由を持つてゐるのである。従つて評價の不均衡は必ずしも感受性の鈍さを證明するものではないと同時に、極めて均衡を得た評價と雖も、常に感受性の鋭さを證明することは出来ない。ローマン・ローランはトルストイの音楽の評價に就いて、明瞭にこのことを證據立てた。

トルストイが、その感受性の激しさのために、却つて評價の轉倒に導かれたことは、他の場合にも亦少くないやうに思ふ。如何なる場合にも誤謬は固より誤謬である。併し自分は自分の感受性の鈍さに對する羞恥と、トルストイの激しさに對する尊敬とを感ずることなしに、これを難詰する氣にはなれない。自分はこの點に於いて何處までもトルストイを尊敬する。その誤謬をさへも尊敬する。

併し彼には別に、その感受性の鈍さの故に、貫穿の力の乏しさの故に、誤謬に陥つた點はないであらうか。自分は彼の哲學的思辨に於いて、特に他の哲學者に對する彼の批評に於いて、屢々この疑ひに逢着する。我等がトルストイから學ぶ可きは恐らくはこの方面ではないであらう。こ

の點に於いても、真正にこの人の長所を學ぶために、我等はこの人から獨立した地歩を占めて置かなければならない。

思想界の偉人と偉人との間に相互の理解を缺くこと多きは、人生の痛ましき事實の一つである。此の如き現象は如何にして生ずるか。其處には固より多くの理由がなければならぬ。彼等の世界が餘りに明瞭に構成されてゐるために、他との異同があまりに明白に感ぜられることも一つの理由であらう。その感受性が一方に異常に發展する間に、他方面に對する感受性が不知不識萎縮してしまつてゐるやうなことも亦ないとは限るまい。併し自分は時として、彼等の間に、トルストイの藝術論に於けるが如き不一致の要求——更に甚しきは理解せざらむとする意志を發見することを悲しむ。自分は人間の我執の根の深さを此處に發見して、一種の悲愴なる感情を覺えざるを得ない。

併し彼等はこの我執の外に、彼等自身の中に猶極めて多くのよきものを持つてゐた。さうして彼等のこの我執にさへ——この不一致の要求にさへ、彼等を人生の深處に導く力があつた。故にこれは固より彼等にとつて致命的の缺點ではない。我等は彼等がこの我執の外に持つ——若くは

この我執によつて到達する長所の故に、深く彼等を尊重する。併しこれは彼等に宥すべきことであつて、彼等に學ぶ可きことではない。又學び得可きことでもない。我等は偉人の研究に當つては、特にこの不一致の要求を模倣することを慎まなければならぬ。

我等は時として、この不一致の要求の外に何物をも所持せざる——さうしてこの不一致の要求から何物をも産出することを知らざる、一種不思議なる動物を發見する。彼等の不一致の要求は自己を信ずることの篤さから來たのではなくて、他人の美を成すことを好まざる狭量から來てゐるが故に、其處には矜持すること高き者に特有なる品位がない。力の溢れてゐる者に特有なる一種無邪氣なる寛容がない。傲語と群集本能と、嘲罵と嫉妬と、偽惡と卑劣とが手を繋いで輪舞してゐるところに彼等の不思議なる特質がある。我等は偉人の不一致の要求を學ぶことによつて、この淤泥の中に轉落することを戒めなければならない。

如何なる偉人に在つても不一致を求むる意志は罪惡である。多くの優れたる人はその一生の慘苦によつてこの罪の贖ひをしなければならなかつた。さうして彼等の思想はこの贖罪によつてその深さを増した。而も猶彼等と聖者とを隔てるものがこの傲慢の罪に在るのではないと、誰が保證することが出来るか。

自分は恐らくは Synthesist である。

自分の世界にも固より幾つかの Entweder-Oder がある。併し自分は人生の中に「あれかこれか」を發見するに特に鋭敏なる感覺を持つてゐるか。自分はこれを發見する事に對する一種の要求、一種の歡喜とも名く可きものを持つてゐるか。恐らくはさうではあるまい。自分の「あれかこれか」はやむを得ずして逢着する突當りの壁である。自分は寧ろ Sowohl-als auch を喜ぶ性情を持つてゐるらしい。さうして多くのものを並び行はれさせながら、その中に生きて行く能力をも亦相應に持つてゐるらしい。これは自分の天性である、従つて又自分の長所である。自分はこの長所を自信して他人の Entweder-Oder を模倣することを戒めなければならない。

多くのものを雜然と並列して徒らに取材の豊富なるはフォルケルトの Sowohl-als auch である。併し自分の「あれもこれも」は恐らくはフォルケルトのそれではない。一切の存在の中にその存在の理由を——その固有の價値を認めて悉くこれを生かすこと、個々のものを眞正に認識することによつて普遍に到達すること、凡てのものと共に生きて而も自ら徹底して生きること——自分は自ら修養することによつて Sowohl-als auch のこの途を進んで行くことが出来ることを

信じてゐる。さうしてこの途を進むことによつてトルストイの理解するを得なかつた若干の事物を理解し得るやうになることを信じてゐる。

自分はトルストイに學ばなければならぬ極めて多くのものを持つてゐる。併し自分は根柢に於いて彼と我との間に天稟の相違あることを忘れてはならない。さうしてその相違はあらゆる意味に於いて自分の稟性がトルストイに劣つてゐることを意味するのではない。自分は虚偽の謙遜を離れて敢て正直にこのことを云ふ。自分はトルストイに對するときと雖も、猶自ら恃むところを保持しなければならぬ。

トルストイの藝術論の中には、*Sowohl-als auch* を許すものを強ひて *Entweder-Oder* にしてしまつたところがないとは云はれない。トルストイの愛の缺乏のためにその眞意義が理解されなかつた若干の——恐らくは多くの藝術や思想がないとも亦云はれない。不一致の要求を根據とする「あれかこれか」は、「あれか、これか」の下級なるものである。又愛の缺乏がこの感受性の鋭敏な人をさへ誤謬に導いたことを思へば、我等は更らに一層戒むるところがなければならぬ。トルストイの誤謬を楯として、自己の誤謬に對する寛容を要求するは無恥なる者のみよくするところである。自分はトルストイの藝術論の中に多くの警告を讀まなければならなかつた。

併し彼の藝術論は凡て作爲された「あれかこれか」から成立してゐるか。その中には如何にも

身動きを許さぬ眞正の「あれかこれか」は存在しないか。誰か此の如き獨斷を下す權利を持つてゐよう。彼の藝術論の中には、眞正の「あれかこれか」がある。我等の思想と生活との不徹底を嘲る眞正の「あれかこれか」がある。自分の見るところに従へば、それは第一には本能か文化か、この意味に於ける民衆か貴族かである。彼は誤まれる文化の悩み、醉生する貴族の悩みをもつて、その救ひを民衆の健全なる本能に求めた。彼はデカダンスの嫌惡と、そのデカダンス嫌惡の精神とに於いて、不思議にニイチエと共通の點を持つてゐる。彼が民衆の藝術感を尙ぶは、それが單に多數に共通であるためではなくて、寧ろ人間の精醇なる本性に基く藝術感であるからである。彼の藝術上の民衆主義を解して、單純なる多數決主義とするものは淺い。彼の民衆主義の眞精神は、他の場合に於けるが如く、此處でも亦民衆崇拜である。更に透明なる言語を用ゐれば寧ろ自然と本能との崇拜である。

さうして第二の「あれかこれか」は、自己の享樂か民衆に對する義務かである。これは彼の一生を貫く悲痛なる懸案であつた。理論では解決して實行では解決するを得なかつた——而も死に至るまでその解決を求めてやまなかつた懸案であつた。さうしてそれは此處でも亦その藝術論を貫く主動機となつてゐるのである。我等はこの主動機に同感することなしに、彼れの藝術論の眞精神に觸れることは出来ない。我等がトルストイの如くこの問題を痛切に感ずることを得ない故

を以て、トルストイのあの熾烈なる民衆に對する義務感は誤謬であると云へようか。云ふを敢へてする者は自ら知らざる無恥の輩である。自分はこの點に於いては自分の鈍感を恥づる外に一言もないことを覺える。

この二つの「あれかこれか」を除けば、他は寧ろ枝葉に近いものである。藝術の目的は美か感情の傳達か、よき藝術は農婦の唄かベートーゼンか、此の如きは恐らくは不一致の要求から生れた人爲の二筋道である。我等はこの Entweder-Oder を Sowohl-als auch にかへることを憚る可きではない。

(III, 111)

十一 身邊雜事

1

他人の長所を認めて、これを尊重し、劬り、助成することは、雜り氣のない朗かな喜びである。併し不幸にして我等が眼を開いて他に對するとき、我等の瞳にその影を落すものは他人の長所や美點ばかりではない。その弱點や短所も亦否應なしにその黑影を印象する場合がある。その時この餘儀ない印象を如何に取扱ふ可きか。この問題が自分にとつては一苦勞である。

その缺點が甚しく重大な、致命的なものでない限り、これをむきになつて憤慨したり、これに自分に加へられたる傷害として不愉快がつたりする心持からは、自分は可なり遠ざかつてゐる。この弱點を捕へてそれを玩具にして、調戲つたりくすぐつたりする惡戲氣も、近頃は随分少くなつて來た。自分は對手の弱點を自分一人の腹で呑込んで、黙つて之を看過して了ふか、若くは好意ある微笑を以て、對手がその弱點を始末して行く自然の経過を見護つてゐるかすることが出来るやうに思ふ。さうして必要に應じて適度の忠告と暗示とを與へて行くことが出来るやうに思ふ。

相手の長所を重んじてこれを助成して行くことに中心の態度を置く限り、多少の缺點を寛容することは、そんなに困難なことではない。

併し自分は自分の友人に、彼は俺の缺點を呑み込んで知らん顔をしてゐるといふ印象を與へることを恐れる。自分は無意識の間に、自分が相手の缺點を脅す態度をとつてゐることを恐れる。その人に十分の信頼を寄せてゐる場合でない限り、他人から呑込まれてゐると思ふことは、決して心持のいいものではない。自分は他人から十分に信頼される資格を自分に許すことが出来ないから、自分が相手の缺點を看過して黙つてゐることが、却つて相手に不安の念を與へることを恐れるのである。若しN先生のやうに、相手の弱點に對する不同意を即座に即刻に發表して、而も少しも相互の親愛を傷けずに行くことが出来たら、自分はどんなにせい／＼することであらう。併し現在のところ自分にはそれが出来ない。自分は相手の缺點を感じながら、或時が来るまではこれを自分の腹の中に藏つて置く。さうして或特別に靜かな時を擇んで、出来るだけ和かな言葉を以て相手に忠告する。現在の自分にはこれ以上のことは徳が足りなくて企て及ばないのである。凡そ云へないことがあると云ふことは、人と人との間に在つて決して喜ばしいことではない。然るに自分には時として相手に云へない心持がある。若しこの沈黙が善良な意志から出てゐることを信じ得なかつたら、自分は嘸氣詰りな人に見えることであらう。唯自分の善良な意志を信ずる

ことが出来る人のみ自分の友達となり得るのである。

さうして更に悪いことは、自分の輕々に看過したつもりでゐる缺點が、その實自分の心の底に引掛つて、相手に對する輕蔑若くは怒りを構成してゐる場合があることである。自分は時として、意識的にその人の長所を見ながら——若くは見ようとするが、無意識の間にその人を輕蔑してゐることを發見する。この矛盾を發見することは自分にとつて特に苦い經驗である。

この間Xが來てYの書いたもののお話をしたとき——Yの書いたもののお話を指摘してこれを笑つたとき、自分はどうかしてYを辯護しようとした。一見明かに不合理なYの言葉をどうかして助かるやうに解釋してやらうとした。併し悪いことには、Xのお話をきいたとき自分も高々と笑つたさうだ。而も猶悪いことには、自分は自分が高々と笑つたことにまるで氣が付かずにゐた。自分は言葉でYを辯護して、心でYを笑つたに相違ないのである。氣取らうとして益々桁を踏み外すYの態度を笑つたに相違ないのである。

固よりYを辯護した自分の言葉が虚偽の言葉でないことは、誰よりも自分自身が最もよくこれを知つてゐる。併しそれは如何にも底の浅い言葉である。輕蔑と肩を並べた好意、痛罵にも劣れる好意を、Yが喜び得ないのは固より當然である。自分はこのやうな好意がYと自分との間に好意として通用し得ないことを熟知してゐる。自分はそれが好意として通用し得る日が来るまで、

沈黙して之をしまつて置かなければならない。さうして努めて彼を痛罵する方の一面にエンフアシスを置かなければならない。痛罵の段階を経なければ、自分の彼に對する好意は何時までも生きて來ないであらう。

2

妻は自分の我儘を洩す唯一の抜け路である。不機嫌なとき、残酷なことがしたくなるとき、自分は何時もある對手を妻に求める。そのために我等の間に一種の氣安さがあることは事實である。併し妻の身となつては随分堪へ難いことに違ひない。而も近來の自分には、これを償ふに足る愛があるかどうかさへ頗る疑はしいのである。

このやうな我儘な氣安さの對象とせず、假令他人に對するときのやうな遠慮を以てするのでは、寧ろ一種の抑制と思遣りとを以て之を取扱つた方が正當ではないであらうか。寂寥や焦躁や不機嫌や——凡て内面に喰入る孤獨を男らしく自分一人で堪へ凌いで、せめて妻を励り慰めるだけの隔りを保つて行くのが道ではないであらうか。

(六、一、一)

十二 善と悪

(ある年少の友のために)

1

凡ての人には善心と悪心とがある、世界には純悪の人が存在しないと等しく純善の人も亦存在しない——これは改めて云ふまでもない凡常な眞理である。我等は固よりこの自然主義的眞理に就いて多くの抗議すべきものを持つてゐない。併しこの一つの眞理は、我等の善悪に關する考察の全局に對してどれほどの意義を持つてゐるか。我等は我等の實際生活の上に、この一つの眞理からどれだけの結論を導いて來ることが出来るか。自分は、この點に就いて明瞭な意識を缺いてゐるために、この自明の眞理によつて却つて恐る可き誤謬に導かれた多くの人を見た。故に自分は此等の人々のために、この一つの眞理から正當に導き得べき結論と、正當に導き得可からざる結論とを區別せむとする慾望を感じずにはゐられない。

正當に導き得可からざる結論から初めれば、第一に我等はこの一つの眞理を根據として、善悪

無差別を主張することは出来ない。一人の人格の中に善もあり悪もあるといふ言葉は、既に善悪の差別を豫想するものである。善悪の差別を豫想せずに、人性に於ける善悪の混淆を云々するは無意味である。故に凡ての人に善心と悪心があると云ふ一つの事實は、悪を去り善に就かねばならぬと云ふ良心の負荷を軽減する理由とはならない。寧ろ人性は善悪の混淆なるが故に、悪を去り善に就く義務は一層痛切を加へるのである。

第二に我等はこの一つの眞理を根據として、善人悪人無差別を主張することも亦出来ない。人性が善悪の混淆であると云ふ事實は、云ふまでもなくその間に、より善いものとより悪いものととの差別があることを否定するものでもなく、又人がより善くなりより悪くなる事が出来るといふ事實を否定するものでもない。人には、その素質上既に善人と悪人との比較的差別がある。而も後の條件を考慮の中に入れるとき、我等は更に善に向ふ心と悪に向ふ心と、その方向の上に截然たる對立を認めずにはゐられない。假令二人の人がその素質に於いて同等であり、その善悪混淆の度に於いて等量であると假定しても、その志すところの相違によつて、全然反對の方向をとることも亦あり得るのである。故に我等はその意志の所在により、その努力の方向により、その人格生活の焦點によつて、善人と悪人との間に随分本質的な境界を劃することも亦出来る筈である。茲に二人の人があつて、共に同様の罪過を犯し、共に同様の過誤を重ねることがあるとして

も、之を恥づると恥ぢざると、その過を改めむとするとその非を遂げむとする、この兩様の態度の差別によつて人格の善悪を判ずることは決して不可能のことではない。故に我等は凡ての人に善心と悪心とがあるといふ事實を根據として、善人と悪人との差別を破壊することも亦出来ない。カント以來云ひ古されたやうに、善人とは善き意志である。善き意志によつてその素質の悪を淨煉し、善に向ふ努力によつて善に協ふ本質を獲得したものである。之に反して悪人とは悪き意志である。その無恥なる悪の主張によつて素質の悪を更に倍加し行く者である。茲に同一の空間を相前後して経過する二つの矢があつても、その方向が相反對するとき、その *Destiny* も亦全然相反せずにはゐられない。善人と悪人との差別は此の如きものである。

此の如く、善悪の差別を廢し、善人悪人の區別を棄て、善の主張を無意義にし、惡に甘んずることを教へることが、善悪混淆の人性觀から正當に導き得べき結論でないとするれば、この一つの眞理が我等の實際生活の上に、正當に與へ得べき結論は何であるか。それは第一に、自己の善を輕信することの警戒である。惡は我等の素質の奥に深くその根を卸して容易に刈除することが出来ない。善良な動機から出た善良な行爲さへ微細にこれを解剖すれば惡き動機とからみ合つてゐる。善き人となることは如何に難きか。根柢から淨めらるゝことは如何に稀有であるか。我等は深くこの事を意識して自らいゝ氣になることを戒めなければならない。

第二にそれは他人に對する寛容を教へる。世に純善の人がないとすれば、我等は輕々しく他人に絶對善を要求す可きではない。さうして世に純惡の人がないとすれば、我等は凶惡無慚の徒の中にも猶本性の善を認めてこれを助成することを努めなければならぬ。我等は我等自身が決して純善の人でないことを記憶して、他人に善を責めるにも猶身の程を忘れぬやうにしなければならぬ。我等が凡ての人に善心と惡心とがあるといふ事實から、最初にひき出さなければならぬのは、「汝等のうち罪なきもの先づその女を打て」と云ふ基督の戒めである。

要するに我等がこの一つの眞理から導き出すことが出来るものは、自己の善を輕信しないと云ふ意味に於いても、他人の罪過を無慈悲に責めないといふ意味に於いても、共に最も直接にパリサイの徒に當るものである。然るに無恥なるパリサイの徒は彼等とは正反對の位置に立つこの一つの眞理を、僭越にも却つて自己防禦の用に供する。彼等は——この眞理によつて自己反省と他人に對する寛容とを學ぶことを知らざる彼等は、唯自己の不善を責めらるゝとき、その不善を辯護するために、世には純善の人がないといふことを持つて來るのである。併しこのやうな自己辯護が彼の人格に就いて如何なる證明を與へることになるか、落付いてその意味を省思すれば、彼等と雖も赤面することを禁じ得ないであらう。他人の不善を口實にして自己の不善に甘んじてゐることが出来るほど求善の心弱きか、他人に對して提出する要求を以て自己を律せむとすること

を解せざるほど輕薄であるか、世間の前に不當に自己を正しく見せむとする虛榮心に驅られて、眞實の前に屑く頭を垂れることが出来ないほどに浮誇であるか——三つのうちの孰れかでなければ、この恥づ可き自己辯護を公言することが出来る筈がない。

汝は他を責めること嚴酷に過ぎるといふ非難に對する正當の自己辯護は、自分は嚴酷に他人を非難する資格があるほどに正しいといふことでなければならぬ。さうして汝は不善であるといふ非難に對する正當の自己辯護は、否余は不善ではないといふ主張ばかりである。世に純善の人がないことを理由として自己の不善を辯護するは、要するに逃げながら吠える犬のさもしさに過ぎない。殊に、他を難するとき余はこれを敢てして恥づるところなき正義の士であると揚言したものが、逆に自己の不善を責めらるゝとき世に純善の人がないことを以て遁辭とする如きは、實にさもしさの最も近づく可からざるものである。

重ねて年少の諸友に告ぐ——「汝等パリサイ人の麵麩種を慎め」。

2

偽善とは何ぞ。

自己の惡を隱蔽する者は偽善者であるか。自己の惡を隱蔽することによつて、自分を眞價以上

によき者に見せむと欲する者は固より偽善者である。自分を眞價以上によき者に見せかけることによつて何等かの利得を身に收めむと欲する者は固より偽善者である。この意味に於いて政治家と教育家との間に如何に偽善者が多いことであらう。併し我等は此の如き偽善以外に、別に意味を異にする悪の隠蔽があることを忘れてはならない。この意味に於ける悪の隠蔽者は、自分の中に到底告白するに堪へぬ悪心があることを自覺してゐる。この悪心の極めて恥づ可きことを底から感じてゐる。さうして現在の生活の自然を破ることなしに之を社會の前に曝露するだけの性情の強さが與へられてゐないことを感知してゐる。故に彼はその悪を恥づることから、不自然なる開放を憚ることから、自分を眞價以上に見せむとする欲望なしに、自分を眞價以上に見せかけることによつて何等かの利得を身に收めむとする打算なしに、本能的の羞恥を以てその悪を隠蔽するのである。我等は此のやうな悪の隠蔽をも猶偽善と呼ばなければならぬであらうか。固より悪意を以てすれば、假令消極的にもせよ其處に外觀と實質との矛盾がある限り、これを偽善と呼ぶことも出来るであらう。併し此處にはその善を誇張して見せびらかさうとする意志なきが故に、又此處には悪を恥づる善心がその隠蔽の根據となつてゐるが故に、自分は——一つは自身のため——もつと優しい名稱を以てこの弱點を呼んでやりたい。彼がこの弱點を脱却する途は唯三つあるのみである。第一の途は心の底に潜む悪心を根絶することである。第二の途はそ

の悪心を懺悔し盡すことが出来るほどに玲瓏透徹の人格となることである。併しこの二つの途は修練によつて自然に到達することが出来ることであつて、決心によつて即下に實踐することが出来る途ではない。故に剩されたる第三の途は、この悪心を家常茶飯事として開放するほど無恥になることのみである。Cynical Frankness の途のみである。併しこの途をとることによつて、彼は一つの弱點を脱却するために、より悪き罪過に陥らなければならぬ。この新しき罪過に陥らぬ限り、彼はこの弱點から即下に脱却する途を持つてゐない。従つて、悪意ある者の稱呼に従へば——偽善は現在の彼が履む可き正しき途である。彼は依然として、悪を恥づる心を以て告白するに堪へない悪心を自分一人の胸に抱き締めて行かなければならぬ。善心の醇熟に先づ安價たる告白を慎んで、隠忍して自分の人格の淨化を努めなければならぬ。さうしてその間、悪意ある者の侮辱を堪へて行かなければならぬ。

第二に、理想と現實との間に矛盾を持つてゐるものは偽善者であるか。現在即下に實現することの出来ぬ理想を抱く者は偽善者であるか。その理想が未だ自然的素質を征服し盡すに至らず、その求める善が時として之と矛盾する欲望によつて裏切られることがある限り、その人は常に偽善者であるか。若しこれをも猶偽善と呼ぶならば、人は偽善者である限りに於いてのみ人格の進歩があり、その人が偽善者でなくなるとき、その進歩は全然停止すると云はなければならぬ。

あらう。理想はその人の自然的素質と矛盾するが故に情熱を帯び、現實は理想と矛盾するが故に刻々に高められる。理想と現實と矛盾するは、繰返すまでもなく當然至極のことである。唯實現の情熱を伴はぬ善の空想を理想と稱して掲げ出すとき、理想と稱して掲げ出しながら之を實現せむとする情熱を心に貯へざるとき、又理想として要求するところを直ちに自己の實現であるかのやうに見せかけるとき、その生活には始めて虚偽を生ずる。併し實現し得ざる善を求め、ことと持つてゐないものを持つてゐると見せかけることは意味を異にするのである。シヨールペンハワ―は死を恐れても、彼の意志否定の理想は虚偽にはならない。トルストイが妻と子とを持つてゐても、彼の絶對的貞潔の理想を偽りと呼ぶことは出来ない。シヨールペンハワ―が余には死を恐るる心なしと揚言するとき、トルストイがその妻と子とを社會の前に隠さうとするとき、彼等は始めて偽善者となるのである。

第三に、空想の中に多くの善を夢想しながら、これを現實の世界に移すことに失敗するとき、心の中に多くの美しき意圖を描きながら、これを實行し貫く性格の根強さを缺くとき、その人は偽善者であるか。此處には空想と——理想ではない——現實との間の矛盾がある。従つて彼がその空想を言葉に現すとき、彼の言葉と實行との間にも亦矛盾があるに違ひない。彼の空想は彼の現實より美しく、彼の言葉は彼の實行より美しきとき、我等は彼を偽善者と呼ぶに何の躊躇をも

要しないやうに思ふであらう。併し現實の世界に移すことに失敗するとき、空想の善は常に虚偽であるか。これを實行し貫く性格の根強さを缺くとき、意圖の美は常に詐りであるか。或場合にはさうであらう。併し凡ての場合にさうであるといふのは早計なる概括である。現實の生活の中に圓熟せる者に非ざる限り、誠實に善を思ひ、誠實に善き意圖を抱き乍ら、猶その實現に於いて失敗することは極めて少くない。我等がこの場合に於いて概括的に云ひ得ることは、唯その善が薄弱なことである。固より薄弱は如何なる場合にも恥辱である。併し薄弱な善も、不善又は無善よりは遙かに優つてゐるであらう。空想の善や美しき意圖が幾度かその實行に於いて躓きながら、これによつて我等の性格の次第に大きく堅く練られて行くことは、凡ての人の知つてゐるところである。故に我等は空想の善や意圖のみの美しさを恥づるよりも、寧ろこれを乗切つてその先に行かなければならない。唯誠實に空想せざる善を美しき言葉に飾るとき、又心に醜き意圖を抱きながら、美しき意圖あるが如く人に見せかけるとき、我等は始めて偽善者となるのである。偽善とは詐欺の意志若くは衝動によつて成立する一種の特別なる惡徳である。偽善の特に憎むべきはその矛盾が詐欺によつて成立してゐるからである。

年少の諸友に告げよう——偽善とは極めてシヨツキングな言葉である。我等は此言葉を以て屢屢自ら怯え、又人を脅す。併し我等は詐欺の意志に基く真正の偽善と、一見之に類似しながら而

も我等の忍んで通過しなければならぬ自然の諸段階とを混同してはならない。この混同は我等の生活の勇氣を挫き、又他人に對する我等の態度を不正にする。我等が開放するに堪へざる悪心の蠢きを心に感ずるとき、我等が理想として求める善を實現する力を缺くとき、又我等が空想の中に極めて美しく人類に對する愛を描きながら、現實の關係に於いては父母兄弟をさへ完全に愛することが出来ないとき——そのとき我等は深く屈辱を感ずるであらう。併しその屈辱は如何に深くとも、それは偽善ではない。直下に即刻に深く之を憎んで、悪疫の如く之を遠けなければならぬものは詐欺の偽善である。併し自然の發達のみが癒し得る若干の弱點は、忍んでその癒える日を待つてゐなければならぬ。あらゆる意味に於いて生活の矛盾を脱却することは、決して容易なことではないのである。

3

自己の悪を隠蔽して正しい者のやうな顔をするとき、自己の善を誇張して正善の人らしく歩き廻るとき、自己の中に最も多くその非難に價する悪徳を包藏しながら神の如き無恥を以て他人と社會との悪徳を憤慨の種とするとき——さうしてその外觀と本質との矛盾が明瞭に我等の眼に曝露されるとき、その時我等は此等の徒を呼んで偽善者と呼ぶ。併し我等の偽善者といふ概念は、

その外觀が一應我等を欺くに足るだけの尤もらしさを具へてゐる場合に特に剴切に通用する。その外觀と本質との矛盾が餘りに明々白々なるとき、我等は最初にその滑稽と出鱈目との印象に支配されて、偽善者とさへ思つてゐる餘裕がないのである。同一の隠蔽、同一の誇張、同一の無恥、同一の詐欺が、偽善として憎まれずに滑稽として笑はれるに過ぎないのは、馬鹿の一徳である。併し之は唯彼の詐欺が彼の愚によつて覆はれてゐることを證明するのみで、少しも彼をより善くする所以ではないのである。

(六、二、一六)

十三 夏目先生のこと

先生が亡くなられたとき、自分は、現代と後世との人々に先生の事業の一端を説明するに足るやうな、少し纏まつた論文を書いて、これを先生の靈前に捧げたいと思つてゐた。先生に對する自分の負荷はこの一つの論文で果すことにして、その他の斷片的なことは成る可く書かないやうにしようと思つてゐた。併しその後先生に關する色々の世評を見聞するにつれて、ちよい／＼先生のために辯じて置きたいと思ふことが出て來た。自分は固より、今でも様々の細々したことに就いて彼此云ひたいとは思はない。併し二三の重大な事に就いて、自分が自分なりの解釋を下してゐることを、早く世間の人に聞いて貰ひたい氣がする。それで云つて置きたいことの一つを今此處に公表する氣になつたのである。

自分の此處で考へようとするのは「早く注射をして呉れ、死ぬと困るから」と云はれた先生の言葉である。世間ではこの一語によつて、先生が臨終に當つて大變精神的に苦悶されたやうに解釋してゐるらしいが、それは事實に相違してゐる。最後の日の晝、もう臨終に間がないからとい

ふので一同先生の枕頭に集つたときには、先生は本當に靜かにしてゐられた。精神的の苦悶は固より、肉體的の苦痛さへ殆んど意識を亂してゐないやうに見えた。臨終の靜かなことは悲しみの中にも猶自分達の心を喜ばせた。自分達は嚴肅な敬虔な心持で先生の大往生を見守つてゐた。併しさうしてゐるうちに先生は少し身動きをされた。醫師はこれに力を得たらしく、もう一つやつて見ることもあるからと云つて、一同を病室から退かせた。あとで聞けばあの時食鹽注射をするに死際に激しい苦痛が來ることはわかつてゐたのださうである。主治醫眞鍋氏は先生の靜かな臨終を亂すに忍びないからと云つて、最初はこの食鹽注射に反對したのださうである。併し萬一を憐れむために最後の食鹽注射は行はれた。さうして先生は少し持たほされた。素人の悲しさに自分達の心には何だか回復の見込があるやうな氣が起つて來た。自分などはこのほつとした心持に欺かれて、今の間にと云つて一寸自宅に歸つたため、遂に先生の臨終に逢ふことが出来なかつた位である。こんなにして問題の苦悶は自分の居ない時に起り、問題の言葉は自分のゐない時に吐かれたのであるから、自分は直接の觀察によつてその時の有様を語ることは出来ない。併しその時居合せた人達の言葉に徴するに、先生の最後の苦みは主として食鹽注射によつて自然の死を妨げられた肉體の苦みであつたらしい。若し精神的の苦悶があつたにしても、その徴候は唯問題となつた一言によつて認め得るのみであつたらしい。故に自分はあの一言の意味を解釋するに先

だつて、先づあの一言が如何にして發せられたかの事情を語つて置きたかつた。讀者にして若し上に述べた私の敘述を信するならば、縱令この言葉の意味を如何に解釋するにせよ、それが先生の臨終に非常な精神的苦悶があつたことの證明にはならないことを領會されるであらう。(この事に就いては、眞鍋氏がその中病狀日誌を公にして醫學上の説明を與へられるやうに聞いた。それが出たら先生の臨終の様子は自分のやうな素人の敘述によるよりも、一層明かになるであらう。) 然らば先生はあの「死ぬと困るから」といふ言葉を、どんな心持で、どんな意味で云はれたか。先生の亡くなられた今日、何人も斷定的にその意味の解釋を下すことが出来ないのは勿論である。我等は唯前後の事情と、一般の人性とに照してその可能な意味を付度するばかりである。それが當つてゐるか否か、それは唯自分達が死んで行つて先生に逢つたときに、先生から聴くことが出来るばかりである。

自分の考へるところによれば、先生のあの言葉は、三様の意味に解釋することが出来る。第一は過去の記憶の斷片が、死にかけてゐる先生の意識の中に再生して、あの言葉となつたと解釋することである。この解釋に従へば、あの言葉は老耄病者の獨語と同様な、その時の人格とは極めて縁の薄い言葉となるであらう。老耄病者に在つては意識の全體を統御する人格の働きが既にその力を失つてゐる。人格の統御と意志の選擇とを脱れた過去の記憶は、その時の人格要求とは大

なる聯關なしに、晦迷なる意識の中に関き又関く。かくて過去に經驗した極めて些末な慾望、過去の或る瞬間に微かに意識を掠めて過ぎた僅かばかりの思想も、猶彼等の獨語の内容となること出来るのである。さうして一度假死して漸く蘇つた先生の意識を老病者のそれに比較するは必ずしも失當とは云はれない。かう解釋すればあの言葉は、先生の人格とは殆んど關係のない、生理的的心理的部分現象となつてしまふであらう。此間先生の舊居であの言葉の意味の解釋を話し合つたとき、生理學的に、若くは生理的心理學的に説明しようとする人達は、この解釋に傾いてゐるやうであつた。

併し第一説のやうにあの言葉と先生の人格とを切り離して了ふには、「早く注射をしてくれ、死ぬと困るから」といふ言葉は、あまりに意義の明白な、さうしてあまりにその時の事情に適合し過ぎた言葉である。我等の窮理慾は、これをもつと先生の人格と聯關させて説明しなければ満足が出来ない。第二の解釋は先生の奥に潜んでゐる盲目的な「生きむとする意志」(Wille zum Leben)がこの言葉を吐かせたと見る見方である。將に不可知の淵に投ぜむとするときに本能的に人の意志に閃く生への回顧執着——この執着によつてあの言葉が生れたと見るのは、極めて自然な見方と云はなければならぬ。さうして世間の人達も最もこの解釋を喜んでゐるやうに見える。唯自分が茲に力説して置きたいのは、この解釋に従つても、あの言葉が先生の思想と人格と

を累するには足らぬといふことである。先生の死なれる一年程前、自分が先生にお目にかゝつたときには、先生は死は生に勝ると云つてゐられた。その後になつて先生は、もつと積極的の意味で生死を一にすることを説いてゐられたやうに聞いた。或人は先生の此等の思想と、先生の死前の言葉とが矛盾すると云つて先生を責めようとする。併し彼等は、如何なる人の場合に於いても、思想は——特に理想の形に於ける思想は——その自然的素質と矛盾するものであることを知らないものである。自然的素質との矛盾は思想の眞實を害するものでないことを知らないのである。思想とは自然的素質を規正し精錬し淨化するもの——従つてその本質上自然的素質と矛盾した一面を持つ可き筈のものである。思想は自然的素質の精錬が完成するところから始まるのではなくて、自然的素質を精錬するために、生れて來るのである。然るに生きむとする意志は食色の本能と等しき——寧ろ更に根本的な人間の本能である。この本能が存在する故を以て生死を一にする思想——若くは理想を抱く者を責めるのは、性慾を根絶し悉さぬ故を以て、貞潔の理想を抱く者を責めると同様の無理難題である。このやうな無理を要求するよりは、寧ろ人に向つて何故に汝は神でないかと責める方がよからう。先生が神でなかつたことが——臨終に當つて生きむとする意志の動きがあつたことが、何で先生の人格と思想とを累するに足らう。さうして其處には別に、最もよく前後の事情と照應する第三の解釋があり得る。それは先生が

生きてゐて爲たかつた仕事があることである。少くともその仕事をしてしまふまで生きて居たかつたと見ることである。その仕事の慾望が半ば無意識にあの言葉を吐かせたと見ることである。然らばその仕事とは何であるか。最も直接に云へばそれは先生が百八十八回まで書きかけた「明暗」である。先生が最初に血を吐かれた日の夜、あれほど鮮かな空想を以てあれほど書き進んだ「明暗」は、屹度寝てゐても先生の眼に憑いて先生を驚すだらうと、自分はWと話し合つた。甚に熱中する者には甚盤が眼に付いて離れないと聞くが、同様に先生には「明暗」が眼に憑いて離れなかつたであらう。さうしてこの眼に憑いて離れないものを完成してしまひたい願ひが、昏昏として睡る間にも（而も先生は昏睡されたのではなかつたから）猶繼續してゐることは、極めて自然に想像し得ることである。而も「明暗」を外にしても、先生には猶生きてゐて爲たい仕事があり得た。それは最近になつて先生の悟入し得たと聽く眞理を傳へ残して置くことである。先生は則天去私の眞理によつて多くの者の迷ひを覺してやりたいと云つてゐられたさうだ。小説家は五十以上にならなければ駄目だと云つてゐられたさうだ。則天去私の立脚地に立つ新しい文學論を大學で講じてもいゝと云つてゐられたさうだ。さうして見れば最後に近い先生の脳中には色色の仕事と、色々の仕事の計畫とがあつた筈である。かう云ふやうな「仕事」を持つてゐる人が、「死ぬと困る」と思ふのに何の不思議があらう。自分は寧ろ世の基督教徒と稱せらるゝ人が、先

生のこの一語を捕へて、最後の煩悶憫む可しといふやうなことを口にすることを不思議に思ふ。彼等の師イエスは、「吾父よ若しかなはゞ此杯を我より離ちたまへ」とゲツセマネに祈つた人である。さうして馬可傳によれば、彼は十字架の上に在つて「わが神わが神何ぞ我を遺てたまふや」とさへ叫んだと傳へられてゐる。基督のこの最後の「煩悶」は何のためであつたか。それは彼がまだ爲可き仕事を持つてゐたためではなかつたか。自分は眞正の基督教徒は、先生の最後の言葉を尊崇はしても憫むことは出来ない筈であると思ふ。(かう云つたら先生は苦笑しながら、そんなに大袈裟なことにして呉れちや困るよと云はれるかも知れない。併し此比較は唯仕事のために死を惜む心持の一點にあるのだから、先生からも宥して頂きたいと思ふ)。併し先生は固よりイエスではないから、我等は唯先生の唇から、「死ぬと困るから」と云ふ家常茶飯の言葉を聞いただけであつた。我等は先生から「此杯を我より離ちたまへ」と云ふ言葉と「聖旨に任せ給へ」と云ふ言葉との間に行はれる情熱の摩擦を聴くことが出来なかつた。若しかしたら先生は、死んでから、面倒な事をせずに済んだのは有難いねと云つて微笑されたかも知れないと思ふ。兎に角先生は我等の間に一つの問題になる言葉を残して、最も先生らしく死んで行かれた。さうして自分はこの言葉をどんな意味に解釋しても、それは先生の徳を累す可き性質のものでなかつたことを信じてゐる。

(六、二、一六)

十四 一つの解釋

1

哲學的教養を受けたものがトルストイを読むときに、最初に受けるショックの一つは、恐らくは、トルストイの考へ方の多數決主義である。彼が藝術家の信條を受納するを得ぬ一つの理由は、「一人の人によつて表白されるあらゆる意見に對して、直ちにこれと對角線的反對をなす他のものが現れるから」(「我が懺悔」第二章)であつた。彼が人生問題の解決を目的とする諸種の學術に對する不信の一つは、「一つの思想家と他の思想家との間に、甚しきは同一の思想家に於いてさへ、不斷の矛盾がある」からであつた(「同上」第五章)。さうして彼は又、勞働者や農民が受用し得ず理解し得ざる故を以て、殆んどあらゆる近代の藝術を擯斥した(「藝術とは何ぞや」、特に第八章、第十章等)。一見すればトルストイの採用せる眞理の標準は、これをあらゆる人の前に提出するときあらゆる人が直ちにこれを眞理と認むるに躊躇せぬことであり、トルストイの是認する價値ある藝術は、鑑賞者の側に如何なる準備も態度の轉換もなく、凡ての人がこれを受用しこ

れを理解し得るものでなければならぬやうに見える。一つの思想、一つの學說、一つの藝術の價値は、フングロ・サクソン人種や、兒耳曼人種や拉典人種や、スラヴ人種等の高架索人種のみならず、亞細亞や阿弗利加に於けるあらゆる人種の前に——自分は自分勝手に此等の人種を列擧するのではない、トルストイの擧げた名前を繰返すのである——これを提供して投票させるとき、それが如何に多數の票數を得るかによつて決定されるやうに見える。併し若し「一人の人によつて表白される意見に對して、これと對角線的反對をなす他の説が現れる」故を以て、直ちにこの二つの説とも同様に信じ難いものとならなければならぬならば——又、「一つの思想家と他の思想家との間に、甚しきは同一の思想家に於いてさへ、不斷の矛盾がある」故を以て、凡ての學說が信ず可からざるものとなるならば、他の多くの思想家と矛盾するところ極めて多き（少くともトルストイ自身はさう考へてゐたに違ひない）、又その生涯に於いて幾多の變遷を経たる、トルストイの思想と人生觀との如きは、最も信じ難きものとならなければならぬであらう。さうして藝術に於いても、阿弗利加人やホツテントット人にも直ちに通じ得べき藝術を求めるとき、これを求めてその條件に適はざるものを除外し行くと、最後に残るものは極めて貧弱な低級な藝術のみとなるに違ひない。眞理の標準を此の如きものと思惟し、藝術の價値を此の如き標準を以て測るは、一見明瞭を極めたる誤謬と云はなければならぬ。トルストイは實際此の如き標準を以

て思想の價値を測つてゐるであらうか。此の如き標準を以て藝術を評價してゐるであらうか。

2

誤謬の存在は客觀的眞理の存在を破壊する理由とはならない。一人の小學生が計算を過つた故を以て——この一つの事實も猶凡ての判斷の現實的一致といふものを破壊する理由とはなり得るのである——數學上の原理が成立し得ないならば、一人の片意地なる者が馬を指して鹿と云ひ張る故を以て、馬が馬であるといふ事實が破壊されるならば、世界にはあらゆる意味に於いて眞理と云ふものが存在し得なくなるであらう。凡ての人の現實的、不一致が眞理の存在を傷くるに足らねばこそ、我等は誤謬の積層をおしわけおしわけして眞理に對する努力を續けることも出来るのである。凡ての人が反對するも余一人のみが眞理を把握してゐる場合も亦存在し得る。ガリレオが地動説を主張したとき多くの人は彼の説を無稽として彼を迫害した。併しその迫害者の子孫も今日に於いては地動説を認めないものはないであらう。それは事實と人性との本質に、凡ての人が地動説に一致すべき必然性が含まれてゐるからである。この意味に於いて凡ての眞理は萬人に共通なるもの——普遍的妥當性を持つてゐるものでなければならぬ。併し普遍的妥當性とは凡ての現實的判斷の統計によつて發見せらる可き性質のものではない。現實的判斷に於いては、九

百九十九人が誤つてゐて、唯一人だけが普遍的妥當性を持つてゐる場合も亦存在し得る。時代に先んじたる偉人の場合は凡てこれである。多くの説が矛盾するとき、凡ての説が誤つてゐることも固より一つの可能なる場合である。併し其處には唯一つが正しくて他の凡てが間違つてゐる場合もあり、凡ての説が一つの眞理の徐々として完全に近き行く認識の、諸の段階として歴史的に繋がつてゐる場合もある。トルストイの考へ方は、一見すれば、後の二つの可能性を無視する一面的な考へ方であるやうに見える。

或人は一つのことを善なりと云ひ、他の人は同じ一つの事を悪なりと云ふ。この矛盾は要するに善悪は迷妄であると云ふ結論に導き得るか。否、善悪は我等の本質の法則に合すると合せざるによつて分れる。假令我等が我等の片意地を以て、若しくは誤れる誠實を以て、意識的には善であると主張するときと雖も、これを實行することによつて我等の本質が内面的に否定されるといふ事實があるならば、その行爲は客觀的の意味に於いて悪である。子供は南天の實が毒であることを知らない、若しくは片意地を以て毒でないと主張する。併し彼の意識と主張との如何に關らず、之を食へば彼の肉體は傷害されるであらう。母親は南天を毒であると主張する。子供はこれを毒でないと主張する。兩者の間には一致がない。この一致せざる意見を以て相争ふとき、母親もその子と共に、「瘋癲病院」中のものであるか。南天を毒でないと主張するものがある故を以て、

南天が毒であると云ふ事實は破壊されるか。

3

此の如きは凡て繰返して云ふまでもない凡常の事實である。トルストイは果して此の如き凡常の事實を知らなかつたか。一見すればさう云ふより仕方がないやうに見える。併し自分はさうは思はない。自分の考へに従へば、トルストイは自分の認めたる一つの眞理を押し通すために、これと矛盾する、若しくは矛盾すると思惟せる諸説を凡て拆伏したかつたのである。さうして無意識若しくは半意識的に、自分自身の上に最も痛切に歸つて来るやうな不利益な武器を用ゐたのである。現代の思想家、トルストイほど自分一人の握つてゐる普遍的妥當性を主張した人が——主張することを喜んだ人が、他に幾人を數ふ可きであらう。

自分は茲に繰返して人口に膾炙せるトルストイの手紙の一節を引用する——「我等は相互に求め合ひて行く可きではない。我等は凡て神を求めなければならぬのである。……貴君は云ふ、一緒にする方が容易であると——一緒にするとは、何を？ 勞働すること、刈入れをすることに於いては、然り。併し神に近くことは——それは唯孤獨に於いてすることが出来るのみである。私は世界を一つの巨大なる殿堂と見る。其處には光が天上から、丁度その眞中に落つるのである。」

一致するためには、我等はみんな光の方へ行かなければならない。その時我等の凡ては、あらゆる方向から集つて来て、我等が捜し求めなかつた人達の群れの間に自分を發見するであらう。其處に悦びがあるのである。」——さうして神に於いて、神に於いてのみ凡てが一つになることを知つてゐた人が、本當に價値の標準を統計的多數決に置くが如きは決してあり得ざるところである。彼は又その「藝術とは何ぞや」に於いて云ふ、「最高にして最善なる感覺の理解に對する障礙は、これも亦福音書に云はれてゐるやうに、決して發達や教養の缺乏にあるのではなくて、反對に、誤れる發達と誤れる教養とにあるのである」(第十章)と——果然、彼の嫌惡せるは多數の趣味と一致せぬ藝術ではなくて(固より多數に對する義務と云ふ點に就いて、「多數」は再び重要な問題となつて来るが)その實偏局せる、人類の健全なる本能の頽廢せる藝術であつたのである。彼は彼の是認せる——多數決によらずして直ちに彼の心臓を以て是認せる——藝術を民衆の間に見、翻りて所謂貴族的文學の間にその顛倒と墮落とを見た。同時にこの貴族的文學が傲然として最高最良の藝術を以て自ら居る僭上を見た。故に彼はこの僭上を罰するに「多數」と一致せざることを以てするのである。

トルストイが多數と一致せざる故を以て擯斥する一切のものは、豫め彼自身の燃ゆるが如き心臓によつて端的に擯斥されたものである。さうして彼はこの擯斥を裝ふに「多數との不一致」を

以てするのである。若し彼自身の心臓の是認するものが「多數」と矛盾するならば、恐らくは彼は更に敢然として「多數」を排斥したであらう。

自分はトルストイの多數決主義を此の如くに解する。多數のための奉仕と多數なるが故の是認と——この二つを嚴密に區別することは、他の凡ての場合に於けると等しく、トルストイの眞意を汲むためにも亦必要である。

十五 思想上の民族主義

430

1

余は日本人である。

余は日本人の血を受けて生れ、日本の歴史によつて育まれ、日本の社會の中に生息してゐる。故に自ら好むと好まざるとを問はず、日本人であることは余の運命である。自己の素質に内省の眼を向けるとき、余は如何に多くの日本的なるものを自己の中に發見することであらう。自然の風物や四季の推移に「もののははれ」を見る感じ易き心に於いて、余の中には平安朝文學の血が濃かに流れ動いてゐる。朦朧にして包むが如きもの、ほのかにして温かなるもの、外表の強さを缺きながら自己の中に歸る力の静けさを保つものに對する特殊なる傾向を持つてゐる點に於いて、余の趣味は弄齋の旋律や古土佐の巧藝の傳統の繼承者である。さうして夢殿の祓佛や三月堂の諸佛や法隆寺金堂の壁畫や法華寺の彌陀三尊圖等に云ひ難き親愛と畏敬とを感じる點に於いても、余は特に日本的なる素質——少くとも特に東洋的なる素質を持つてゐるに違ひない。更に古事記

や萬葉集に現れたる上代人の生活に特殊なる愛情を感じるが如きも、恐らくは日本人ならぬ者の能くするところではないであらう。余の中に日本的なるよきものの生きてゐることを感ずるとき、余は余が日本人であることを喜びとする。さうして我等の祖先と共通なる局限を余自身の中にも發見するとき、余は余が日本人であることに就いて一種の悲哀を感じる。併し如何にこれを喜ぶもこれを悲むも、又如何なる意志の力を以て日本的素質を脱却せむと努力するも、余は遂に日本人ならぬものとなることは出來ない。余が日本人ならぬものとなり得ないのは、余が余ならぬ者となり得ないと同様である。

併しかく云ふは、余は「日本人」と云ふ普通名詞であると云ふ意味ではない。一面から云へば、日本人の平均的性質以外、余には余自身の個性がある。従つて余が余として生きる時、余の中には、過去の日本歴史に於いては嘗て實現せられざりし新生面を發展せしむ可き可能性が與へられてゐるかも知れないのである。又一面から云へば、余の中には民族的特質を超越して世界に於けるあらゆる他の民族と共通なる——釋迦や基督や孔子や、ソフォクレスやセネカやグンテや、シェークスピアや、ルソーやゲーテ等と共通なる、「人」としての生活の一面がある。余は民族史に規定せらるゝと共に世界史に規定せられ、民族史によつて教育せらるゝと共に世界史によつて教育せらるゝ、「世界人」である。我等は「日本人」であると云ふ事實によつて、余は又同時に

481

「余」自身であり「世界人」であると云ふ事實を——これが事實であることは、曇らされざる眼を以て自己と自己の内容とを反省したことがある者の何人も拒み得ないところである——この事實を閉却してはならない。

2

余は日本を愛する。

余が日本を愛するのは、凡ての人を愛するのが、余の義務であるからばかりではない。余は余の自然的素質の故に、血族的親近の故に、世界の中でも特に日本を愛せずにはゐられないのである。余は日本の文物に對するとき、故郷に歸れる者の親しさと悲しさと心安さるるを感じざるを得ない。我等が萬葉を讀み芭蕉を讀むとき、法隆寺や藥師寺を訪ふとき、古土佐や光悦や宗達や光琳の繪畫を見るとき、又弄齋や富本や端唄を聽くとき、最後に日本の衣服を着て日本の疊の上に安坐するとき、如何に我等自身のエレメントにゐることを感ずるであらう。更に我等は將來に涉つても、此等の文物を保護し發展せしめむとする、特殊なる負荷と憧憬との感情を抱き、特殊なる強さを以て日本の文化に貢獻せむとする慾望を感じずにはゐられないのである。單に外面的政治的關係に於いてこれを見るも、日本が外國と戰ふとき、我等は反射的本能を以て日本の勝利を

切望し、日本人が外國に於いて虐待せらるゝ事實を聞くと、同様の本能的感情を以て、日本人の世界的地位の低きを憤慨する。余が日本を愛するは、動物のその子を愛護するが如き自然的衝動に基いてゐるのである。

併し何故にこの自然的衝動に従ふことは正當であるか。あらゆる場合にこの自然的衝動に従つてのみ行動するのは、要するに民族の利己主義と呼ばれる可きものではないのか。凡ての個人が他人の權利を認容し、他人を愛す可き義務を負ふが如く、凡ての民族も亦他の民族を愛し、他の民族の權利を認容す可き義務を負うてゐるのではないか。我等に正當防禦の權利あると同時に、如何なる意味に於いても他を侵害せざるの義務も亦我等に負はされてゐるのではないか。自己の中に起る不正なる意志と戰ふが如く、民族の不正なる意志と戰ふことも亦我等の人類と民族とに對して負ふ義務ではないのか——凡てこれ等の「ある可きこと」に關する問題は、單に民族を愛する自然的衝動が存在すると云ふ事實によつては何の答へられるところもない。

又自家の文化を愛す可き途が、自家の文物に愛着する自然的衝動によつて直ちに與へられてゐると云ふことも亦出來ない。我等が成心を捨てて外國の文物を研究するとき、我等は其處に、我等の缺陷を補足するが故に特に我等にとつて切要なるもの、我等に親しからざるが故に特に我等を高むる力あるもの、我等の文物よりも更に深く「人」の本質に肉薄して、我等の文化の將來に

於ける發展を指導し得るが如きものの多くに逢着する。此の如き場合に於いては、寧ろ我等の自然的衝動に逆つて外國の文化を研究すること、外國の文物に對する愛情を開拓することが、却つて眞正に我等の文化を愛する途ではないか。過去の文物に愛着する心安さに甘んずるとき、我等は却つて將來に於ける文化の發展を害することはあり得ないか。一切の眞正なる進歩に於いて見るが如く、過去を嫌惡することが、却つて現在と將來とを愛する心の發現であるやうな場合は存在し得ないか——凡て此の如き自國を愛するの途に關する問題も、自家の文物に執着するといふ自然的事實によつては、何の答へられるところがないのである。

3

余は日本に對して義務を負うてゐる。一つには余は世界のあらゆる存在に對して義務を負ふが故に。二つには余は日本人として日本と特殊の關係に立つが故に。自己の享樂を追ふために同胞に對する義務を閑却するならば、自己の利害と安否とを唯一の關心事として民族の利害と休戚とに冷淡であるならば、それが正しき途であるとき自己の一身を犠牲にして民族の欲求に奉仕する覺悟を缺くならば、余は好んで生活内容を一個體のことに局限する憫む可き利己主義者に過ぎない。一個體としての自己と、一個體としての他人を對立せしむる生活の局小に堪へざるとき、自

己の生活の普遍化に對する憧憬が心の中に育ち行くとき、余は必然に自己の屬する民族に奉仕せむとするの慾望を感じずにはゐられないであらう。固より純粹なる心を以て民族に奉仕することは、あらゆる無私なる奉仕と共に、あらゆる利己主義の征服と共に困難なる仕事である。併し生活の普遍化が個體的自己の義務である限り、この困難なる戦ひを戦つて普遍なるものに奉仕することは常に我等の義務でなければならぬ。さうして民族が我等の奉仕を要求する普遍的なるものゝ一つであることは疑ひを容れぬところである。

併しかく云ふは、民族が具體的なる唯一の最後の普遍であると云ふ意味ではない。我等の屬する民族の外にも他の民族があり、個々の民族の上には此等の民族の相互關係によつて成立する一つの「人類」が存在することは、疊らされざる眼を以て事實を見る限り、何人も拒み得ざるところである。民族に對する奉仕の義務は、如何なる意味に於いても人類に對する奉仕の義務を妨げることが出来ない。固より我等は多くの場合、自己の屬する民族に對する奉仕を通じて始めて人類に對する奉仕を具體的にする。併しこの事實を承認することは、民族の不正なる意志に奉仕することによつて人類に對する奉仕の義務を傷害する權利を認容することではない。個人的利害の外に正邪があるやうに、民族的利害の外にも猶正邪があることを否認する理由とも亦なることを得ない。奉仕の對象を民族に局限するとき、普遍に對する我等の憧憬は決して満足することを得

ないであらう。普遍に對する憧憬を真正に自己の内面に體驗する者が、民族に對する奉仕に於いてその究竟の對象を發見し得ることは、余の信ずる能はざるところである。

4

民族主義とは、凡ての個人はその屬する民族の血液と歴史とによつて規定されるものであるといふ一つの事實の承認を要求するものならば、其處には固より何の異論もあることを得ない。又民族主義とは、凡ての個人はその民族を偏愛する自然的衝動を持つてゐるといふ一つの事實の承認を求めものならば、其處にも亦何等の異議がないであらう。併し此等の事實の承認は我等の生活に對して果して如何なる規範を與へるか——この問題は凡て此の如き事實の承認の彼方に横る問題である。民族心理學的乃至民族史的考察の權利を認容すること、思想上の——更に嚴密に云へば規範としての民族主義の主張を是認することとは決して同一ではない。思想上の民族主義を認容せざる故を以て、民族心理學的乃至民族史的考察の權利と必要とをも亦認容せざる者と誤想するの愚なるは固より云ふまでもないことである。

さうして民族主義の主張が單に我等に一つの規範を與へむとするものであるならば、我等は又色々の意味に於いて思想上の民族主義を認容することが出来る。自分は既に、民族に對する奉仕

を一つの義務として承認する點に於いて、民族主義に是認を與へて來た。その他それは政治上教育上に於ける合目的の問題(N Zweckmässigkeitsfrage)に於いて——換言すれば我等の政治的教育的理想を實現する方法の問題に於いて、極めて重大なる意義を持つてゐることを亦認容しなければならぬ。民族の特長を尊重すること、最も民族に適合する途に従つてこれを教育すること、民族の傳統を生かすことは、固より民族教育にとつて重要な着眼點である。民族の歴史中より復活せしめ得べきものを外國より移植せむとするは無用である。民族の特質を抑制して之を「人類」の平均數に歸せしめむとするは、個々の個性を強制してこれを民族的性格の概念に適合せしめむとすると同様に有害である。民族の教育は固よりその民族に自然なる途に従つて行はれなければならぬ。この意味に於いて、我等の政治と教育とは猶甚しく民族の特質に關する洞察を缺いてゐるといふことが出来るであらう。既にこの意味に於いても日本の根本的研究は必要である。自分はこの限りに於いて民族主義の贊成者である。

5

而も我等が日本を知ることとを要するは、單に我等の統治し教育せむと欲する對象が日本人であるからばかりではない。我等自身の自然的素質を知り、我等自身の自然的素質を育てむがために

も亦我等の屬する民族を知る必要がある。この意味に於いて、日本を知ることが我等の自覺並びに教養の重要な一部分をなすことは拒むことが出来ない。余とは本來何者であるか、余は如何なる特質を持つてゐるか、余は如何なる方向に余の才能を發展せしむるを得策とすべきか。此の如き自然的素質の問題に答へるためには、余の中を流るゝ民族の血、余を生みたる民族の歴史を——無意識の間に余の自然的基礎をなせる諸々の條件を、改めて意識的に把握し、改めて内面的に體驗して見ることも亦重要な手段となるであらう。固より自己の本質を知らざるも余は遂に余なるが如く、特殊なる民族的教養と民族的自覺となきも、余は到底日本人である。併し「汝自身を知る」ことが我等の精神的發展にとつて必要なが如く——寧ろ必要なが故に——余の屬する民族を知ることも亦、余自身を知ることの一部分として、極めて重要な事件たるを失はない。この意味に於いて、民族的自覺並びに教養は、我等の意識的努力を命ずる一つの規範であることが出来る。それは我等が自己を發見し自己を教養する努力の一部分として、その存在の理由を持つてゐるものである。

併し自己を發見する努力が民族的自覺を以て終結し、自己を教養する努力が民族的教養によつて完成すると思惟するは大なる誤謬である。余の屬する民族は何物であるか。我等がこの問題を研究する材料は、過去の史實に限られ、我等がこの問題に對する解答は、精緻と粗雑との差別は

あつても、要するに不完全にして歴史家自身の性癖に依從するところ多き部分的概括に過ぎない。多くの場合に於いて、我等は自己の性癖を史實の上に投影してこれを民族的特質と稱するに過ぎないのである。故に我等は此の如き覺束なき民族的特質の認識を以て、自己の本質に對する自覺の代りに置くことが出来ない。余とは何物であるかの間に答へるものは、畢竟余自身の内面的知覺——種々の疑問を征服することによつて益々鞏固に鍊り鍛へられ行く内面的知覺でなければならぬ。民族的特質の認識は單にこの内面的自覺を試鍊し訂正し確むるために用ゐらる可き一つの参考以上のものであり得ないのである。眞正に余とは何ものぞやの問題に心を潛めたることある者は、何人もこの間の消息を知つてゐるであらう。

又假に過去の史實の中に實現せられたる民族的特質が、何等かの方法によつて完全に認識せられ得ると假定するも、これを根據として將來に於ける無限の可能性を測定し盡すことは到底人力の及ぶところではない。故に過去に實現せられたる民族性の認識を以て直接なる内面的知覺に代へむとするとき、我等は自己の内容に不自然なる限定を置いて、自己の中に存在する無限の可能性に對する信仰を失ふ。歴史家の想像する民族性と一致するもせざるも、余が余自身の内部に確認するを得る一切の能力は余自身のものである。この能力に信賴することによつて、民族的特質に新なる發相を與ふ可き運命が、余の一身に懸つてゐることがあり得ないと、誰が保證すること

が出来るか。歴史に對する意識的顧慮は多くの場合に於いて我等の自由なる活動を萎縮せしめる。固より自己の内面的衝動に信賴することを知る者も、民族的教養によつて自己の内容を豊富にすることを求めるであらう。併し彼は民族的傳統を顧慮することによつて自己の内容に限定を附することを屑しとしない。さうして民族的特質の中にある可能性を歩々に實現し行く者は、彼の屑屑たる民族主義者流の間にあるよりも、恐らくは民族的傳統に對する反逆者の間にある。

故に民族的自覺の要求は、歴史家によつて構成せられたる民族性との一致を強制するもの、嘗て實現せられたるものの形骸を規矩として新なる可能性の開展を拒む者であつてはならない。我等は過去の形骸を破壊すること、嘗て實現せられたる民族的特質を嫌忌すること、破壊と嫌忌とを通じて眞正に過去を生かし民族精神を生かし民族に對する愛を生かすことの權利を保留しなければならぬ。過去に實現されたる一切の事物を賞讃することを以て日本を愛する所以なりとする俗見の捕虜となることを慎まなければならぬ。人は能く外國模倣を排斥して民族的自覺を奨励する。併し其處には模倣ならぬ外國研究も亦存在し得ると共に、所謂民族的自覺も亦時として個人に對する模倣の要求となることが出来る。個性の自由なる實現に對する他律的規範として民族的特質との一致が要求さるゝとき、民族主義とは畢竟過去の史實を模倣する要求である。而も民族的特質として揚げ出さるゝものが、その實人間として淺薄なる歴史家の偽善者の俗人的人格

の投影であるとき、此の意味に於ける民族主義の主張は偽善者の曲りくねりたる自己主張に過ぎないであらう。我等は如何なる意味に於いても此の如き偽善者を模倣す可き義務を負ふことが出来ない。

さうして自己の教養として見るも、民族的教養は我等にとつて唯一の教養ではない。凡そ我等にとつて教養を求むる努力の根本的衝動となるものは普遍的内容を獲得せむとする憧憬である。個體的存在の局限を脱して全體の生命に参加せむとする欲求である。故に我等は民族と云ふ半普遍的なもの生命に参加することによつてこの渴望を充すことは出来ない。我等の目標とする教養の理想が畢竟神の宇宙的生命と同化するところにあることは、自己の中に教養に對する内面的衝動を感じたことがあるほどの者の何人も疑ふことを得ざるところである。従つて我等が教養を求むるは「日本人」と云ふ特殊の資格に於いてするのではなくて、「人」と云ふ普遍的の資格に於いてするのである。日本人としての教養は「人」としての教養の一片に過ぎない。民族的教養が唯一の教養であり得ないことは、教養の本質より見て自明の道理である。故に我等が教養の材料を求むるとき、その材料の價値を定むる標準は、それが我等の祖先によつて作られたものであるかないかの點にあるのではなくて、それが神の宇宙的生命に滲透することの深さに依從するのである。この意味に於いて我等は我等の教養を釋迦に——自分は此處に自明のことを繰返して置く

必要を感じる、釋迦は日本人ではない、釋迦は蒙古人種でも亦ない——基督に、ダンテに、ゲーテに、ルソーに、カントに求むることに就いて何の躊躇を感じる義務をも持つてゐない。唯其處に同様の深さが實現されてゐるとき、他の民族に就くよりも同じ民族の祖先に就くことが自然なだけである。固より自己の祖先の中に、自然なる教養の模範を持つてゐる民族は幸福である。さうして歴史家と教育家との懶惰と迂愚とによつて、我等が我等の祖先の中に恐らくは多くの教養の材料を持つてゐながら、これを現在に生かすことが出来ないのは我等の悲哀である。併し此等の凡てのことは、彼等が我等の教養を唯その祖先の中にのみ求めなければならぬといふ一般的原理を承認する所以ではないのである。若しホツテントットの紳士がその人間的教養の材料を求めするために余の意見を徴するならば、余は彼の祖先の遺業を措いて、先づ釋迦や基督の教に彼を導くであらう。

さうして我等が意識して民族的特性を殺戮せざる限り、我等が如何に普遍的内容を追求するも、又この追求の努力を助くるものとして釋迦や基督の宗教と、プラトーンやカントの哲學と、ダンテやゲーテの文學とを研究するも、我等は民族的特性の喪失を憂ふる必要を見ない。民族性は我等の自然的規定である。故にそれは必然的に普遍的内容を追求する我等の努力の方向を規定し、從つて我等の發見する普遍的 내용에 民族性 の 特色 を 刻印 する。この意味に於いて日本人には日本人

の哲學があり日本人の宗教があるのは當然である。併しそれは我等の追求の對象が日本的東洋的妥當性にあるためではなくて、我等の普遍的妥當性に對する追求が必然に民族的素質によつて規定されるからである。我等が意識的に日本の哲學と日本の宗教とを求むるとき——換言すれば我等が我等の哲學と宗教とに日本的妥當性を與へることを目的とするとき、我等の哲學と宗教とは不自然に作爲されたる、根本動機の純眞を缺ける半哲學半宗教となるに止るであらう。民族的特性は生かされたものではなくて附加されたものに過ぎなくなるであらう。今日の如く世界の思想界に於いて淺薄なる民族主義が勢力を得むとする時代にあつては、特にこの間の關係を見失はぬやうにする必要がある。普遍的妥當性に對する純眞なる憧憬を缺くとき、あらゆる教養は、あらゆる學術は、その根柢を喪失する。此の如き教養は民族と民族との間の憎惡を増進する「戦争」の道具となるに過ぎないであらう。

個性の特色を拂拭することによつて、統計的に集合寫眞的に獲得せられたる抽象的普遍は、固より普通の最も安價なるものである。併し普遍的 내용에 對する 憧憬 によつて 生きる に あらざれば、個性は眞正に自己の特色を發揮することが出来ない。

或ひは云ふであらう。民族的自覺とは過去に實現せられたる民族的特質に適合することではなくて、過去と現在と未來とを通じて生きてゐる民族的精神に同化することである。民族的理想に服従し、民族的理想實現の目的に奉仕することであると。

併し過去に實現せられたる民族的特質の外に、我等は何處に民族的精神を發見すべきであるか。それは民族的教養によつて余自身の内面に生かされたる余自身の精神の外に何處にも存在の地を持つてゐない。余が民族的精神に同化することを要するは、それが民族の精神だからではなくて、それが余自身の本質だからである。寧ろ余自身の本質に合致する以外に、余は民族の精神に同化すべき義務を負ふことが出来ない。

又民族の理想が余にとつても亦理想となるは、それが余の本質の理想と一致するからである。余は唯余自身の本質に服従することを要するに止る。余は單に民族の理想なるが故に、余の本質ならぬものに服従すべき道徳的義務を持つてゐるのではない。

最後に余は人類に奉仕することを要するが故に、又民族にも奉仕しなければならない。併し余は如何なる途によつて民族に奉仕するを得るか。唯余自身の體得せる「道」を民族の間に生かすことによつて。世界には、民族の異同と、歴史の相違によつて局限せられざる一つの「道」が存在する。この「道」は自我と宇宙との本質である。この「道」は歴史によつて徐々に實現される

ものであるが、歴史によつて規定される性質のものではない。衛生の道に従ふ肉體が強健であり、これに従はざる肉體が病弱なるが如く、この「道」に従ふ民族は繁榮し、この「道」に従はざる民族は衰滅する。我等が民族に對して奉仕する唯一の途は、唯民族の意志をしてこの道に従はしめるところにのみある。その他の意味に於いて民族の慾望に奉仕するは目前の愛に溺るゝ母と等しく、却つてその奉仕の對象を傷害する所以である。故に我等が民族に奉仕する途は必然に又苦諫の途、力争の途でなければならぬ。我等は民族的理想が「道」に協はぬものであるとき、この理想に抗争することによつて始めて民族に對する奉仕を全くする。我等が民族的理想實現の目的に奉仕することを要するは、それが民族の理想だからではなくて、民族の理想が「道」に協つてゐるからでなければならぬ。自己の本質によつて是認せられざるものに奉仕するは奴隸の奉仕である。

凡そ自己の生活を普遍化せむとする憧憬には三つの方面がある。一つは普遍的内容の獲得である、換言すれば普遍的教養である。二つは意志の對象の普遍である、換言すれば普遍的なるものに對する奉仕である。さうして第三は意志の根據の普遍である、換言すれば人間の本質に基づく意志決定、意志の内面的自由、意志の自律である。さうして民族主義が一つの規範を與へるに満足せず、唯一の道徳原理たるの地位を要求するとき、それはあらゆる意味に於いて半途なる道徳

原理である。半個人的、半利己的、半普遍的なる道德原理である。我等の普遍的な要求が此の如き道德原理によつて充さるゝことを得ざるは固より當然の數である。

7

最後に自分は一つの注意を附記してこの覺え書を閉づる。余の此處に云ふ民族主義とは國家主義と同義ではない。民族を統一するものは血液と歴史とである。國家を統一するものは主權と其意志としての法律とである。國家主義と民族主義との相違は政治上の主張として兩者を對照すれば最も明瞭になるであらう。現在の世界に於ける國境の區分は、強大なる民族の征服慾や政治的經濟的野心や、その他種々の理由によつて自然の境界を紊されてゐる。國家と國家とを區分する理由は、決して血族や歴史の一致ばかりではない。故に政治上に於ける民族主義は寧ろ帝國主義的國家主義に反抗して、世界主義人道主義の主張と握手するものである。それは猶一國內に於ける個人の自由の主張の如く、世界に於ける民族の釋放を主張するのである。凡ての民族をしてその血族上その歴史上の自然に従つて彼等の國家を組織せしめよ。凡ての民族を強國の壓制と征服慾とより釋放せよ。如何なる民族をも、強國が自ら肥るための犠牲、強大なる民族の貪婪なる慾望に奉仕するための奴隸となすことなかれ。政治上の民族主義は當然此の如き主張を以て世界の政

治的區劃を變革することを要求するものでなければならぬ。故に印度人や波蘭人や匈牙利人やスラヴ人種の或者に適用さるゝとき、民族主義の主張は、現在の主權にとつては危險なる反國家主義である。キルソンの民族主義とカイザー・キルヘルムの汎獨乙主義とは孰れが正當であるか、印度人は大英帝國に對して如何なる義務を負はざる可からざるか——此の如き政治上の問題は我等が此處に考察の自由を持つてゐる問題ではない。余が批評せむとしたるは主權によつて統一されたる國家主義ではなくて、血族と歴史とによつて統一されたる民族主義である。

(六、五)

十六 奉仕と服従

1

奉仕とは「己れ」を捨てて「己れ」ならぬもののために盡すことである。服従とは「己れ」を捨てて「己れ」ならぬものの意志に従ふことである。奉仕も服従も、共に「己れ」の否定を意味する點に於いて共通なるものを持つてゐるが故に、我等は往々この兩者を混同して、あらゆる場合にその對象の意志に服従することを以て、その對象に奉仕する所以の途であると思惟する。併し我等が奉仕に於いて否定する「己れ」と、服従に於いて否定する「己れ」とは、唯一つの場合を除いては——「道」に對する奉仕と、「道」に對する服従との場合を除いては——全然その意味を異にするものである。さうして奉仕の場合に「己れ」の代りに立てられるものと、服従の場合に「己れ」の代りに立てられるものとも亦決して同一であるといふことが出来ない。故に我等が眞正に或る對象を愛してこれに奉仕せむと欲するとき、その對象の現實的意志に服従するよりは、寧ろこれを「諫」めてその意志の矯正を要請しなければならぬ場合も、亦決して少しとしないの

498

である。これは古來——我等の祖先によつても——明瞭に認められて來た陳套の眞理である。併し今日の時勢は、痛切に、この眞理を再び明瞭に把握しなほすことの必要を思はせる。故に、余の理解せる限りに於いて、この明白なる眞理に幾分の根據を與へることは、この一篇の目的とするところである。併しこの問題は人生の至高なる問題の一つである。この問題に對する考察を進め行くとき、余は屢々自己の現在の體驗を超えて、豫感と憧憬との境に想を馳せ、未だ自ら十分に體得せざるところを以て、自他を責めなければならぬ場合に遭遇するであらう。この問題を考察するに當つて、余は特に、自ら主張することの畢竟自ら責める所以であることを感ぜざるを得ない。

2

我等は何故に「己れ」ならぬものに奉仕せざる可からざるか。この世には限りなき享樂の對象がある。自然も美しく、女も美しく、酒も亦美しい。然るに我等は何故に此等のものの甘美なる享樂を捨てて——時には一切の享樂を可能にする自己の肉體の生命を犠牲にしてさへ、「己れ」ならぬものに奉仕せざる可からざるか。

答へて曰く、我等の本質を眞正に生かすために。若し奉仕とは我等の本質を眞正に生かすもの

499

でないならば——若し奉仕とはあらゆる意味に於いて我等の自我を殺すものに過ぎないならば、我等は固より何物に對しても奉仕の義務を負ふことが出来ない。この意味に於ける奉仕は、唯外から強制することを得るのみである。この場合に於いて我等の感ずる奉仕の義務は、唯屠らるゝものの餘儀なき諦め、首絞らるゝ者が自己の悲痛を紛らすための自欺に過ぎない。我等は唯屠らるゝ牛の如く、悲鳴を擧げつゝ奉仕する外に途はないであらう。併し我等の此處に考察せむとするところは、此の如き強制的奉仕ではないのである。我等が心から感ずる奉仕の義務、我等が悦びを以て遂行する奉仕の行爲——此等一切の内面的奉仕は、唯それが我等の自我の本質を生かすときに於いてのみ始めて可能である。「己れ」を捨てる事が却つて自我の本質を肯定する所以であるといふ信念の上に立たざる限り、——若くは奉仕することによつて自我の本質が肯定される悦びを不知不識自己の内面に感ぜざる限り、如何なる道德の教へも、我等に奉仕の義務を是認させることが出来ない。

然らば何故に「己れ」を捨てる事が、自我の本質を生かす所以であるか。自我の本質を生かすために、何故に我等は「己れ」を捨てることを必要とするか。この命題を證明するためには、余は唯、恐らくは凡ての人の心の中にある「普遍を求むる憧憬」の衝動に訴へる外、他に道がないことを感ぜざるを得ない。茲にこの衝動をその本質の中に持つてゐない人があると假定すれば、

その人にとつては、奉仕と云ふやうなことは、道德的の意味に於いては、全然問題となり得ないであらう。彼は唯永久に、悲鳴をあげつゝ、瞞着と遁避との途に思ひ惑ひつゝ、強ひられたる奉仕を——人間の社會に生息する限り、彼はどの道その結果に於いて奉仕に當る行爲をしなければならぬ——遂行するより仕方がないであらう。若し又その本質の中に普遍に對する憧憬を持ちながら、未だこれを意識してゐない人があるならば、その人を自分と共通の地盤に持つて來るために、余は先づ彼の隠されたる本質の要求に訴へなければならぬ。奉仕に對する考察は、唯この衝動を承認する人々の間に於いてのみ、これを進めることが出来るのである。

「己れ」とは何であるか。それは「他」に對立するもの、他と局限し合ふもの、他より奪ふことによつて自ら肥り、他の肥ることに於いて自らの瘦せることを發見する「個體的存在」である。他と區別するところに自己の存在の根據を求め、他を排斥することによつて始めて自己の主張を全くするが如き、我等の生活の最も暑苦しき一面である。一言にして盡せば、「己れ」とは局限である、摩擦である、相聞である。「己れ」を根據として生きる限り、我等はこの廣い宇宙の間に於いて、小さい桶の中に入れられたる芋の子の如く押し合ひしつゝ——互ひに己れの臂を張つて常に他人に對する一撃を準備しつゝ、局限せられたる生活を續けて行かなければならぬ。「己れ」の享樂は他の缺乏を條件とするものである。「他」の享樂は「己れ」から奪はれたる

もの、「己れ」の羨望を誘ふものとして、常に我等の苦痛の種である。かくて、自他共に「己れ」のみに生きて行く限り、我等は相互の享樂をさへ、苦く濁れるものとせずにはゐられないのである。

此の如き芋の子の如き生活、此の如き多くの「個我」の生活——この蒸暑く狭苦しき生活の厭離は、我等の眼を必然に、更に廣きもの、更に高きもの、更に普遍なるものに向はしめる。我等の自我の内容は果して此の如き「己れ」のみに限られてゐるか。我等の本質には、他と局限し合ふ事を必須とせざるもの、自己の獲得する所は自と他と共に所有するが如きもの、他の所有を悦ぶことによつて自己も亦その所有に與かるが如きもの——約言すれば個體的局限を超えたる超個體的の自我が含まれてゐないか。若し此の如き超個體的自我を發見して、これを局小なる「己れ」の代りに置くことが出来るならば、我等の生活は、その時始めて、廣く爽かに涼しく胖かなるものとなる事が出来るであらう。普遍に對する憧憬は、「己れ」に生きる生活の眞相を洞見せるほどの者が、恐らくは必ず感ぜざるを得ざる内面的衝動である。

さうしてこの内面的衝動に驅られて、「己れ」の陋屋を脱れ出るとき、我等は我等の前途に、我等の憧憬を空に終らしめざるもの光——個我を脱却したる自他融合の境地の光——を認めることが出来るに違ひない。我等は既にこの現實の生に於ても、純粹なる觀照と愛との經驗に際して、我等が「己れ」を忘れて他人の幸福と不幸と歡喜と憂愁との中に生きることが出来るもので

あることを知り得た。さうして此の如き生活の廣さと胖けさとから來る云ひしれぬ悦びを味ふことが出來た。若し我等が常にこの状態を持續して行くことが出來れば、「己れ」の狭苦しさを脱却することは、決して空想に止らないであらう。茲に於て、普遍に對する憧憬は我等の實際的努力を導く力となる。他の個我的蠶食を外にして、我等の生活には新なる標的が與へられる。

固よりこの新なる生活に於いても戦ひは依然として繼續するであらう。寧ろそれは一層苦く一層苦しくなるであらう。併しその戦ひは今や「他」との戦ひではなくて「己れ」との戦ひである。國家と國家との戦争や、人と人との殺戮を條件とする戦ひではなくて、普遍を求むるこゝろと個我に踏み止らむとする欲情との戦ひである。故にその戦ひは内心によつて是認されたる戦ひ、正義の信念によつて裏付けられたる戦ひ、究竟の勝利の確信を伴ふ戦ひである。己れを生かすために他を殺さむとする戦ひではなくて、「人」を生かすために「己れ」を殺さむとする戦ひである。我等の超個體的自我はこの戦ひを経過することによつて始めて徐々として實現されるであらう。それは一面に於ては、歩々に「己れ」を捨てることである。さうして他の一面に於ては、次第に普遍的自我の光を増し行くことである。個我的局小に對する厭離を出發點としてこの新しき途を踏み始めたる者は、誰でも自我の本質を生かすことが同時に己れを捨てることを意味する宇宙と人生との組織を、やむを得ざるものとして承認するであらう。宇宙と人生とが此の如き宇宙と人

生とである限り、「己れ」を捨てることは常に自我の本質を生ずことであり、自我の本質を生かすためには、常に、「己れ」を捨てる必要がある。奉仕と云ふ言葉を最も廣き意味に解釋するとき、自他の孰れに於けるを問はず、普遍的自我を生かすために「己れ」を捨てることは、悉く奉仕と名けることが出来よう。

故に奉仕に於いて我等の捨てるところは、個體的自我の執着であつて自我そのものではない。我等が「己れ」の代りに立するところは、自我の本質であつて非我ではない。自我を捨て、非我を立することを奉仕と解するは非常なる誤解である。

3

奉仕に於いて否定す可きものと肯定す可きものとの對立を此の如くに解釋するとき、奉仕の對象が何ものである可きかに就いて、我等は一層明瞭なる觀念を持つことが出来るであらう。

常識の解釋するが如く、我等の奉仕すべきは、國家や君主や父母や上官や、凡て社會的地位に於いて我等の上に立つものに限られてゐるか。固より此等の長上も亦我等が心を盡して奉仕しなければならぬところである。彼等の擔當する特殊なる負荷の重さを思へば、我等は特に柔かなる心を以て彼等の勞を慰藉しなければならぬ。さうして我等の彼等に負ふところ多き一面より見

れば、我等は又特殊なる奉仕を彼等に致さなければならぬとも云ひ得るであらう。併し奉仕の對象を唯彼等のみに限りて、彼等以外の者に對する奉仕を閉却するとき、我等は不知不識、上に立つ者に對する阿諛、權力を有する者に對する屈從、恩恵と報償との打算的交換の動機を交へるものと云はなければならぬ。その中に「普遍的自我」の萌芽を有する點に於いては、あらゆる人格的存在の間に差別がない。故に我等は單に長上に奉仕するのみならず、弟にも子にも婢僕にも、乞食にも盜賊にも同じく奉仕して、彼等の普遍的自我の實現を援けなければならぬ。而もこの實現の途に多くの障礙を有する點から見れば、弱者は強者より、卑しき者は貴き者より、悪人は善人より、我等の奉仕を要すること益々切なるものがあるのである。

然らば我等の奉仕の對象は、凡そ我等自身ならぬもの、換言すれば一般に他人若くは社會であるか。我等は固より上は君主より下は盜賊に至るまで一般に他人と社會とに奉仕しなければならぬ。さうして凡そ我等自身ならぬものに奉仕するは、常に「己れ」の脱却を條件とするが故に、普通の常識が一般に他人のためにする行爲を高しとするは一應無理ならぬことと云はなければならぬ。縱令我等の奉仕が他人の利害に向けるゝ場合と雖も、他人の利害に奉仕することは他人の利害に生きることを條件とするが故に、我等自身の「己れ」は既に征服されてゐるのである。併し我等が「己れ」を捨てることによつて奉仕するを得るところは、決して我等自身ならぬもの

に限られてゐるのではない。我等は又「己れ」を捨てて我等自身の中にある普遍的自我に——我等の人格に奉仕することも亦出来る。さうして我等以外のものに對する奉仕は、凡て我等自身の人格を通じてのみ可能なるが故に、我等自身に對する奉仕はあらゆる奉仕の基礎をなしてゐるといふことも亦出来るであらう。自己に對する奉仕——換言すれば自己の内面に「道」を把握する努力を閑却するとき、我等の奉仕は外面的事功の一面にのみ馳せて、確乎たる内面的基礎を缺くこととなるに違ひない。

然らば我等の奉仕するを要するところは、畢竟するところ、自他の差別なく一般に人間であるか。「人間」の概念の如何によつては、余も又この思想に賛成することを躊躇しないであらう。併し「人間」といふ言葉を外延的普遍の意味にとるとき、その中に包括する個我の總計の意味にとるとき、我等は直ちに恐ろしき迷路に陥らなければならぬ。此の意味に於いて理解されたる「人間」は相互の間に無限の矛盾を包括するものである。彼等の欲情、彼等の現實的意志、彼等の利害は、常に錯綜し矛盾し分裂して、殆んど適歸するところを知り難き有様である。曇らされざる眼を以て世界の現状を見るとき、其處には國家の利害と矛盾する君主の利害もある、君主の利害と矛盾する大臣の利害もある、又國民の休戚と矛盾する政黨の利害もある。此等の個我に悉く一票を與へて——若くはその代表する範圍の廣狹に従つてその投票權に差別を附して——我等

の奉仕することを要する「人間」の本質を決定せむとするも、我等は到底何の成果にも達する事が出来ないであらう。我等の奉仕の對象は一でなければならぬ。一を以て貫かれたる多でなければならぬ。凡そ我等は何處に人間の一を求む可きであるか。我等の奉仕することを要するは人間の如何なる點にあるか。

我等の奉仕す可きは如何なる人間の欲情でも福利でもない。欲情と福利とは我等の「己れ」に屬する。欲情の満足と福利の所有とは、單にそれのみによつて我等の本質を生かすことが出来ぬ。此等のものが「己れ」を強めるの用をなすに過ぎないとき、此等のものの所有が如何に國家と民族と個人とを滅亡に導いたか、小兒の偏愛とその品性の崩壊と、國家の富強とその内面的墮落とが如何に屢々手を繋いで行くか、此等の事實は凡ての人の熟知してゐるところである。我等は、眞正に他人や社會に奉仕せむがためには、彼等の普遍的自我を喚び醒まして、これを彼等の中に生かさなければならぬ。我等の奉仕することを要するは「人間」の普遍的本質である。普遍的本質は「人類」の一である。「一貫の道」である。又「神」である。我等の奉仕の最後の對象は、畢竟「道」若くは「神」に歸する。さうして凡ての個體的存在に對する奉仕は、唯この唯一なるものを彼等の中に生かすところのみ成立するのである。

上來の所説に於て容易に看取し得可きが如く、自分は本論に於いて三種の自我を豫想してゐる。第一は他と差別することを本義とする個體的存在としての自我である、換言すれば「己れ」である。第二は此の如き個體的自我と結合し、此の如き「己れ」に繋縛されながら、而もこの繋縛を脱して自ら實現せむとする普遍的自我である。若くは普遍的自我を包藏する個體的自我、個體的自我に繋縛せられたる普遍的自我である。我等が現實の世界に於いて遭逢する一切の有情——余や他人や、君主や父母や、妻子や兄弟や、盜賊や婢僕等の所謂個人より、國家や社會等の團體に至るまで、此等のものは凡て此種の自我である。自分は今假に此種の自我を呼んで現實的自我と名ける。我等が「自己」と呼び「他人」と呼ぶものはこの現實的自我内に於ける對立である。さうして第三に、此の如き「己れ」に繋縛せられざる普遍的自我そのものを考へるとき、我等は茲に「神」若くは「道」の觀念に到達する。

我等がこの三種の自我の觀念を立するとき、其處には多くの困難な問題が蜃集して來る。個體的自我と普遍的自我とは如何に相互に關係するか。現實的自我はそのまゝに普遍的自我であるか、現實的自我は多くの段階を経て普遍的自我とならなければならないのであるか。普遍的自我は我

等の追求の標的たる理想に止るか、若くは我等と世界との根柢をなす實在であるか。それは自力を以つてのみ證悟すべき自性に止るか、若くは念々に我等を救済せむとする活動的意志であり、攝理であり、恩寵であり、慈悲であるか——即身成佛か即身是佛か、此土即寂光土か厭離穢土欣求淨土か、見性か念佛か、此等種々の問題は我等の考察を限りなき高處に導き去らむとする。併し自分は、現在の場合、此等の問題に對して輕率な斷定を下す必要を認めない。自分は唯此處に一つの事を斷定し、一つの事を約束することを要するのみである。即ち第一に佛性は——普遍的自我は、少くとも現實的自我の證悟するを要するものとして、それは我等の實現することを要する理想である。我等は少くとも即身是佛の眞理を把握することによつて、佛とならなければならぬ。第二に自分は普遍的自我そのものを單に理想と見るのみならず世界根柢と見、單に自性と見るのみならず救済の意志と見むことを欲する。併し現在の關係に於いては、自分は主として、これを現實的自我の實現することを要する理想の一面に限りて見ることを約束する。要するに現實的自我は二重の構成を持つてゐる。それは「己れ」にして同時に普遍的自我である。それは、「己れ」を征服することによつて益々普遍的自我を實現せんとする内面的衝動を——従つて道德的義務を負ふ存在である。さうして此の如き衝動に標的を與へ、少くともその限りに於いて我等の道德的生活の *causa finalis* (究竟因) となるものは普遍的自我そのものである。

此の如くに三種の自我を考へるとき、我等の——「自己」といふ現實的の自我の奉仕は、普遍的自我に對する時と、「他」といふ現實的の自我に對する時と、自らその趣を異にせざるを得ない。普遍的自我は絕對的に在ることを要するものである。それは無條件の *volens* (當爲) であり斷言的命令である。故に我等は唯普遍的自我に隨順することによつてのみ——その要求に従ひ若くはその意志を充たすことによつてのみこれに奉仕することが出来る。「神」若くは「道」に奉仕するとは、心を盡し身を砕いて、「神」若くは「道」に服従する外に、別に何等の途があることが出来ない。併し「他」の現實的の自我は——父母も長上も、君主も、國家も、凡て「己れ」の繫縛を脱却し得ざるもの、普遍的自我を實現し盡さざるもの、従つて普遍的自我を實現する事を理想とするものである。故に我等が此現實的の自我に奉仕する途は、唯彼等を助けて普遍的自我實現の道を精進せしめる所のみ成立するのである。従つて我等が他の現實的の自我に奉仕する道は自ら二途に別れる。一つは彼等の中にある普遍的自我に服従し、若くはこれを助成することである。二つは彼等の「己れ」を克伏して彼等の迷蒙を披拂することである。第二のものは普遍的自我に對する奉仕に於いてはある可からずして、現實的の自我に對する奉仕に於いては必ず(少くとも原理上)あらざる可からざるものである。第二のものを覺悟せざるとき、我等は對象に狎褻し阿諛し屈從するに止る。君主や國民や民族等と雖も、それが現實的の自我である限り、常に「己れ」に繫縛せ

らるゝもの、常に「己れ」を征服することを要するものであることは、曇らざる眼を以て事實を見る者の、何人も拒むことを得ざるところである。故に我等は常に上の如き二つの視點を保持しつつ、此等の現實的の自我に奉仕しなければならぬ。茲に於いて我等は奉仕と服従との分岐點に達着するのである。

奉仕とは自我の本質の肯定である。我等は我等の自我が擴充して對象を自己の中に包攝するとき、我等の自我が「己れ」の陋屋を出でて對象の上に轉移するとき、始めて心からその對象に奉仕することが出来る。約言すれば、奉仕の内面的根據は常に對象に對する我等の「愛」でなければならぬ。愛とは他から奪ふことではなくて、自己を他に與へることである。而も他の中に自己を失ふことではなくて、自己の中に他を包攝することである。それは自己を失ふことなくして自己を他に與へ、他から奪ふことなくしてこれを自己の中に吸収する、主客融合の境地、若くは主客融合の境地に對する憧憬である。此の如き境地若くは此の如き境地に對する憧憬を根據とせざるとき、奉仕とは畢竟内面的基礎を缺ける外部的強制に過ぎなくなるであらう。

固より我等が現實的の自我である限り——我等の普遍的自我が「己れ」の繫縛を脱却し得ない限

り、愛と雖も亦、「己れ」に對する普遍的自我の戦ひ及び征服——その限りに於いて内面的強制でなければならぬ。我等は逡巡として我等の「己れ」と別れ、遅々として普遍的自我の要求に従ふ。此間にあつて、愛は嚴厲なる我等の義務であり、當爲であり、理想であり——その限りに於いて我等に對する内面的強制であり、斷言的命令である。若し余は未だ對象に對して完全なる融合の愛を感じざるが故に、余はその對象に對する奉仕の義務を感じないといふならば、我等は永久に奉仕の生活に入ることが出来ないのであらう。奉仕の義務は我等が彼を愛せよといふ普遍的自我の命令を聽く時に於いて既に始まつてゐるのである。さうして聖フランシズの所謂「余の力の及ぶ限り——余の力の及ぶ以上に」彼を愛せむと欲する意志は歩々に我等を導いて主客融合の境地に深入りさせるのである。思ふに愛の内面的強制に堪へないものは、凡そ奉仕に堪へないものでなければならぬ。

併し要するに奉仕とは愛を——融合の愛若くは憧憬の愛を、内面的根據とするものである。故に愛を——愛の強制を感じぬものに對する奉仕は不可能でもあり且つ望ましい事でもない。さうして我等の感ずる愛は——愛の強制は、我等の置かれたる位置によつて異り、我等の中にある普遍的自我の成長の程度によつて異り、我等が現に自己及び世界に對して負ふ使命によつて異なる。故に我等は凡ての人に向つて、同一の對象に對する同一の奉仕を要求することは出来ない。或人

は、或場合に、甲といふ對象に奉仕しなければならない。而も他の或人は、他の場合に、甲と云ふ對象に奉仕してはならない場合も——甲ならぬ乙に奉仕しなければならない場合も、亦存在し得るのである。

佛本生傳に従へば、釋迦は、その前生に於いて雪山童子であつたとき、半偈を聽かむがために身を投げ、薩埵王子であつたとき、餓虎にその身を供養したといふ。併し彼は苦行六年、林中に「羸瘦して氣力あることなき」とき、「身に力を求めんが爲の故に」麤食を求めて自己の肉體に供養することを憚らなかつた。彼の肉體には將に涅槃を證せむとする使命が宿つてゐたからである。我等は道を求め道に奉仕せむがために、不惜身命でなければならぬ。同時に自己の中に道の證を求むる者は、又極度にその身命を愛惜しなければならないのである。

6

或ひは云ふであらう。奉仕とは對象に對する詮義を外にして、凡そ自己に要求さるゝものを、隨處に、無條件に、卽下に充すことである。自己の使命を忘れ、對象の意志の善惡をも忘れ、唯對象の意志を充さざるを得ざるが故に充すことである。釋迦前生の餓虎供養、山上の垂訓の所謂「人汝の右の頬を批たば亦他の頬をも轉じて之を向けよ」といふが如きは、皆この意味に外なら

ない。

固より「己れ」を捨てることはそれ自身に於いて朗かな喜びである。故に個體的自我に對する征服の殆んど完成せる人にとつては、軽く、執着なく、身を餓虎に與へ、若くは左の頬をもその敵に差出すことは、恐らくは一種の名狀し難き喜びであるであらう。併しそれが唯身體を餓虎に嚙ましめることの喜び、左の頬に感ずる痛さの故の喜び——此の如き犠牲の快感の享樂に過ぎないならば、それは婆羅門若くは中世の修道士にのみ相應しい一種の感情耽溺であつて、釋迦にも基督にも相應しいことではない。若し身を餓虎に供養したために、虎は一層狂暴になり、左の頬をも差出したために、その敵が一層猛惡となるならば——自己犠牲の結果が、對象を一層惡くし、世界を一層惡くするならばどうであらう。又此の如くにして身を猛獸若くは惡人に供養したために、自己の神と人に對して負へる使命が減び亡せるならばどうであらう。この場合にも猶身を餓虎に供養し、右の頬を打つものに左の頬をも差出すものは、「無我」の快感を味はむがために神と道とを私するものである。餓虎供養若くは左の頬の譬喩の理由をなすものは、恐らくは此の如き「無罣礙の享樂」以外になければならない。

自分の考へるところに従へば、此等の譬喩は一面に於いて、惡に抵抗するは惡を更に惡にする所以であり、惡に抵抗せざるは惡を善に赴かしめる所以であるとする信念——従つて餓虎供養は

餓虎をより善くする所以であり、左の頬を批たしむるは惡人を幾分の善に赴かしめる所以であるとする信念を豫想するものである。善なるが故に、助成することゝ共に惡なるが故に、あらがはざることも、亦善に對する奉仕であるとする信念を豫想するものである。さうして一面には又、隨處に自己を犠牲にして、「三千大千世界にわが身命を捨置かざるところなき」ことが、即ち「神」と「道」とを證する所以であり、かく證するところに自己の使命があると信する信念を豫想するものでなければならぬ。この二つの信念を有するが故に、聖者は身を餓虎に供養し、右の頬を批たるゝ時左の頬をも亦これに向けることが出来るのである。

併し凡ての現實的自我には夫々に自己の程度に應じたる「境」がある。その「境」を超ゆるとき、自己以上の境を模倣することも亦惡である。重ねて思ふ、若し釋迦が成道に垂んとして、先づ身を健かにせむがために、かくて「一切衆生を成熟せむがための故に」、牧牛女人から乳糜の供養を受けたとき、若し忽然として餓虎があらはれて彼を喰はむとしたならば、彼はその時にも猶その身をこれに與へたであらうか。

7

聖者が餓虎に逢ひて敢て抗はず、その血肉を彼が喰ふに任ずるとき、又正しき者が凶暴なる者

に右の頬を批たれて、更に左の頬をも差出すとき、彼等は猛獸に服従し、凶暴なる者に服従したのであるか。若し己れを捨てて對象の意志を成さしむる點よりのみ見れば、これも亦服従の一種でなければならぬやうに見える。併し聖者が餓虎にその身を供養するとき、彼は己れを捨てて餓虎の意志を自己の中に生かすのではない。又正しき者が左の頬を差出すとき、彼は凶暴なる者の人格を自己の中に立して自己の人格をそのために捨てたのではない。故に彼等は餓虎若くは惡者の意志に身を任せながら、その自我は超然として餓虎又は惡者の意志に染着せらるゝところがない。この場合に於いて彼等が「己れ」の代りに立するものは、神の意志若くは道の要求である。彼等は餓虎又は惡者の意志を成さしめながら、自らは神若くは道に服従してゐるのである。我等は、自己の意志を捨てて對象の意志を自己の中に立するとき、對象の意志を奉じてこれを自己の意志に代へるとき、始めてこれを名けて服従といふ。故に餓虎供養や、左の頬をも差出すこと等は、この意味に於いて餓虎若くは惡者に對する服従と云ふことが出来ない。自分は茲に、此の如く單純に「對者の意志を成さしむること」を服従の概念から除外する。

自分は又權力に對する服従を現在の問題から除外する。權力に對する服従は、ある場合には、餓虎にその身を與へること、右の頬を批つ者に左の頬をも差出すことと同様の意味に於いて、我等の忍従である、自己犠牲である、神又は道に對する服従である。この場合に我等は權力に服従

するのではなくて、神又は道に服従するのである。さうして又他の場合に於いては、自己の道德的意志を獨立に保持しながら、權力關係に立てる限り、自己を、權力關係に立てる限りの長上の意志に服従させるのが權力に對する服従の眞髓となる。權力關係によつて秩序を與へられたる社會の一員である限り、我等はその社會を脱出せずには權力の命令を拒む權利を持つてゐないからである。併しこれは權力者の道德的意志に自己の道德的意志を服従させることとは全然別問題である。故に我等は又この意味の服従をも現在の問題から除外しなければならぬ。

又自己の意志が他の要求と全然一致してゐるとき、自己の意志が他の要求に逢つて一步を進めることなしに、他の要求なきときと雖も全然同様の方向に進行するが如きときに於いても——此の如く特殊の意味に於ける自他の意志の一致を條件とするときに於いても、我等はこれを特に服従と呼ぶことを避けたい。この場合に於いては、外來の要求は、我等の意志決定に對して何等の特殊なる意義を持つてゐない。故にそれは平俗の意味に於ける一致若くは協同であつて、服従といふ言葉は強きに失すると云はなければならぬ。我等の此處に云ふ服従とは、自己の意志を排し、若くは自己の意志に先んじ、若くは自己の意志の空しきに當つて、他の意志が我等を率ゐ、我等を支配することを意味するものである。

自分は前に、服従とは「己れ」を捨てて「己れ」ならぬものの意志に従ふことであると云つた。

併し上來獲得せる洞察によつて、更に嚴密に、而も一般に通ずるやうに、これを云ひなほせば、それは「自己」を——余と云ふ現實的自我の意志を捨てて、余ならぬもの——普遍的自我若くは他の現實的自我の意志を自己の意志とすることである。故に我等が服従に於いて捨てる場所のものは、單に我等の「己れ」ばかりではなくて、又我等の普遍的自我である場合も存在し得る。さうして我等が自己の意志の代りに立するところも亦單に普遍的自我に止らずして、他の「己れ」——若くは他の「己れ」を迂迴し來れる自己の「己れ」であることも亦あり得るのである。

8

奉仕は自我の擴充を根據とするに反して、服従は自我の無力を——自我無力の事實若くは自覺を根據とする。換言すれば、奉仕の根據の愛なるに對して、服従の根據は謙遜である——眞實若くは虚偽の謙遜である。

茲に服従の最も正當なる場合を考察しよう。宗教的の欲求を心に持して自己の現實を反省するとき、我等の智慧は淺く、我等の意志は迷ひ易く、我等の内面的知覺は欺かれ易い。我等は煩惱具足の凡夫として、思へば思ふほど自ら信頼し難きことを感ずる。然るに、此處に人あつて、その人の指導に従ふとき、我等の生活の歩みが一歩々に照さるゝことを覺え、自ら知らざりし本

質の要求が喚び醒され且つ充されて行くことを感ずるとする。若くは我等の裏に普遍的自我に對する——攝取不捨の意志として活動する普遍的自我に對する信があつて、その意志が刻々に自己の途を導いてゐることを感ずるとする。その時我等が弱小なる自己の意志を否定して、その「師」若くはその「神」に服従するは當然である。我等は個體的存在の弱小を脱して、普遍的存在の中に歸るを得むがためにそれをするのである。自我の意志の確立せざるとき、自己の判斷の定め難きとき、自己の内面的知覺の恃み難きを感じるとき、我等は未知を求むる憧憬と、未知の前に跪く敬虔と、本質を觸知する本能とを以て、自己より優れたるものに服従する。

但しこの場合に於いて服従を正當にするものは、それが自我の本質を生かすものであるからである。我等の本能は、自ら認識すること能はず、自ら把握すること能はざるも、猶冥々の間に自己を生かすものを觸知する。さうしてこれに従ふことによつて眞正に自らの生きることを感ずる。故に彼は自ら知らざるものに服従することが出来るのである。我等の中に自己を生かすものを觸知す可き本能を缺くとき、所謂「師」若くは「神」に對する服従は危険である。我等は此の如き服従によつて滅亡の途に陥ることも亦あり得るのである。我等は此の如き信を名けて迷信と云ふ。迷信の對象は「師」でもなく「神」でもなくて「魔」と名けらる可きものである。我等は正當に服従す可きものに服従するためにも、常に我等の内面的知覺を磨くことを心掛けなければならぬ

い。さうしてその服従によつて益々内面的知覺を明かにして行かなければならない。

9

重ねて問ふ、我等が神若くは師に服従することの正しき所以は何處にあるか。それは我等が自己の本質に従ふことをやめて、自己以外のものに聽いたところにあるのではない。不明瞭なる把握の代りに確なる本能の觸知を置いたところに、知らざるものを信じたところに、かくて本質的生活に一步を深く進めたところに、其處にその正しさはあるのである。我等は神若くは師の意志の中に、自ら知らざりし自己の本質の要求を聽く。神若くは師とは、我等の知に先つて、我等を我等の本質の深みに導くものである。従つて我等は我等ならぬものを自己の中に立するのではなくて、この服従によつて一層我等自身を生かすのである。この意味に於いて、我等は他に律せられるのではなくて、自ら律するのである。この服従は自律的服従なるが故に正當である。

然るに其處には自己の本質を殺す他律的服従も亦存在し得る。第一に我等の内容の貧弱なるとき、我等の中に知見のみならず又正しき本能をも缺くとき、我等が茫漠として自ら空虚なるとき、我等の中に闖入して我等の内面を支配するものは、凡そ有力なるものであつて必ずしも正しいものではない。「神」と共に「魔」も亦、我等の空虚に乗じて我等の中に来り住む。さうして、我

等が自己の内面的知覺に——知見若くは本能に照して自ら生きずして、單に「他」をして自己を支配させるに過ぎないならば、神に對する服従と雖も猶我等を殺すものである。此の如き服従によつては、我等は自ら生きずに、自ら死ぬのである。

然らば何故に神に對する服従も猶我等を殺すものであり得るか。我等が外なる神を迎ふるに内なる神を以てせざるが故に。外なる神に導かれて内なる神が自ら伸びむとすることなきが故に。自己の任務を外なる神に譲つて、内なる神は惰眠を貪るが故に。自證によつて若くは信仰によつて、自己の内面的知覺を磨くことは、要するに我等を普遍に導く唯一の途である。内面生活の途には馬も車もない。我等は唯自己の足を以て——他に導かれ若くは導かれずに——この途を歩くことが出来るばかりである。さうして我等に歩くことを忘れさせるものは、如何に美しきものとも、畢竟我等を欺くものである。この意味に於いて神も亦時として我等を欺く。否、神は我等を欺くのではないが、我等は神によつて自ら欺かれる。神に對する他律的服従は、我等の懶惰の故に、却つて神に往く道を塞ぐものとなるのである。此の如き神は、我等にとつて、神ではなくて寧ろ「善魔」である。それは我等を生かすものではなくて唯我等に悪くものに過ぎない。

固より善魔に——父母や長上も時としては我等にとつて善魔である——服従するとき、我等の行爲は自己の内面的知覺に従ふときよりも過失が少いかも知れない。我等の人生の途は一層滑か

に、我等の行手には一層外面的幸福の光が裕かに輝くかも知れない。併し我等の本質はこの途によつて成長することが出来ない。多くの過失、多くの失敗、多くの蹉躓は、此の如き平滑、此の如き幸福よりも遙かに我等の本質の成長を助ける。凡ての人は真正の人となるためには自己の心から、生きなければならぬ。自己の責任を他に轉嫁して、他に服従することによつて過失の少い途を行かうとするものは、何時まで経つても生命の途に縁のない者である。

併し他律的服従の厭ふ可きは、自ら怠らむがために服従する場合のみに限られてゐるのではない。我等は又「己れ」を成さむがために、普遍的自我の聲を瞞着せむがために、先づ他人の「己れ」を成さしむる場合がある。茲に自分の上に立つ或入があつて或る命令を我等に下すとす。我等は自己の内面に、この命令を否認するある聲の囁きを感じる。併し我等はこの命令に對する服従を拒むことによつて、彼の恩恵を失ひ、責罰を受け、損失を蒙る。故にこの囁きを闇から闇に葬つて、顔を拭つて内心の否認する命令に服従する。恐らくは、彼は單に他の「己れ」を成さしむることによつて自己の利害を得むとするのみならず、又自らその内心の聲を聴くことを恐れてゐるのである。服従の美名の下に自らも普遍的自我を追求する勞苦を脱れむとするのである。故に此の如き服従は、自己の中にある「普遍的自我」を捨てて、他人の「己れ」を自己の中に立するのである。他人の「己れ」に乗じて更に自己の「己れ」を遂げむとするのである。

かくて他律的服従は盲目なる者の偷安か、奸譎なる者の阿諛便佞か——阿諛便佞を通じたる利己かである。故にそれは自己を汚し、他を汚し、重ねて道を汚す。それは普遍的自我の成長を妨げ、「己れ」の増長を助くるが故に自己を汚すのである。それは「他」の過ちを利用し、かくて彼の反省の眼を昏すが故に他を汚すのである。さうしてそれは自他の中に道の實現を妨げるが故に道を汚すのである。此の如き服従は實にあらゆる意味に於いて奉仕の正反對である。

我等が道を把握すること能はざるとき、我等は心を盡して自己の中に道を把握することを努めなければならぬ。さうして幾分なりとも之を把握し得るとき、これを自己の中に生かし、これを他人の中に生かすことは、我等の絶對の義務である。此二つの意味に於いて我等はあくまでも自己に——普遍的自我を實現すべき自己に、又これを實現し得たる限りの自己に——固執しなければならぬ。この意味に於いて自己に固執するもののみ始めて自らの主である。この意味の自己を拋棄するは唯奴隸のみによくするところである。さうして他律的服従は正しく此の如き奴隸のことである。之に反して奉仕は唯自ら主たる者のみによくするところである。奉仕とは自ら主たる人格の甘んじて萬物の僕となることである。さうして自ら僕となることは、主のことであつて奴隸のことではない。自分はこの意味に於いて僕と奴隸とを區別する。我等は常に道の僕とならなければならぬ。併し同時に如何なる者の奴隸となつてもならない。

人は又この意味に於いて自己に固執することを個人主義と名ける。若し個人主義と云ふ言葉をこの意味に解するならば、あらゆる道を求むる者の立脚地は當然に個人主義でなければならぬ。個人主義に立脚する者のみ、普遍を追求する心境に参し、普遍を追求する努力に参し、歩々に自己の中に普遍を實現する生活に堪へるであらう。この意味に於ける個人主義の精神は、自ら反みて正しからは、千萬人と雖も我行かむと云ふことゝある。(「倫理學の根本問題」参照)

10

最後に自分は二つの注意を附加して置くことの必要を感じる。第一に個人主義とは自分のしたくないことをしないことではない、自己の爲すべからずと信ずることをしないことである。したくないことをしないのは「己れ」を恣にすることであつて、自己の中にある道に固執することではない。

第二に個人主義とは他に反抗すること、他人に逆ふことを意味するのではない。他人に逆ふことを喜ぶものは、「己れ」を成さむとする者である、道を傷けるものである。此の如き反抗慾、此の如き爲我慾が如何に人と人との間の和ぎを妨げ、道の實現を碍げてゐるか、精細に世相を観察するとき、我等は實にその甚しきに驚かざるを得ないであらう。固より我等は如何なる場合にも

道ならざる意志に服従してはならない。併し我等は服従を拒むるときと雖も柔かなる心を以て、對象に對する愛を以て、對象に奉仕せむとする誠を以て、この服従を拒まなければならぬ。荒立てる心を以て世界に對せざることを——出来るならば如何なる場合にも對象の意志を成さしめむとする愛を以て世界に對することを——「順」と名けるならば、「順」も亦我等にとつて豊かなる考察の材料でなければならぬ。

(六、六一八)

十七 某大學の卒業生と別る、辭

諸君と教場で逢ふのも今日が愈々最後である。諸君の前には間もなく新しい生涯が開けるであらう。さうしてその新しい生涯は諸君に色々の喜びと悲みと、驚きと失望とを持つて來るであらう。この新生涯の第一歩は諸君の一生にとつて極めて大切な一時期である。この時期に踏み迷ふことは、人の生涯にとつて随分損害の多い事件でなければならぬ。自分はこの時期の通り過ぎ方に就いて、自ら多少の悔を持つてゐる者である。故に自分は自分の僅かなる経験と智慧とを諸君に分けて、諸君に別るゝに當つての饒としたい。若しそれが多少なりとも諸君の参考になるならば、自分の本懐である。

第一に自分は、凡ての人に勸めるにその生活の中心を拵へることを以てしたい。その中心を中心として、日々の生活を調整することを以てしたい。若しその中心を發見することが容易でないならば、自分は、生活の中心を求め、それを以て、それまでの生活の中心とすることを勧めたいと思ふ。

諸君が學校にゐる間は、學校の課程が外部的ながら諸君の生活に一種の中心を與へてゐる。諸君は諸君の生活を調整すべき具體的な秩序を手近に持つてゐる。従つて假令學校を詰らないもの下らないものと見る人々と雖も、猶これによつて自分の生活に一種の具體的内容を與へられてゐることは争ふことが出來ないであらう。併し諸君が學校を卒業して授業時間や課題や練習や試験の束縛を脱るゝとき、諸君は又一方に何となく日々の生活に具體的内容を缺いて、退屈と空虚とを覺えることを禁じ得ないであらう。學校に代つて諸君の生活の中心となるものが、直ちには諸君の手に落ちて來ないであらう。多くの人は、學校を卒業すると共に、何かをしなければならぬ義務を、他人から負はされるか、若くは自らの感情の中に負ふを常とする。併し今日の社會は我等の卒業を待受けてゐて、直ちに我等に適當なる活動の地を與へるやうな社會ではない。さうして自ら活動の地を造り出さうとするにも、我等は自己の内面に確かさの自信を缺き、我等の働きかける可き社會に對する適當の知識を缺いてゐるが故に、内外兩様の意味に於いて、何處から手をつけていゝかがわからなくなる。かくて焦躁と空虚と、この二つの相反せるが如くにして相近似せる感情は、手を携へて我等の生活に迫つて來る。さうして我等は焦れば焦るほど、益々生活の中心を失へる感じに捉はれなければならぬ。自分は學校を卒業すると直ちにこの病ひに捕はれて、學校卒業後の二三年は、まるで何事も手につかなかつた。さうしてこの状態を脱却するま

では、自分としては堪へ難いほどの忍耐と攝生とを積まなければならなかつた。故に自分は諸君の卒業を送るに當つても、特にこの點に關する注意を請はなければならない。凡そ人生は短く、人生は長い。爲す可きことを持つてゐる者には六七十年の歲月は須臾にして流れ去るであらう。併し何事にも倦める心にとつては、五十年の壽命も長い退屈な旅と思はれるに違ひないのである。さうしてこの短い生涯を空過しないためにも、この長い一生を退屈せずに暮すためにも、我等には生活の中心が必要である。自分は中心を缺いた生活の中にある充實と幸福とを考へることが出來ない。

固よりこの中心は強ひて拵へられたものではなくて、自分の中から發見したものでなければならぬ。學生に對する學校の課程、成年に對する職業の義務の如きものは、唯我等の内心の寂寞を胡魔化すための一時的手段となるのみで、我等の一生を貫く中心となることは決して出來ないであらう。さればと云つて眞正に内面的の意味に於いて、自己の生活の中心を發見することは却容易なことでないに違ひない。茲に於いて我等の問題は更に一步を進めて、如何にして生活の中心を發見すべきかと云ふことに移る。この問題に對する解答も亦固より容易ではないが、自分にはその具體的方法として一つの考案がある。これは自分が大學在學時代から考へてゐたことで、

而も未だ實行し得ないところであるから、これを自分の體得せるものとして語ることは憚らなければならぬが、若し諸君がこれを實行するならば、屹度良好な結果が擧るに違ひないと信ずるから、自分のことは棚にあげて遠慮せずこれを語りたと思ふ。

と云つてもそれは何も珍らしいことではない。最も自分に適しさうな人を選んで、その人の内面的發展を精細に跡付け、その通つた道を自分も内面的に通つて見ることである。約言すれば自らその「師」を擇んで、自己の鍛鍊をその師に託することである。師の奴隸とならずに、而も師に信賴して、常に「師」に照して自己を發見する途を進むことである。我等の時代はあまりに師弟の關係の薄い時代である。我等の間には、十分の責任を帯びて他人の靈魂の教育を引受ける心持も、尊信と親愛とを傾けて、自己の靈魂の訓練を長上に託する心持も——此等の崇高な、深入りした心と心との交渉が餘りに少い。自分は自分たちの受けて來た總まりのない教育と、徒らに漠然として廣い知識とを思ふ毎に、古人の受けた鍛鍊と訓練とを羨しいと思ふ。自分はこの春、信濃の飯山に行つて、白隠和尚修業の地なる正受庵を訪うた。庵は高社の山を望み千曲川に臨む小丘の上にあつて、杉の老樹の生ひ繁つた幽邃な境にある。初め白隠が惠端和尚をこの庵を訪うたとき、惠端は白隠を崖から蹴落したさうだ。白隠はそれにも懲りずに惠端に師事したさうだ。さうして或日白隠が一つの悟りを得てその坐禪の座から（彼は戶外の石上に坐して工夫を積んだ

といふことである。歸つて來る時に、惠端は縁の端に出て遠くから手招きをしながら白隠を歓迎したさうだ。自分はその話をきいて白隠と惠端との間が羨しくてならなかつた。自分にも、自分を崖から蹴落して呉れる師匠、縁側から自分を手招きして呉れる師匠がゐたら、どんなに幸福なことであらう。師弟の関係を以て奴隸と暴君との関係と見る者は淺薄である。師弟とは與へられるだけと受けられるだけを受けむとする、二個の獨立せる、而も相互に深く信頼せる靈魂の關係である。弟子をその個性の儘に一人の「人」とするとところに師の師たる所以があり、その稟性に從つて一個の獨立せる人格となるところに弟子の最も多くその師に負ふ所以がある。「道」の傳統は何等かの意味に於ける師弟の關係を経て、始めて内面的に生きるのである。（法然と親鸞との關係を参考せよ）。

併し今日に於いて師弟の關係が崩れたのは、人と人との精神的信頼が内面的に崩れたからである。他人の靈魂の鍛鍊を引受けるほど自分を信ずる力と、自己の一切を傾倒して他人に信頼する力とが薄弱になつてゐるからである。故に我等はこの根柢の缺陷を別にして、人爲的に、樂々と師弟の關係を昔に引戻すことは出来ない。我等の師となるに足るものは、疑ひ深き我等の心を征服して我等の尊信を餘儀なくするほど偉大なものでなければならぬ。従つて我等の師を求むる心が、おのづから身邊の人を離れて古人に向ひ、直接の關係を離れて書籍に向はむとするは洵に

やむを得ないのである。故に極めて幸福なる少數の人を除けば、我等が「師」を持つとは一人の人の生涯の著作を通じて、その人の内面的經驗に參することである。その内面的經驗を參照し、通過することによつて、自己の出發點を固めることである。我等はこの順序を経ることによつて、恐らくは確乎たる自己の出發點を獲得することが出来るであらう。さうしてこの出發點を固めることは、精神的の意味に於いて生活の中心を發見することに當るのである。

固より師に就くとは、自分の生活内容をその師の供給に仰ぐと云ふことではない。我等が愛し憎み努め怒る心は我等が我等自身の中に豫め持つてゐなければならぬところである。此等の愛憎や喜悲は我等の生活を刻々に新なる境涯に漂はしめ、往々にして我等の生涯を困惑と雍塞と彷徨と昏迷との境に導く。この窮境を拓きこの關門を透過する努力に於いて我等は始めて「師」の忠言を必要とするに至るのである。我等が師に就いて學ぶ可きところは、問題の解き方である、途の切り拓き方である。生活内容を流れ行かすむ可き方向である。若し我等自身の中に豫め生活内容を有することなく、一定の傾向を有することなく、解決を要する問題を有することがないならば、師に就くことは全然無意味でなければならない。故に生活の中心を求めるとともに古人の著作を研究するといふとき、我等の研究の意味は、讀書にあるのではなくて、我等の内面的知覺を開

拓してこれを正しき方向に導いて行くところにあることは繰返すまでもないことである。書を讀むとは自ら生きることを停止することを意味するならば、又他人の著作を研究するとは自ら省ることを中斷することを意味するならば、我等は固より如何なる場合にも、書を讀むことを、他人の思想を研究することを、生活の中心とすべきではない。茲に讀書と云ひ研究と云ひ、師に就くと云ふは、自ら生き、自ら省るための、一つの途を意味するものであることは、明瞭に記憶して置く必要がある。我等が師に就いて學ぶことを要する第一義諦は、行住坐臥に師の言葉を讀誦することではなくて、何よりも先づ、師と同一の勇氣を以て人生に衝當ることであらなければならない。自己の直接經驗を基礎として人生の疑ひに觸れ、人生の疑ひを解く途を求めることであらなければならない。

自分は前に最も自分に適しさうな人を選んでこれを師とす可きことを云つた。併し此處に「最も自分に適する」と云ふのは、現在の自分が最も愛好するもの、現在の自分が最も親み易きもの——換言すれば現在の自分の程度を以ても容易に接近し得可きものといふ意味ではないのである。此の如き「師」は唯我等を甘やかすもの、現在に於ける我等の偏局せる發展を更に一面的に偏局せしむるものに過ぎないであらう。現在の自分は自分の本質の一切ではない。我等の本質の中に

は無限の可能性がある。他日、我等の本質の中から、現在の自分には思ひも寄らぬ花が咲き出でる日がないことを、誰が保證することが出来よう。我等の「師」は我等の本質の中から此等の數多き可能性をひき出す力があるものでなければならぬ。我等を鞭撻して常により高き段階を望ましめる力を持つてゐるものでなければならぬ。約言すれば我等を叱り、我等をひき上げ、我等を打碎ぎ、我等を改造するに足るほど、複雑で偉大なものでなければならぬ。この意味に於いて我等に「無理」を強ひる力のないものは、我等の師と仰ぐに價ひせぬものである。固より我等が師を選ぶは一種の冒險である。我等は固より彼を知悉して後に彼を師と仰ぐのではなくて、一種の豫感に導かれて未知の師に牽引されるのである。併しこの際我等の冒險を導くものは、我等の憧憬を充す可きものを嗅ぎ分ける本能であつて、現在の自分に最も親み易きものを選び出す本能であつてはならない。多くの女性は、最も多く自分を甘やかすものを求める本能を以て、最も多く自分の尊敬を要求するものを求める本能に代へるが故に、彼等は幾度か無價値なる男の欺くところとなる。同様に自分の情感を甘やかすものを求める衝動に従つてその師を擇ぶものも、亦遂にその師に欺かれるであらう。假に某々情話の作者をその師とする者があるとすれば、彼はこの選擇の過ちによつて生涯の迷路に陥るに相違ないのである。

茲に於いて、我等の問題はおのづから「自然」と「不自然」との問題に落ちる。我等にとつて「自然」なものとは何であるか。我等にとつて「不自然」なものとは何であるか。

自分はこの問題に答へるに *Dialektik* の觀念を持つて來たいと思ふ。自分は從來デイヤレクテイツシュの考へ方をするといふ廉を以て度々某々の非難を受けた。併し自分は今も猶依然としてこの誤謬(?)に固執する。さうしてこの誤謬を諸君にも感染させたいと思ふ。デイヤレクテイクとは何であるか。それは一つのもの (These) がこれと矛盾するもの (Antithese) を放出することによつて世界を豊富にすることである。この二つのものの相互作用によつて新なる立脚地 (Synthese) に到達することである。さうしてこの「合」の中にあつて「正」も「反」も共に破壊され、高められ、保存 (Aufheben) されることである。故にそれは單に認識の法則なるに止らずして又本質發展の法則である。寧ろそれは本質發展の法則なるが故に又認識の法則なのである。さうしてこれを本質發展の法則として見れば、それは矛盾の征服を通じて常に新なる立脚地に進むこと——かくて無限の生々發展を続け行くことである。又これを認識の法則として見れば、矛盾するものの雙方にそれ／＼に存在の理由を認めて、この二つのものが更に高き立脚地に於いて調和の地を持つことを信ずる點に於いて、それは普通の形式論理を超越する。凡そデイヤレクテイクは、我等の思惟を實在そのものと共に流動させることであつて、狹隘なる論理の方丈

中に實在を幽閉せむとすることではないのである——少くとも自分はデイヤレクテイクを此の如くに理解する。故に自分は宇宙と思想とのデイヤレクテイクに參する事の淺きを恥づるのみであつて、デイヤレクテイツシュの考へ方をする事を恥辱と感ずることが出来ない。

今、デイヤレクテイクの思想を現在の場合に應用するに、我等は自然と不自然との對立を二様に解釋することが出来るであらう。一面から云へば、現在の自己と矛盾せざるもの、現在あるがまゝの自己を自由に流露させるもの——換言すればテーゼの立脚地に安んじて前進の努力によつて衝動せられざる生活は「自然」である。さうしてこれに反するものは「不自然」である。この意味に於いて「自然」に生きるとき、我等の生活には無理がなく安易で、洒脱で、如何にも垢抜けのしたものと見えるであらう。同時に我等の生活は現在の立脚地に停滯して、新なる立脚地から新なる立脚地に前進するデイヤレクテイクの働きは鈍麻するであらう。併し自己の本質の中に活潑なるデイヤレクテイクを持つてゐるものは此の如き「自然」の境界に安住することが出来ない。現在に對する不満、新なるものに對する憧憬——従つて常住に襲ひ來る一種の「無理」、現在以上のものに對する不斷の「努力」が彼の生活の中心に立たずにはゐられないのである。此處に於いて我等は「自然」と「不自然」との新なる對立に到達する。この場合に於いて自然なるものは、現在の自己に適合するものではなくて、自己の本質に適合するものである。現在の中にある

矛盾と不安とに押し出されて永久に前進の努力を續ける生活こそ自然であつて、テーゼに甘んじてアンティテーゼを通過しジュンテーゼに到達する努力を缺く生活は不自然である。現在に對して「無理」を加へる生活こそ自然であつて、現在の享樂のみに生きる生活は不自然である。我等が我等の本質を實現せむとするとき、我等の求む可きは後の意味に於ける「哲學的自然」であつて、前の意味に於ける「自然的自然」ではないのである。破壊は苦しく、努力は苦しく、緊張も亦苦しい。併し此等の苦しみを通してのみ眞正に生きることが出來るとすれば、この苦しみこそ人生の最も深き幸福、我等の生活の最も深き自然でなければならぬ。我等を強ひるもの、我等を叱咤するもの、我等を鞭撻するものの聲に耳を塞いで、唯現在にとつて自然なる生活のみに生きむとするは、懶惰なる怯者のことに過ぎない。さうして木質のダイヤレクテイクに從つて生きむとする勇氣は、單に「師」を擇ぶときのみ必要な條件には止らないのである。

自分は諸君と別れるに當つて此等の言葉を餞にする。職業のことや、成功のことや、世間の注意を喚起する方法や、世間に認めらるゝ祕訣等に關しては、自分は何事をも云はうとは思はない。自分の諸君に希望するところは、世間的成功を收めることではなくて、人らしい人となることである。自分も亦人らしい人となることを心願として、これからも諸君と手を携へてダイヤレクテイクの途を進んで行きたいと思ふ。

(六、七)

附 録

親
友

汝わが數度の流離を數へたまへり。
なんぢの革囊にわが涙を貯へ給へ。

親友

九月二十三日。

彼岸の中日だ。光の勝利の最後の日だ。之から物の影が次第に薄らいで闇が段々長くならうといふ日だ。力のない光が躊躇ふ様に庭の木立を照してゐる。かじけた青桐の葉が時々思ひ出した様に身慄ひする。風はちつとも吹かない。

例の暗い影が今日も朝から心の底に蠢いて居る。

十月一日。

本を読んでもちつとも身に沁みない。夕暮吉岡を誘つて例の所へ行つて飲んだ。僕の頭は荒れた水道だ。草鞋のきれたのや菜つ葉の腐つた奴が詰まつて水が流れない。だから酒の威勢でケチ臭いものを洗ひ流して了ふんだ。

葛吉が御酌をしながら妙な眼付をする。細い白い手を握つてやつたら巫山戯ちやいやよと小さな聲でいつた。お俊の三味線で吉岡が傘の雪を踊つた。あの大きな體でどたばたやるんだからた

まらない。豆子が吉岡さんの踊はまるで剣舞のやうよと云つた。

西川はしんみりして可愛い、吉岡は男らしくて痛快だ。

十月二日。

朝から頭が重い。酒が醒めれば寂しさが増すだけだ。此頃の僕の生活はまるで過去の黒い影に支配されてゐる。忘れられないから寂しいんだ。寂しいから飲んで騒ぐんだ。併し酒に酔つて葛吉風情を對手に巫山戯た處でそれが何の慰藉にならう。

強い刺戟が欲しい。過去を焼盡して新生命を燃え立たしめる様な強い刺戟が欲しい。然らずんば僕の心は荒んで鈍つて死んで了ふだらう。

僕は男だ。現在に生きるんだ。

十月十五日。

午後西川が来た。仙臺行の話が九分通りきまつた相だ。途中で買つて来た参謀本部の地圖を擴げて北の國は寂しいなア寂しいなアと如何にも情なさうに眺めてゐる。小村といふ別れともない人があるんだから無理もない。此冬は宮城野の曇も冷からう、目白臺の時雨も身に沁まう。西川が居なくなれば本郷だつてそれは寂しい。

夜二人で上野の××に飲む。今夜は二人きりでしんみり話した。いつもの夢見る様な西川の眼

が今日は潤ひを帯びて殊に美しい。話のきれ間にはウツトリ煙草の煙の行末を見まもつてゐる。
『オイ小村さんの夢でも見てゐるのか』といふと『何そんなことはないさ、小村は情の乗らない女だ、僕はあんな女に甘くなりきれない』といふ。僕がとぼけた顔をして『さうとも、さうとも』と相槌を打つてやるとそろ／＼遠廻しに辯護を始める。『君がそんなに不足なら僕が小村さんにラヴをしようか、君といふ人がなかつたら、僕はこの人を他人に渡すことぢやないんだ』といつてやると、『君ならいくらラヴしてくれてもいいよ』と愉快さうに笑つた。

西川は大分酔つた。玄關を出たら、下弦の月が裸になつた櫻の枝に懸つて居た。秋の風が蔞々と肌を沁みる。東照宮前の木下間に西川の手をひいてやり乍ら『小村さんの様な柔かな手でなく物足りないだらう』と僕が云ふと、『併し君の手は小村のよりも肥つてゐるよ』と答へて、西川は強く僕の手を握つた。

西川は可愛い男だ。彼は今可憐なる矛盾の中に生きてゐる。願くは何時迄も今の様なうぶな戀をさせて置きたい。さうして僕は側からからかつたり囁いたりしてゐたい。寂しい僕はせめて彼等の戀を戀するんだ。

歸つて机の前にぼんやり坐つてゐる。琴の緒をなでる様な風がさらさらと庭の木立をわたる。ふと昔の女の顔が心に浮んだ。

十月二十三日。

庭の青桐の葉が斑点がついて蟲に蝕はれて憂き秋風に戦きながら、申合はせた様に皆首をうなだれてゐる。蜘蛛が隣の山茶花から一枚の青桐の葉に糸をかけて、其垂れむとする葉先を強ひて擦げさせてゐる。外の葉は秋風の吹きのままに頼なげに空を遊いで居るのに、此一枚丈が蜘蛛の糸に釣られて葉先を動かさない。憎らしい蜘蛛だ。あの糸をきつて了つて、あの葉をも秋と共に寂しく戦がせて見たい。

西川から葉書が来た。目白の人が来て朝から話してゐるとある。君によろしくと云つたとある。例の話が愈々きまつて來月二日に出發することとなつた、心細くて仕様がないとある。

十月二十八日。

いやな日だ。白い雲の頭が崩れて、行方もなげに彷徨つてゐる。日の光が薄い、極めて薄い、死にかけてゐる。

昔の女から手紙が来た。馬鹿な奴だ。一度死んだものの蘇るのは、新に生れるよりも遙かに困難だ。今更こんなことを云つて寄越す位ならば何故あの時にあんな真似をしたのだ。何故僕の心を殺して了つたのだ。背いた女には盡未來際用がない。僕は新しく戀をするんだ。

夜になつて雨がふり出した。氣がむしやくしやして仕様がな。西川に行つて愚痴を聞いて貰

はう。……

西川から歸つた。彼奴も要するに馬鹿だ。自分の戀に有頂天になつて友達の苦痛を察することが出来ないんだ。「君にはちき新しい戀が出来るさ、小村も君をいゝ人だと云つて居たよ」なんてそれで立派な慰めのつもりでゐる。誰がそんな呑氣な事を考へてほく／＼してゐられるものか。身に沁みぬ慰藉の言葉ほど胸糞の悪いものはない。

親しいと見えるのも上邊だけだ。底を叩けばみんな『俺は俺の方の用事に忙しいんだ、そんなことに懸り合つてゐる暇を持たん』と云つてゐるんだ。凡ての人は皆心の底の底に冷たい自己を守つてゐる。西川もやつぱりさうだ。僕は廣い世界にたつた一人ぼつちなんだ。何人も汲んで呉れぬ憂を懐いて一人で暗い墓の中へ這入つて行くんだ。若し僕の心の底の底まで汲んで呉れる神様が居て、そんなに寂しくば俺がお前と一つになつてやらうと云つて呉れたら、さぞ嬉しいことだらうけれど、僕の神様はもう死んで了つた。嗚呼僕は一生一人ぼつちだ！

十一月二日。

西川もとう／＼仙臺に行つた。小村さんは赤くなつて、俯向いて、見送人の後に立つてゐた。プラットフオムの懸燈に照されて夜色の中にくつきりと浮んだ白い顔が美しかった。時々大きい、表情に富んだ眼をあげて西川の方を盗み見た。西川も潤みを持った眼を輝かして答へてゐた。戀

人の眼は衆人稠坐の中に於ても猶彼等だけが住する夢幻の世界を創造する。一瞬の眼くばせに果敢なき相思の情を通ずる。

歸りには小村さんと一所であつた。池の端を通つて切通し迄歩いた。凡て少女は其戀を知れる男に對しては特につつましやかなものだ。

十一月五日。

西川が居る時分には、自分の戀にだけ夢中で、友達のことをしみ／＼思つてくれないと怨んだ事もあつた。併し別れてからの寂しさつたらない。今日吉岡が來たけれども粗大な話許りで身に沁みなかつた。

夜西川から手紙が來た。仙臺に着いた時には流人が遠島に送り届けられた時のやうな感じがしたと書いてある。西川の本國は南の國だ。南の國には美妙な匂の白薔薇が咲いてゐる。

自白の秋も寂しいだらう。

十一月九日。

西川と別れてから彼等の戀が妙に自分のことのように思はれて來た。彼等の爲ならば僕はどんな事でもして見せる。

西川はどうしてるかしら。小村さんに逢つて西川の話をしたい。

十一月十三日。

本郷に來た序だと云つて小村さんが寄つた。寒菊を四五本持つて來て、西川の置いて行つた瓢形の花挿に挿してくれた。西川が居ないんで寂しいでせうと云つたら、返事はせずに例の大きい眼で僕の顔を見てにつと笑つて、心持赤くなつた。歸つてからもあの眼が不思議に頭に残つてゐる。昔々どつかで同じ眼の表情を見た様な氣がする。

十一月十七日。

西川と小村さんとの夢を見た。前後は凡て忘れたけれども唯一刹那の光景丈は前後を絶して鮮に記憶してゐる。夜の醜なる背景であつた。西川が此方に背を向けて遠くの方を小くとぼとぼ歩いて居る。小村さんが彼の袂に纏るのを彼がふりきつて行くのだと僕は夢中に解釋してゐた。前景には小村さんが袖を顔にあてゝすすり泣きをしてゐる。僕が側に立つて色々慰めるけれども女は頭をふつてすねた様に泣き續けてゐる。と思ふ間に俄に顔をあげて僕を見て笑つた、其眼が丁度あの日の眼であつた。眼がさめて、有明の暗いランプの光で室内を見まはすと、日外の寒菊が柱の花挿に挿されてゐる。亂れた姿が非常にいちぢりかつた。

何故こんな夢を見たのであらう。表面丈に解釋しては西川にすまない。僕と昔の女との關係が西川と小村さんとの關係と混淆して一つの夢になつたに違ひない。

十一月十八日。

僕は久しい間自分の孤獨を忘れて居た、西川等の戀が續く間は自分も一人ぼつちでない様な氣がしてゐた。併し考へて見れば彼等の戀は彼等丈の戀だ。僕は矢張一人生きて一人死ぬ爲に生れて來たんだ。寂しい、寂しい。

蟋蟀が机の上に来てとまつてゐる。捉へれば捉へられるに任せて身動もしない。凍えて居るんだらう、可哀さうに。

十一月二十日。

壽美子さん（小村の名だ）が來た。此前の寒菊は萎れてゐるからといつて新しいのと代へて呉れた。

十一月二十一日。

朝から雨がびしょ／＼降つてゐる。庭の青桐は悉皆坊主になつて枯葉一枚も枝に残つてゐない。蜘蛛は山茶花から隣の縦の木に網を張つてゐる。一日でも絲を紡がねば生きて居られないものと見える。

西川から手紙が來た。例の夢の様な情感の言葉を並べて、僕は君を眞實の兄と思ふと書いてある。

壽美子さんからも繪葉書が来た。

十二月五日。

寒い。火鉢の火が青い焰を吐いてゐる。紙をくべるとべらべらと燃えて了ふ。火が盛んに燃えて居る時には、どんな貴い物を其中に投じて、火勢を減じたくない様な氣がするものだ。火が消えたら僕は死ぬんだ。(完)

(四十一年十月記)

狐
火

狐火

西川は到頭彼の所謂「影の女」と心中して了つた。世間には用のない男であつたが、友達の間には忘れ難い思出の數々を残して行つた。巫山戯た様な眞面目な物の言ひ振りに何とも云へない寂し相な *puance* を漂はせる男であつた。打寛ろいだ調子の底に何處か人に迫る峻しさを隠してゐる男であつた。従つて彼の文章には寂しい、切迫つまつた方面のみがあらはれて居た。彼の死後、其手文庫の中から、手紙の斷片やら書き捨てゝ置いた感想やら、色々の反古が山の様に出て來た。中には綴ぢ合せた紙に日記體に書いてあるものもあるが、大抵は *バラ／＼* の洋罫紙に鉛筆の走り書きで、碌に讀めない奴さへ少くない。さうしてそれが文庫の中に *ごちや／＼* に抛り込まれてあるので、時の前後の鑑定さへ十分には付け難いのが多いが、中學の初めから心中する一位前迄の長い年月に涉つてゐる様に思はれる。暇があつたら之を年代の順序に並べて、西川の一生の涙や迷をば繪巻物の様に繋ぎ合せて見たいと思つてゐるが、此忙しい身體では中々思ふ様にも行かない。次に掲げるのは西川が大學を出てから其翌年夏頃迄の反古と思はれるものを探り出し

て、大體筋道の通る様に並べて見たのである。中に出て來る小池や僕の手紙は西川が自分の反古と一緒に手文庫の中に抛り込んで置いたものである。

序に讀者の頭腦が混雜せぬやうに脚本に倣つて役割を出して置かう。

西川……卒業したての學士、東京。山口……その友。小池……京都にゐる。その母。その妹。靜代……山口の幼馴染。

山口生記

1

家に籠り居て仙臺以來書き來れる六冊の日記を焼く。過去は凡て夢なりき。樂みも悲みも流れて歸ることなし。我が過去の生活に慕はしきものなく、我が既往の思想文章に傳ふるに足るものなし。故に之を焼き棄てゝ甲斐なき追懷の悲を斷つ。我が生活の價値は未來にある可し。然らずんば我生は徹頭徹尾無價値なり。

2

山口の葉書 (東京から東北へ)

六月十六日夜、

會へたのは嬉しかつたが、餘情を盡さずに別れたのは限りなく本意なかつた。殊に學校から出て行く君や小池は、何だか詩の中から現實界へ入り果てる人の様に思はれて、此迄の若い君はもう昨夕限りで見られぬ様な氣がして、佗しくてならなかつた——今日は既に郷里の人となつて、一人前になつた君の姿が家の方々に大きな満足齎したことと思ふ——今日午後、一年振で昔の田端に行つた。森が拓かれ野が坦かにせられ、新しい家並が出来て途中の様は一變した。櫛の木立は相變らず森然としてゐる。眞言院には老僧限りであつた。君も居す渡邊君もぬぬ寺堂を廻つて見て、櫻と楓の若葉が濃緑になつて居るのを見て、云ふに云はれぬ哀愁を覺えた。

晩春の潮色、初夏の緑、砂丘を渡る波の音、一ノ宮の海は大分僕の心に響いた。ノートも讀む氣になれず、歸つて今日も未だ一日そはそはしてゐる。試験はどうするかわからない。

一ノ宮で受取つた女の寫眞を今日國へ送り返した。先方には氣の毒かも知れぬが斷つて了ふ積りになつた。無論寫眞が不満足だからではないのである。

母が二十四五日頃京都に出て僕を待つと云つて來た。早く往つて小池一家の人達とも逢ひたい。千枝子君の大きくなつた様をも見て、九月君に逢ふ時の土産にしたい。

昨夕君を送つてから自分も北の國へ行きたかつた。雨の夜の街を獨りとぼく、歩き乍ら、汽車の中の夜情を思ひ、想像に上る北の國の風情を思つて、妻擇びよりも旅だと思つた。

山口の葉書 (京都から東北へ)

東京を發つ前に久し振で昇之助を聞いた。去年の十二月十五日に「寺小屋」を聞いてから正に半歳を踰えたが、聲も姿も尙昨日見た人の如くであつた。「……泣々別れ行く跡を見送り／＼延上り……イ、イ、イ、イ……」「サア／＼ちやつと往て尋ねて／＼といきせき女房……」どうだ、憶ひ出すだらう。

其爲に東京の出立が一日延びて、昨日午後夏の雨に濡れる青葉を眺め乍ら西に向つた。京都の町は例によつて物靜かである。此處に來て又君が共に在らばと思ふ。來年は是非一緒に西下したい。

母は二三日中に入浴すると云つて來た。靜代君も學校の試験を了へて今明日中に東京を發つ筈である。之に小池一家も加はるのだから、京都から綾部迄の道中は例によつて大に賑ふことであらう。

千枝子さんは一年の間に大分娘らしくなつた。小池は固より、小池母堂からも未だ御目には懸らないが何卒よろしくと云ふ傳言である。

影の女が黒い着物を着て今日も亦僕の頭の中を通る。五つ許りの大人しい女の子の手をひいて行くのである。顔は背けてゐるので見えないが、解いた儘の髪の毛は巖角の滑かな上を乏しき水が千筋に細く迂り落ちる様に肩に亂れ懸つてゐる。女の左には、遠い寒い壁の上に暗い行燈の燈が描く様な影の男がゐる。女の左の腕を其右の腕にまいてゐるらしい。男は昂然として行く、女は引ずられる様に俯向いて行く、子は又指を啣へて母の後に従ふ。三人共に一言もなく靜に僕の周圍を廻つて行く。其足音はこゝりとも響かない。男は影の薄き儘に、女は顔を背けたる儘に、子は指を啣へたる儘に、靜に僕の周圍を廻つて行く。

男の顔丈が朦朧たる影の中から鮮かに浮上つて來た。嗚呼彼の狒々の様な笑顔が堪らない。平べつたい、淺黒い顔と、大きい、併し薄い唇とが堪らない。

北の國でも夏の眞晝は焼け付く様な暑さである。溢れ漲る日の光は疲れた頭に痛い程の刺戟を送つて來る。僕は今机の前に坐つて、黒く緑した櫛の梢を渡る風を眺めてゐる。

嗚呼下らぬ夢を繰返してゐる間にもう秋風の立つ頃となつた。影の女は要するに影の女ではないか。昔僕との間に在つた事を、彼は口の大きい、唇の薄い男との間に復習して來た女ではないか。而して復習して來た事と、新に習ひ得た事とを齎して再び僕に臨まうとする女ではないか。一體僕は *Possessor* の悦を知らぬ男である。影の女と別れなかつた頃さへ、僕はおど／＼した、人目を憚る日のみ送つてゐた。夜風の寒い森の中でも、唯二人許りの世界に住む様な氣がした事がなかつた。況して今は唯 *Possessed* の世界に、肩で息する、蒼白い生き方をしてゐるに過ぎない。

月影の凄い晩に、草を藉いて寝てゐた若い羊飼の口に蛇が忍び込んだ。羊飼は咽を蛇に噛み付かれて悶え苦しんだ。ツアラトウストラは有らん限りの聲を絞つて「噛み切つて了へ、蛇の頭を噛み切つて了へ」と叫び立てた。羊飼は其聲に勵されて懸命に蛇を噛んだ。さうして蛇を噛みきつてから今迄人間が笑つた事のない様な朗かな笑ひ方をした——僕は蛇の頭を噛み切つて了ふ力のない、弱い羊飼である。朗かな笑は何時の世になつたら僕の唇を洩れることであらう。

地理の接近は思ひ出の接近である。僕は何時迄愚圖々々田舎に迂路ついてゐる積りなのであらう。早く東京に歸つて快活な日を送りたい。山口も千枝子嬢の消息を齎して近い内に東京に歸つて來よう。新生だ。新生だ。影は要するに影に過ぎないのではないか。

「一寸分らないので魔誤ついたよ」と云ひ乍ら、山口は新しい下宿の玄関に立つて汗を拭いた。「私も豊さんと一處に歸つて参りました」と云つて静代さんはバラソルの柄をいぢつた。其姿のすらりとしたるが如く其氣性ののんびりとした女である。山口の友達に逢つても羞かんで見せる様な芝居を知らない、白い、静かな女である。今日は赤い罌粟の花を一輪束髪の上に釵してゐた。

山口と静代さんとが歸つてから、山口の置いて行つた週覽雜誌「綠葉」を讀んだ。中に千枝子さんの書いた「子燕の旅」と云ふのがあつた。遠い海原を通ふ燕の群が、孤島に近い礁の上にとまつてゐる。親に伴はれて始めて此長い旅に上つた子燕が、顔にかゝる浪の餘沫に驚かされて眼を醒すと、早や東の空が白みかけてゐると云ふ様なことから筆を起してゐる。幼い筆ながら觀察の獨創的な、印象の鮮かな文章である。千枝子さんは此燕の様に、驚きと心跳とに満された心を以て人生の曙を待望んでゐるのであらう。小池の様な親切な兄と、小池母堂の様な行届いた親とを持つて人生の旅に上る人は幸福である。

夕飯を了へて一人で散歩に出掛けた。街の火も秋と共に光を鮮かにした様に見える。薄りと降

りた夜霧も涼しい色に夜店のカンテラの火を籠めてゐる。氷屋に下げられた寄席のビラは景氣のよい赤に染められてゐる。切通しの角を曲らうとしたら、新しい高等學校の帽子を被つた六人連が寮歌を唱ひ乍ら一列に街道を押し寄せて來るのに逢つた。

東京の空氣は田舎に比べれば何と云つても弾力に満ちてゐる。僕は湯島の臺に立つて、深々と夜霧の空氣を吸つた。

小池の葉書 (京都から東京へ)

母と妹とは用があつてまだ國に残つてゐる。男一人の所帯はノンキ此上もない。

床を出て飯を食つたらドンが鳴つた。秋雨が木立の多い庭に小やみなしに降つてゐる。松葦の賣聲がする。ゴロゴロ拾つて歩く様な俵の音がする。静かな秋だ。

段々旅行にいゝ時節も近づいて來たが、今年は實驗室で秋を暮すより外に仕方があるまい。切に去年の信飛旅行を思ふ。

鳩がないで、彼岸の鐘が鳴る。

小池の葉書 (同)

夜の三時だ——秋雨の寂しい夕暮を、湯歸りに、いつか君と二人して冷を茶碗で空にした例の瓢箪に一杯注がせて来て、チビ／＼やつた。矢張り冷だつた。夕飯を食つて空瓢と共にコロリと横になつて結んだ一醉の夢が今醒めた。

雨があがつて蟲の音が切りと秋を告げる。此儘に眠つて了ふには惜しい風情だ。残燈をかゝげてつくねんとしてゐる。

昨年今夜は上松で七人始めて一緒に枕を並べた。臨川寺の光景が忍ばるゝ。

當時「鱒髯」たりし僕は今悄然としてゐる。何處からか鐘の聲が渡つて来る。二點、三點、四點、斷續して物靜かな夜の空氣に漂ふ。何と云ふ聲だらう。何と云ふ思ひだらう。

小池の葉書 (同)

また獨りで飲んでゐる。いやな時には酒でも飲まんけりややりきれない。

君の「緑葉」に書いて呉れた「鷗村先生の顔」を読んだ時は君自身の姿を見る様な心持がして堪らなかつた。君は根から干からびて了ふ人ぢやないが、粘り氣は取り切れはすまいが、寂しい處、大きい處、條理の立つた頭のいゝ處が似てゐる。

俺は薄つべらで、曲つてゐて、乾いてゐる。まづ「乾反葉」だな。何でこんな男に生れたのか情ないが今更仕方もない。俺よりか妹は同じ兄妹でも母の血を餘計に受けた丈でした。

俺の血を傳へて兒を生むのは今の心ではどんなにか苦しい仕事だ。縁談をきくとグンと參つて了ふ。今夜も人の心も知らずに國からいやな事を云つて來たのでやけ酒だ。

こんな葉書が來たなんて座興に友人の前に出されちやいやだぜ。

小池は此世にも稀なる善良な男である。それでもあんなに下らない様に自分を卑下するのは、畢竟完きを賣むる心が強いからである。若し小池が子孫を作る資格を缺くものとするれば、僕の如きは果して如何すればよいのであらうか。

山口は依然として僕の爲に、千枝子さんを貰はむ事を希望してゐる。さうして千枝子さんならば屹度君の悲を癒す事の出来る女だと云つてゐる。併し山口には、彼の暗い影がどんなに深く僕

の胸に喰ひ込んでゐるかゞわからないのだ。氷を戀する火ほど果敢ないものはない。影を捉へむとする形程悲しいものはない。僕はまだ千枝子さんに逢つたことはないが、假令逢つて氣が合つた處で（逢へば屹度氣が合ひ相に思はれて仕方がない）此果敢ない悲しい思をさせるには忍びない。僕は到底影の女の中に置いて人と戀するの齒痒さに堪へない。

初冬の夜の静けさに乗じて、影の女は今夜も亦僕の頭の中に忍んで來た。併し今宵は紅入友禪の被布を着て、千代紙を截つて幼い僕と遊んでゐる。疊の上には董やれんげの花が散らばつてゐる。何處かに母の呼ぶ聲が聽こえる様に思ふ——僕は涙を流した。

11

Erste Erfahrung は其何事たるに關せず、之をなす人にとりて重大なる事件である。従つて人に或種の Erste Erfahrung をなせしむる事は吾人の Selbst-Gefühl を Kraft-Bewusstsein を高むる所以である。更に人を此の状態に續いて、其人の周章し、困惑し、歡喜する表情を觀察することは一種の殘忍なる満足を興へるであらう——茲迄考へて來て僕は戰慄した。僕は到底甘い男である。

嗚呼僕は verführen されるものゝことを考へるに堪へない。

12

怯者也。痴者也。

努力の目標に一として實なるものなかりし。人生に觸れむと欲し、人生に觸れざらむと欲しき。余は動きのとれざる關係に立つことを恐れたり。

現今の余にとりて唯一の眞實なるものは異性なり。異性の美と醜と悲哀と歡喜とを歌ふ詩歌音楽彫刻演劇也。事業や思想や時として余が世界の實在となる。平時に在りては假也、空也。

而も唯一の眞實なるものに對して猶満足し得る生活をなさざりき。之一つは假なるもの、空なるものゝ影、實なるものを脅せばなり。一つは實なるもの甲、實なるもの乙を妨ぐれば也。

女を愛する事の終結は戀愛也。然れど近來余は戀する事能はざりき。これ一つは多くの女に於て心の柔かさに觸れたればなり。一つは多くの女に於て冷笑す可き點を見れば也。余の女性に對する興味は一點に集らず、故に多くの女を淡く戀して如何なる女をも深く慕はざりき。但し凡てを通じて余の怯懦累をなす。努力を馬鹿らしとなし、外に在りて物を嘲るを喜ばしとする者に戀あること稀なり。

怯懦なる者は不滿を客觀して悲哀に生く。荒涼寂寞に生く。現今余が内生活の中核をなすもの

は不満の味なり。

嗚呼何時迄か異性のみに生きむ、不満の味のみに生きむ。

現今の余が心は死に瀕せり。

如何にして生きむか、如何にして蘇生せむか。

13

深き執着なき處に深き經驗なし。執着淺き者は努力熾ならず、得るも喜薄く、失ふも悲少し。全く執着なき時其處に喜なく悲なきも亦一種超絶の趣、天空海澗の味あらむ。連絡なく系統なき小執着時々刻々に去來する者は、喜悲の淺き波の中に其生を託するものなり。去來するものゝ無常なるに、不安の念去り敢ざる者也。之を凡夫の生活と云ふ、迷の生活と云ふ、小人の生活と云ふ。余が現今の生活は正しく凡夫の生活也、小人の生活也、迷の生活也。價值ある生活とは深き經驗の連續する生活也。充實せる利那を連結せる生活也。深き執着なき處に價值ある生活なし。凡夫の生活は之を生き乍ら死せるの生活と云ふ。死にありて生を望み、生を得ずして生を得ざる悲哀を客觀するの生活は餓鬼の生活也。余が現今の生活は正しく餓鬼也。願くは生を望むで生を攫むの大精進心を起さむ。餓鬼道に生る悲哀これ菩提心也。

14

宇宙と人間との關係を立すること大執着の核心たるに足る。

放蕩の生活は執着を散漫にするの生活なり。感觸を鈍くするの生活也。戀する者迷ふ者は救はるゝを得む。放蕩を趣味とする者は底なき淵に沈む者也。時々刻々自ら殺す者也。

利那に生くるとは過去と絶するの謂に非ず。人には記憶あるが故に前の利那と今の利那と連絡す。前後を絶して今の利那を享樂せよとは不可能事を強ふる也。今の利那より背景と餘韻とを奪ふ也。余は利那々に充實の生を送らむと欲す。然れども節制と努力とを無視する能はず。

現在を離れて過去ありや未來ありやを知らず。唯余は現在の中にある過去と未來とを愛惜せむと欲す。

現在の享樂を捨てむは願ふ處にあらず。唯享樂の意義を考ふることを忘れざらむ。部分を味ひ全體を觀じて宇宙の間に生きむこと我願也。

15

三月三日となつた。実行力の伴はない思想程當にならないものはない。影の女は今僕の頭の中

で其子の爲に雜壇を飾つてやつてゐる。今、茜染の雪洞に小さい灯を點して五人囃の左右に並べた。今、無心に見入つてゐる女の子を抱き上げて堪らない様に頬擦した。今、思出した様に之を突き退けて、顔を背けて涙を拭つた。

16

小池の妹も愈々女學校を卒業した相だ。愈々上京して英語を修める事に決心した相だ。山口はノートを擔いで鎌倉に行く前に我事成れりと云ふ様な顔に微笑して見せた。山口の説に従へば二つの大きな眼は心の躍りに輝いてゐるとの事だ。其表情は心の力が漲つて居乍ら自分でちつとも意識してゐないから、頗る無邪氣で可愛らしいと云ふことだ。凡ての尻ごみと躊躇とを無視して新しい力を刻々に待つてゐる様な緊張の感じが身に迫つて来る。僕と影の女との間に割込んで来る、餘儀なく烈しい印象が期待される。此の期待が實になつたら心の中に又新しい戦が起らう。併し雨が降つても暴風が騒いでも兎に角此の濁つて沈んだ生活を搔廻して呉れる力が欲しい。久し振で脳髓の血管を、漲る勢でドク／＼と流れて行く血の音を聴きたい。

——汝痴者よ。汝の大業な期待を嘲笑する運命の笑が遠くより聴こえて来るを知らぬか。漸く十八になつた許りの一少女に汝は何を期待せむとするか。

17

山口への葉書（東京から鎌倉へ）

兩度の御葉書難有う。勉強が出来て何よりだ。前にも話して置いた通り二三日中に淀橋の方に引越す積りだ。小池の妹には向うで逢ふことになるだらう。

近頃は頻りに寂しい。そんな時には家にゐるのが一番いやだ。併し訪問して慰められる様な友達は一人も居ない。無闇に家を飛出して無闇に近處を歩き廻つて、疲れて歸つて来て直に床に入る。思ふ様我儘を云つて、思ふ様巫山戯て、それでも僕を可愛がつて呉れる人が欲しい。友人でも戀人でも姉でも叔母でも何でもかまはぬ。理想、才能、學問によつて結ばれた緊張した友情は厭になつた。我儘によつて、缺點によつて、短所によつて結ばれた友が欲しい。御世辭のない處、之に近いのは君一人だが、それでも不満に思ふ事が少くない。君も固よりさうであらう。人間の交りは淺慕な者だ。人の生涯は寂しい者だ。嗚呼自然が慕はしい、陶醉が戀しい。猶更耶蘇教の神様に祈禱を上る心持が懐しい。併し僕は罪惡の筆頭なる高慢を持つてゐる。碎かれざる心の中では神様が先づ碎けてしまった。

先輩を離れ、朋友を離れ、父母兄弟を離れて孤獨の生活をして見たいと思ふ。淺ましき、寂

しさの感じは却つて少いだらう。
此葉書が着く頃には静代さんや千枝子さんが見えて居るかも知れぬ。雨の日を語り暮されるのが羨ましい。

18

四月二十九日朝、鎌倉。

君の豫想通り昨宵人を送つて停車場迄行つて、三人連で歸つて來たら久し振の御便りが届いてゐた。

晝間は雨に怯えてゐたのか、萎げ氣味であつた千枝子さんが、歸つて話になると活々とし出した。床に着いたのが十二時、今度は静代君が素的な雄辯を振ひ出して、襖を隔てた隣の部屋では西京辯と東京辯とが嵐の音を打消してゐた。(山口)

昨日は雨の中を鎌倉に参り、江ノ島から七里ヶ濱の白砂を踏んで、後に富士の裾野を望みました。辨天洞できいた波の音と、昨夜更けてからの松風は未だ耳の底に響きます。今日の荒れでは富士は見えませんか。縁がなかつたことゝ諦めて居ります。

入京したのは雪の日でした。是非一度御目に掛り度、静代様に御一緒に願ひましたから何卒御

願致します。(千枝)

お待申した千枝様がいらつしやいました。一度御一緒に御伺ひいたしたいと存じますが、金土の午後と日曜の内何時が御暇で御座いませう。御面倒乍ら一寸麹町の方迄御知らせ下さいませ。(静代)

宜敷願ひよ、僕も一寸歸りたいな。(山口)

19

午後淀橋に引越しをする。夕暮に大抵片付が済んだので、夕飯も食はずに外に出て、知らぬ徑を足に任せて歩き廻つた。朧月が空に懸つて、木の葉が鉛の色に光つてゐる上を、風がさら／＼と渡つて行く。蛙の聲が降る様な中に、何の蟲か蟲が一匹藪蔭にジイジイ鳴いてゐる。俄かに月が暗くなつたので、驚いて空を見上ると徑が何時の間にか森の中に這入つてゐる。何の花か花の香が柔かに漂つて来る。森を抜ければ又俄かに明るくなつて、見渡す一面の畠の上には霧が低く置いて、月の光に眠つてゐる。故郷の月夜の景色と、幼い時の月夜の心持が夢の様に浮んで來て、シットリした悲みが自然と心の底ににじんで行く。新しい女が欲しい。美しい女と手をひいて、此月光の裡に遠い／＼國に行つて了ひたい。女は涙ぐんでゐて欲しい。髪の毛が其頸に亂れ

てゐて欲しい。さうして襟頭と手の甲とが特に月の光にほの白く浮んで欲しい。

千枝さんは今鎌倉にゐる。影の女の背は今宵特に恨みがましい。忘るゝと云ふ言葉は果敢ない言葉である。假令悲しく惨ましい事の記憶であつても消えて行くとは果敢ない言葉である。唇の薄い、口の大きい男を夫に持つ影の女は憎らしいが、其佛丈は何時迄も残して置いて置いて勞つてやりたい。併し今宵此月の光に僕と影を並べて行く可き女は、影の女では勿論ない——又千枝子さんでも足りない様な氣がする。

國の城下には廣い野原があつて、秋になると草花が小さく、しほらしく一面に咲く。幼い頃には母や姉に連れられてよく食後の散歩に行つたものであつた。幼心にも草花の上を渡る秋風を悲しいと思ひ乍ら、姉に手をひかれて母の後について行くと、平原を限る遠くの山續きに狐火が見え出す。四つ五つ續いて北に動くと見る間に、何時の間にか先頭の一つが消えて思ひがけない處に又一つ現れる。ふは／＼と漂つて来る様なものあれば、風に吹かれて消え相にするものもある。——思へば僕の心は幼い時に見たあの狐火だ。動きもする、漂ひもする。併し何處を當に動き、何處に漂ひ着く島もなく、唯ふは／＼と宇宙に迷ふのである。消えて了へば秋の夜は暗い。

嗚呼明日は靜代さんが千枝子さんを連れて来る日ぢやないか。狐は又一つ火を點さうとするのか。

(明治四十四年四月)

西川の日記

序

再び西川の日記である。「狐火」以後に整理し得たる彼の日記の一部分をひき抜いて此處に並べて見る。時日は前半が狐火の中の材料の日附と重複して、後半が更に延長してゐるのである。材料排列の方針は「狐火」とは趣を異にしてゐる。前には西川の内面生活の記録を正面にして、その背後に一つの物語りを開展させようと試みたが、今は「物語り」をしようとする野心は全然抛棄してしまつて、唯彼の思想並びにその他の内面生活を断片的に陳列して置くことに満足する。固より彼の生活に發展や連続がある限り、此處に陳列せられたる世界にも亦發展や連續の暗示があるに違ひない。又彼の思想や内面に實際生活上の根據がある限り、行間の意味を讀むに馴れたる讀者は、或は此處に幾つかの物語りと幾つかのエピソードを讀むかも知れない。前者は自分の希望するところである。後者は自分の忌避するところである。西川は好奇心を以て自分の生活を眺められることが特に嫌ひな男であつた。

思想や内面生活は固より個人の現實的生活から生れ來る可き因縁を持つてゐるに違ひない。併し思想や内面生活は徹底的な進行を續ければ續けるほど、益々普遍的觀念的な内容を獲得して來る。個人的現實的生活の描寫に導かれなければ直接に普遍的觀念的な世界の描寫を理解することが出來ない人は、寧ろ始めからこの遺稿を讀んで呉れないことを希望する。西川は特に經驗をアネクドートの形に於いて取扱ふことを嫌つて、それをエッセンスに於いて捕捉することを愛した男であつた。尤も西川と雖も、その思想乃至内面生活の描寫に必要な限りに於いて、その現實的個人的生活を提供することを嫌ふものではない。此處に抄出した部分の如きは、その性質上最もアネクドートの敘述に富んでゐる部分である。彼のアネクドートを嫌ふ性質は最も多く彼の書いた論文にあらはれてゐた。彼の論文に出て來る固有名詞は殆んど多かれ少かれ永遠に價ひするものに限られてゐる。彼は彼の普遍的觀念的な世界に、塵のやうに消えて了ふやうな固有名詞を混入させることを嫌ひしてゐた。

最後に斷つて置かなければならないのは、此處には西川の日記の最も重要な部分が省かれてゐると云ふことである。西川は自分の唯一の親友である。殆んど自分の影と云つてもいい位の親友である。自分は彼の生活の最も重要な、本質的な方面を、断片的な姿に於いて發表するに忍びない。自分は自分の死ぬまでの間に、彼を主人公とした幾篇かの小説を書くことに堅く決心した。さうして此等の小説の材料として彼の日記の最も重要な部分を出し惜んで置くつもりである。固

より此處に抄出した部分と雖も、斷片的ではあるが決してそれ自身だけで理解の出来ないものではないと自分は信じてゐる。自分は讀者に向つてそれ自身だけでは理解し得ないやうな文章を提供するほど無責任な人間ではないつもりである。併し此處に提供しただけが彼の生活の全體でないことは豫め記憶して置いていただきたいと思ふ。

彼は自ら痴人と呼んでゐた。自分はこれが厭味でも氣取りでも又單純な洒落でもなくて、彼がその悲みを笑ひの中に融かし込んだ誠實な命名であることを熟知してゐる。實際彼は、痴愚の名に價するほどの拘泥と逡巡と多情と、重要な瞬間に於ける放心とに富んでゐた。さうして凡ての痴人の生活と等しく彼の生活にも亦その凡ての斷面に於いて一人の異性が立つてゐた。同時に幾つかのエピソードがこれを取巻いてゐた。運命は此等の異性を忍びやかに彼の世界の中に這ひ寄せた。若くは全然彼の豫想してゐない瞬間に於いて之を彼の生活の中に投げつけた。さうして運命は又不思議な徑路を描いてその異性を彼より奪ひ、その上に築いた彼の感情を崩して行つた。彼はよろめいて、苦んで、時として精神的に墮落しながら、又どうにかしてたてなほして來た。固より彼を主人公とする小説は決して此の如き戀物語りを主とするものではない。凡ての經驗は唯彼の内生活を動搖させ移動させ、さうして結局は發展させて來たところにのみ意味があるのである。自分は彼の三十二年間の生活を——彼は三十二年の年に「影の女」と心中した——四篇か五

篇かの小説に書いて見ようとする計畫を持つてゐる。さうして彼の戀愛の歴史も亦彼の生活全體と共に、連続した形に於いて敘述されなければならない。此處に抄出するものは唯彼の生活から生れた若干の思想並びに内面的醱酵の斷片的描寫にすぎないのである。此等の斷片が彼の戀愛の歴史ときり離しても猶多少の普遍的内容を持つてゐることは、自分が抄出者の資格に於いて希望するところである。

久しく捨てたる日録を再び抽斗の奥よりとり出づ。今は冬も過ぎて緑なる春となりぬ。亂れに亂れたる心もやゝ静まりたり。明日よりは再び此處に心の跡をとゞめ置かむ。

昨年十二月二十五日、友某がクリスマス祈禱會の席に列る。會する者は彼の愛人とその女友某子。余獨り未信者として席にあり。彼等が讚美し祈禱するを見、自ら顧みて心安からざりき。月の初めより亂れそめし心の絲の縫れ、茲に於いて愈々加はりぬ。書を読めども心は茲にあらず。夜屢々若竹に義太夫を聴きて一時の忘我を樂みしも、歸りて床に入れば心更に安からざりき。年を越えて一月の五日、手帖のはしに書きつけたる文――

死か。死來らば我喜びて之に面すること能はず。されどやむを得ざるものとして、安んじて、之に就くを得べし。未來の生、後生の姿、死せずして誰か之を明かにし得む。我今にして我がなすべきをなさば、後生も亦その來るべきが如くに来るべし。我が今にしてなす可きは、絶對

の實在を戀ひむことなり。この戀成らざるに死來りて我を拉し去るも、天なり命なり。もし未來の生ありとせば、神を戀ふる悲哀の生活の罪とせらるゝことよもあるまじ。

親子朋友の樂みを樂にあらずとは云はじ。夫婦の語らひを心ゆかずとは斥けじ。されど實在を戀ふる心に比ぶれば、こは影よりも淡き夢幻の姿なり。何ぞ之を以て大實在を戀して遂げざるの悲みを癒すを得む。故に我はこの戀を得むがためには、一切を捨てて悔いじと思ふ。

進みては死せざらむ。死來らば避けざらむ。他の慰藉を捨てざらむ。慰藉去らば追はざらむ。

唯我と云ふものあらむ限り、このやみ難き戀に焦れむのみ。

これ我が決心なりき。而も大實在を追はむには如何なる方法によるべき。我は之を二途の並進にありと思ひぬ。二途とは何ぞや。愛慕憧憬の深き心情を辿り行くはその一にして、靜かなる理路を追ひて實在の不易なる確實性にわけ入り、我が情意の要望と空華ならぬ客觀性とを合一するはその二なり。この二途の孰れを捨つるも、我が心には自ら充ち自ら欺かざる壯嚴の姿あるべからざらむ。故に余は一面哲學を究めて實在の根柢を検し、他面には宗教家の生涯を學びて、思慕の想ひの一日も緩むことなからむことを願ひき。而して我が從來の經歷は、先づ第一に余を基督敎諸聖の膝下に送れり。三月偶々五月會の當番となりて、聖アウグスチヌスの懺悔録を讀まむとす。然るに怪むべきかな、余が宗教的生活に對する思慕の情は此書を讀むに先ちて動搖し始めぬ。

宗教を信ずと云ふ人の心的生活を見るに、權威に壓せられて勇邁自由の精神なきが如きは何ぞや。理性の方面より來る非難の聲に耳を傾くるの度量なく、異趣味には悉く眼を閉して、一向その信條に隠るゝは、一面に於いては卑怯の嫌あり、他面に於いては自ら欺くの罪を犯すものにあらずや。彼等の神に對するや或は畏縮し或は狎褻す。自由闊達を以て高峻悲壯なる人生の事實と面接する勇者の風采は殆んど見る可からざるに似たり。心の震動の廣く深く、清新の色の眼に溢るるものあるにあらざれば、彼岸樂土必ずしも望むに足らざるなり。此の如きが宗教そのものの必然的屬性なりや否やは知らず、余が目撃する多數の信者は、外部の觀察を以てすれば、悉くこの類ならざるはなし。これ或は所謂宗教によりて宗教を求むるもの過にあらざる乎。恐怖によりて安立を求めしものが任意に造り出でたる小蜃氣樓を宗教と名く可くは、余は宗教信者と號するを愧づ。眞正の宗教を求めむとして先づ宗教家に就くは、寧ろ拙策にあらざるか——これ余が疑なりき。かくて幾度か躊躇しつゝアウグスチンを讀むに、彼の熱烈にして燃ゆるが如き信仰の高調は頗る我心を動かし、も、宗教的生活そのもの必ずしも慕ふべからざるはアウグスチンの場合にも亦適用せらるべきが如くなりき。最も深く余を動かしたるは彼の壯烈雄偉なる人格にありて、彼の拒斥的禁慾的なる宗教にあらざりき。彼が呪詛し唾棄せし三十二歳以前の生活にも、猶彼の偉大なる價值はあらはれたるにあらずや。彼はこれあるが故に彼の如き光輝ある生涯を送らむ。

るを得たり。彼と同様の信條に服従する屑々たる敬神者流の生活は、得信以前の彼の生活と比して果して何の尊ぶべきところかある。余は寧ろ眞理の愛のために結果の恐怖を捨てたる無神論者の態度を尊ぶべしとす。神もし居まさは、何ぞ虚偽をすてて至誠をとらざらむや。面從苟合の徒を惡みて心から抗辯するの愚直をいとほしとし給はざらむや。主よ主よと稱するもの必ずしも主の救に入れるにはあらず。主と遠からむとして而も主の中に在るもの却て多きにあらざるを誰か知るべき。我は神を見るに先ちて神を信ずと云ふの虚偽に陥らむよりは、寧ろ滅亡の火の中に入らむ。

かくて我は神を人格的に考ふるの先づ證明せられざるべからざるを思へり。況んや戒律の神ヤーエーの絶對的實在なることをや。我は恐れずして先づ價值と實相とを捜さむ。兩途の合一するところ即ち思慕するの神なり。神もしこの外にあらば、余は之と辯争することを潰聖と思はず。故に余が先に擧げたる兩途の中、哲學の途に従ふは依然として前の如し。宗教の途に従はむと云ひたるものは、今は改めて價值の途と云はむ。價值を尋ねつゝ味ひつゝ進む心情的經驗の途と云はむ。此兩途を辿り行く先に我が宗教はあるべし。余は余の宗教に畏縮壓迫の跡なからしめむことを欲す。余が現在の決心は此處に在り。

而して哲學の途に横はれる問題として、余の最初に逢着すべきは眞理とは何ぞやに在り。價值

の途に於いて先づ身を置かむとするは、自由にして拘束なき態度を以て宇宙及び人生に我が情意を反應せしむるの活動、換言すれば余の意味に於ける美的活動（道徳的活動の理想も亦此處に在るべし）に在り。余はこの二途を追ふの外他に道なきを信じて、今より將にその探討に向ひて出發せむとす。死か生か。我が進路は唯茲に在るのみ。

(三八、三、一八)

2

新しく勉強の計畫を立ててから二年餘、學校を出てからも一年になる。僕はこの間何をして来たことだらう。

無だ。全然たる無だ。僕の心は宗教を離れて暫く肩の軽くなることを覺えた。僕は新しい元氣を以て暫くの間考へて、讀んで、書いた。併し僕の心は要するに宗教を離れて何處に往く可きかを知らなかつた。僕の「自由」と「開放」とには内容がなかつた。

かうしてゐるうちに學校卒業後の失望と貧乏と空漠とが僕を襲つて來た。僕は全然何處から手を着ければいいかを知らなかつた。僕の生活の遠景は、精神的にも、社會的にも、經濟的にも、まるつきり霧に覆はれてしまつた。さうして精神上社會上物質上に於ける現在の不安は霧中に彷徨してゐる僕の肚を風のようにチク／＼と螫した。

僕はまるつきり本を讀まなかつた。讀書の要求が内から湧いて來なかつた。唯讀書せざる不安が外から僕をイラ／＼させた。併し稀に書に向へば、捨てて來た過去の畫面と、現在を覆ふ暗くして顫動する影と、僕を取巻いて花火の様にチラ／＼してゐる、面白さうな、手の届かない色彩とが行と行との間に躍り狂つた。さうして僕は要するに讀書することが出來なかつた。

さしも旺んであつた思想上の要求も殆んど消散してしまつた。僕は唯現在の不安と焦躁とを動物のやうに胸部と腹部とに感じてゐた。僕は唯目前現實の空虚と悲哀とを弄んでゐた。さうして最も悪いことは、僕は自分の生活の醜さをば何の羞恥なしに暴露することをメリツトとする思潮にかぶれてゐた。醜いのは人性の本來であつた。人性の本來なるが故にそれは恥づるに及ばざるもの、無駄話の話題としても赤面するには及ばぬものであつた。

今日僕は過去一年の間僅かにチラホラと書いて來た日記を讀みかへして、自分の思想と人格と文章とが如何に低度の自由によつて損はれてゐるかを思つた、さうして恥かしくなつた。昨年五月、四日、五日、六日、七日と珍らしくも續けて書きつけて置いた文章を見よ。

(参照) 今日から又日記を書き始める。三年振だ。その間には僕の考や嗜好も大分變つた。一つの例が文章も言文一致でないと面倒くさくなつた。日記も勿論それで書く。同時に書くこと

にも飾り氣がなくなつたらう。

晝頃しが来て手放しの愧氣を云つて行く。「君はまだ女を知らないのか。それぢや君は片輪だ」と言つた。

金が欲しい、金があれば旅行に行く。芝居を見る。本を買ふ。酒を飲み、藝者と遊び、女房を持つて見たいと云ふ氣も亦チヨイチヨイと動く。

新緑は直に暗緑になる。快活から幽鬱に變るのは實に早い。併し今年の緑は未だ老いぬ。戸山

原の初夏の景色は實に壯んだつた。然るにMは射的場のうしろで欠伸をした。

Verführerの慾望が肚の中に動く。人には一生のうち唯一度しか出来ない表情がある。僕は此の如き表情の美に憧れる。この表情を貪り見るのは正しいことではない。假令正しくても僕には出来ない。併し若し刹那の慾望が全人を呑み盡すことがあるならば、僕は何の罪よりも先づこの表情を貪り見るの罪を犯して見たい。

こんなことを書きながらも、他人に見られたらと思ふ氣がさす。僕は實際こんなことを思ふ人間なんだと公言する程の勇氣がないせむであらう。併しこれまでの日記は自分に對しても詐つてゐた。これからはせめて自分だけにでも正直で無腹藏でありたいと思ふ。

併し僕はもうこんな調子の低い正直と無腹藏とに堪へられない。僕は一日も早くこんな心の調子から脱却したい。

併し本に向へば依然として様々なものゝ影が行間に躍り狂つてゐる。思想を纏めようとすれば散漫にしてたよりが無い。社會上經濟上の遠景は依然として閉されたまゝで、現在の不安が刻々に僕の肚の下をチク／＼と蝕してゐる。僕の腰はまだ抜けてゐる。僕の足はまだよろめいてゐる。凡ての努力は——微動だも猶僕にとつて Fremd である。

僕は何時になつたらこの病ひから癒えることが出来るのだ。

(四一、五)

3

解剖書

思想上の興味極めて薄く、殆んど一流の無理想安住派に墮せむとしき。讀書せず。

女性に對する慾望熾んなるも戀するほどの落付きは生ぜざりき。従つて外形に於いては放縱、内心に於いては寂寞。最後の關係に立至らざる範圍に於いて、殆んど女性に對する謹慎を缺如し

き。秋波、戲言、握手——試みに酒中の余を見よ。

酒、女、義太夫、芝居、皮肉、冷笑——これ余が外部の生活なりき。

荒涼、寂寞、悲哀、自嘲、青眼——これ余が内部の生活なりき。

現在に生くるもの、空なる感情に生くるもの、情感の不満の味に生くるもの。

酒中のたのしみの解剖——適度の興奮を得て氣分軽くなる。雍塞せる水路を掃ひて水行を快ならしめたる心持。この水路を奔流し行くものは異性に對する興味なり。余は羞恥の念少くして女に戯るゝを得たり。

女性に對する興味解剖——(一)觸感。血肥りしたる暖かなる白き手、白き肩、冷き髪の頬ざはり。(二)嗅感。油の臭ひ、香水の臭ひ、女の臭ひ。(三)聽覺。銀聲、調子高く乙女らしく響く聲。(四)視覺。顔と肉との色、身のこなし、羞しさうなる眼、眼と眼と相逢ひて燃ゆる時——酒を飲む時、女義太夫を聽く時、途上車中に若き女と逢ふ時、若き女ある店に物買ふ時の余を見よ。(五)女の柔かなる心を愛す。

皮肉冷笑の興味解剖——要するに優勝の感なり。余は目がきくぞ甘くないぞと云ふたのしみなり。

近來の余は全く以上のために生き來れり。

二 さすらひ (第二)

1

我が骸と共に火中すべき日誌を再び書き始める。

悲しい、苦しい、身をきるやうな戀をして見たい。今、事情は具備してゐる。然るに何事ぞ僕の心はこの事情に對して反應するの力がない。悲哀の泉は鎖されてしまつたのか。僕の心はとうに死んでしまつてゐたのか。僕の心に切實なる感じは、唯何事に對しても切實であり得ざる自己の衰弱を嘆くの情のみである。

一生の大機を僕は此の如くにして無意味に亡つてしまつた。結果は何事も來れ。僕は痛切にこの結果の苦みを感じて見たい。嗚呼、無感覺！ 無感覺！ 汝は僕の最大の嘆きだ。

僕は遊ぶことの外出來ない男かしら。どんなに真剣なことでも、平氣で遊戯をするやうに通つてしまふ男かしら。何處からか鐵拳が飛んで來て、僕の頭を思ふ様張つてくれるといふ。その痛さを飛立つほど感じて見たい。

(四二、三、四)

2

色々な夢を見た。故郷に關係したものが多かつた。何處かの家の玄關の前に蓆のやうなものを敷いてその上に横になりながら、母が子供に乳を飲ましてゐる。その子供は他人のやうでもあり又僕自身のやうでもあつた。安く、しめやかな處は世界の中に母の胸より外にない、自分は今世界の荒んだ生活から脱れて來て、母の乳房を吸つてゐるのだと云ふやうに思はれて、何だか非常に心細いやうな、寂しいやうな、安心したやうな氣分になつてゐると、母が少し身を起した。下が漏つてゐる。何時の間にか玄關に人が出て來て、「やあい、小便を垂れやがつた」と云ふ。見れば水がその家の壁から流れ出して、あたり一面が濕つてゐるのである。僕は自分ない罪を塗りつけられたのが非常に口惜しかつた。不圖下を見ると本らしいものがある。黄色がかつた雪に埋もれて、黒い表紙の本が一冊出て來た——僕は此處で眼が醒めた。

悲哀の情が睡裏の腦に動いて、夢の中に一つの事象、一つの世界を創造したものであらう。事件は荒唐だが、感情は實際悲しい、しめやかな、心ゆくばかり哀切なものであつた。蒲團の中にじつとしてゐながら悲しい心持でこの夢の行末を追ふ。事件は荒唐でも盛られた感情は眞實だ。Romantik の心である。氣狂ひの心である。